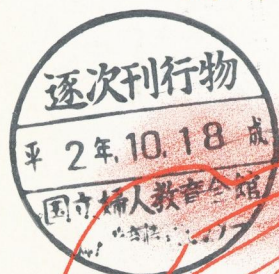


自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

We

ウ イ

新しい家庭科



100号記念号

11
1990

特集 高齢化社会がやってくる

季節のうた

仙田敬子



姉様人形

茶の花や
出あいの月日
ふうやかに

高
齢
化
社
会
が
や
っ
て
く
る

●インタビュー 樋口恵子さん (インタビュアー・半田たつ子)	2
—高齢化社会は五つ星—	
●命のぬくもり 器(うつわ) ・浜 文子	10
●人間尊重の精神が基本 ・金谷千都子	12
●高齢化社会がやってくる—家庭科への期待— ・荒井利春	14
●ロスのシニア・シティズンズ・	
ビューローで見たもの ・佐藤 葉	16
★Weの仲間・北欧を行く	18

座談会

100冊のWeとともに —Weのこれまで、そしてこれから—	34
武田秀夫・磯部幸江・福島澄香・諸橋泰樹・川名はつ子・ 半田たつ子・司会 中嶋里美	

新しい
家庭科を
創るために

(小 学 校) 子どもたちの食事の周辺(2) ・村田汀子	46
(中 学 校) 暮らしを考える延長に 「おい」の授業を ・境 洋子	51
(高等学校) 高齢者問題と福祉 ・矢代節子	56
高齢化社会がやってくる ・高橋香代	61

連
載

荒野のバラ／地域再生の試み(その2) 「風成の海は碧く」	田中裕一 66
家族と家庭科／日本の独立一個人の尊重から天皇御一家まで—	酒井はるみ 70
大学生たちと歩く／ゼミ合宿—学びを紡ぐ	小沢牧子 72
男性学への契機—魔男の宅急便／ミッドナイト・クック	諸橋泰樹 74
私の朝鮮史／安重根 (アン ジュン グン)	岡百合子 76
食べもの文化史／台所と食卓	石川尚子 77
KNOW HOW 共学家庭科／'82年の教育課程改訂にむけて(その3)	湯沢静江 79
19歳の日記／「仕事」	金森土岐 80
広がる運動、広がる人の輪／教育塔を考える会(2)	中村英之 81
波／人間って、不思議	半田たつ子 82

○ひと 田中裕一さん 33

- イキイキぐるうぶ 78 ●わたくしからあなたに 84 ●私のすすめる一冊 85
●Weになんでも言おうなんでも聞こう 86 ●Weの会通信 88 ●Weの読書会だより 89 ●泉 90
●十字路 92 ●アンテナ 94 ●編集後記 96

インタビュー

樋口恵子さん

・インタビュアー 半田たつ子

高齢化社会は五つ星

夜遅くかかってきた電話で、樋口さんのおつれあい、新井直之氏が、軽井沢の別荘で倒れられたこと、医師でもあるお嬢さんの的確な判断で幸い最も適切な処置がとられ、危機を乗り越えられたことを知った。夫と共に死の深淵をのぞいた私、二人の共有の体験。そこに見た問題などせきを切ったように語り合った。

人間の一生に、そう幾度もぶつかることはない突然の衝撃に、樋口さんが何を感じ、考えられたか、電話の内容もお伝えしたくなる。が、やがて樋口さんご自身が語られるであろうことを、たくさんの読者の一人として期待しよう。

京都市で開かれる第9回「女性による高齢化社会シンポジウム」を控え、ただでさえ多忙な樋口さんは、甲府の病院から駆けつけて、インタビューに応じて下さった。



■プロフィール

東京大学で美学、ジャーナリズムを学ぶ。時事通信社などで働いたあと、'71年から女性問題を中心に幅広い評論活動に従事する。

'86年から東京家政大学教授。「家庭科の男女共修をすすめる会」世話人。「高齢化社会をよくする女性の会」代表。

●「高齢化社会をよくする女性の会」発足のころ

——「高齢化社会をよくする女性の会」も発足して八年でしようか。私も第一回の新宿でのシンポジウム、神戸、埼玉と参加しましたが、最初は介護の辛さなどを切々と訴える声に、胸が詰まったことを覚えています。そのうちにファッションショーなども盛込まれて、明るくアクティブな面も出してこられました。この間の参加者の問題意識の変化、世の移り変わりなどから伺いましょうか。

樋口 確かに第一回のころは、男の人は高齢化社会は女の問題という言葉を使いながら、現実の介護が女まかせであることは当然と思い込んで、その上現状を知ろうとせず、目をそむけていましたね。まだ「家制度」とか「女性の美德」「娘の義務」とかに女達自身が縛られていて、辛くても辛いといっちゃいけないみたいなどころがありましたね。ですから「辛い」「大変だ」「なぜ女だけ？」というのを、ちゃんと Saying it, というのが第一回だったんですね。女の人介護が辛いと言う時は、目の前にもっと辛い身動きがないお年寄りがいるものですから、かなり勇気のいるものでした。

第一回のシンポジウムの準備中、こんな電話があったのですね。「勝手な人ばかりが集まって……」というのです。彼

女自身がお母様をかかえて身動きできないわけですね。だから代わりにしつかりやって下さい、というのじゃなくて、最初は少し自由に動ける同じ女に向けての怒りになって出てくる……というわけですね。だんだんお話ししていつてわかっていただきましたけれど……。ですからここに来て、訴えたくても、それができない大勢の方たちの思いを受けて、会を進めようと、私は最初の会で皆さんと語り合いました。

——参加できた人にとっても、積年の思いを語る場所がやっとできた、待ってましたという感じでしたね。

●密室の看（介）護ではなくて

樋口 半田さん、どう思われます？ 私、一週間ほど、生死の境にいる病人とともにいました。特に集中治療室にいる間は、毎日面会にくることは義務づけられますけれど、五分の面会時間でしかないんです。ですから近くにホテルをとりまして、まあ私としては、珍しく外界から隔絶された何日かを送ったんですね。

——病人の看病専一という日々は、非日常的なものでね。

樋口 そうそう。余りみんなを騒がせたくないから、最少限度の人だけにだけお知らせしたので、私は東京の住まいからも軽井沢からも消えちゃって、外国に行っていると思ったり方もいたらしい。要するに、私の日常的な世界や人間関係と

は切れて、精神的には病人とだけ向かいあっているという日々だったんですね。死んじやうんだらうか、命が助かるとしても、これからどうなるんだらうかとか、その時の病状にあわせて、あれこれ思いわずらっていたら、ほんの一瞬ですけれど、ちよつと精神的にへんになりかかったんです。まるで透明な袋の底に入ったみたい。家庭という密室で介護疲れから無理心中する人の気持ちが少し分かったんです。

——それは私も感じました。無理やりにいいと思う病院に入っていたきましたので、お部屋のぜいたくは言いません、ベッドがあいたらお願いします、と必死に頼みましたから最初は二人部屋だったのです。そこから最重症患者の部屋に移され、やっと快適な個室に代わったのですが。よかった、これでどんなになつても、他の御病人に御迷惑かけないですむ、と思いました。ところが個室は密室、付添っている私自身、部屋から一步も出なくても用事が足りるんです。食事は運んでくださるし、シャワーはあるし。全く途絶された空間……。外界は、窓から見下す中庭だけ……。電話もあるのに、かける気にもならない。三、四日おきに夜遅く家に帰ると、新聞もテレビもひどく遠い別世界。「どうでもいいことに何でこんなに騒ぎ立てるんだらう」って、すねたような気分になりましたね。外界と没交渉、あえいでいる人とだけ向きあっている、というのは異常です。

樋口 私なんかどう転ぼうと、ずっと家庭の中に埋没するわけじゃないんですし。そういう見通しのある私にして、ふいっと妙な気分になったんです。初めの御質問にもかかわるんですけど、病人と介護者と二人セットで、たこつぽのような密室の中におかれている家庭を解放し、外の風を入れ、高齢者にも介護者にも、社会的な存在として人間関係が保たれなければ……と言いつつ、やり続けてきたわれわれの会の活動は正しかったのだな、って自信を持ちましたよ。

——ほんとうにそうですね。

樋口 数年前、アメリカのホスピスケアの見学に行きました。アメリカでは終末医療に金がかかりすぎる、という経済的理由から始まったのかもしれませんが、プラグマティズムの国であると同時にキリスト教に支えられているから、ひどく精神的であつたりして、どっちもウソじやないなつて気がしたんですね。

ともかくホスピスが全米で五百しかなかったのが、あつというまに千五百になったという、そんな時期に行つたんですね。その時理解できなかったことで、今度すうつと分かったことがあります。

ホスピスケアは、要するに、末期のガン患者が、必要以上の濃厚な医療は受けられないで苦痛を除去し、在宅なり、ホスピスケア病棟なりでできるだけ自由で日常的な日を送るわけで

すね。アメリカは、チームの国だからドクター、看護婦さんはもとより、ケースワーカー、各種セラピスト、宗教面はチャブレンがいて、それにボランティアが二、三人つく。もちろん家族がいますが、ボランティアが日常的にはいちばんひんばんに世話をしますね。すると、そのボランティアを励ますボランティアがいるんです。また本人の死後、遺族を一年間アフターケアするんですね。そこまでしなくてもいいんじゃないか。余程人手があまっているのか。次の患者もいるだろうに。また、ボランティアを励ますボランティアっていうのも、まわりくどいことをしているなあって感じで、意味が分からなかったんです。それが今度分かりました。

たった一人で私が病人にずっと付いているっていう経験が浅いものだからだったんですね。身動きできない病人や、死の淵まで行った人に付いている人に対しては、その人のためのボランティアが必要なんだということが、よく分かりました。

●仕事があるから介護できる

樋口 私たちの会は、その時、その時の女の状況に応じ、痛いことは痛いと言いましよう、声を挙げましようと言いがらやってきました。第二回の関西の会で、何故女だけが看取らなければならないのか、そのために仕事をやめるの

は美徳だろうか、という疑問が会員から吹きだしたんですよ。

あの頃は、ちょうど県レベルで、婦人問題対策室が次々にできたころでした。ある県で、中学の教頭をしていた方が、婦人問題の担当者として白羽の矢が立ち、初代の課長になったのです。その方の県に、講演に呼ばれて行ったとき話を聞きました。ご夫君は校長でおしどりでやってきたんだけれど、シユウトメさんが倒れて、寝込んだんですね。そうしたら、夫をはじめコジュウたちから「ここまで勤めあげたんだから、仕事をやめて、付き添ってやってくれ」と言われた。ところが彼女は第二回の記録集を読んでいたから、「せっかく県が女性問題のセクションを作って課長職に登用されたばかりなのに。きちんとバトンタッチできるような仕事をしないと、だから女は家庭の事情で仕事を放りだすって言われるでしょう。私は辞めません」って宣言したそうです。

「その代わり、おばあちゃん、老人ホームにいれないで（こころへんがまた一寸むずかしいところだけれど、そうした地域ではまだ老人ホームには偏見がありますから。今だってそうなんだから、当時は余計大変でした）、家で看ます。ですから皆さんも協力して下さい」って。

その頃は、随分きついヨメじやと騒がれたらしいんです。でも、この方は、市のシルバー人材派遣センターに頼んで、

五十代の女性を二人頼んだんですって。朝、出掛ける前に、朝食の食事を作っておき、それを温めて食べさせてもらう。シルバーさんの分もあるので、一緒に食べてもらう。後片付けぐらいしてもらって、夕方から自分か夫が面倒みる。コジユウトたちにも、「親なんだからね」と言って時々代わってもらう、「それで続いています」と言われた時は、うれしかったですね。

——そういう意味で「高齢化社会をよくする女性の会」がしてきたこと、それだけでなく「会」の存在自体が大きい意味をもちますね。

樋口 ホント、そう思いますね。私たちの会ばかりではないけれど。会が始まる前は、「私はシュウトの介護のために仕事をやめました」という怨嗟の声ばかりでした。ところがこの数年、「私は仕事があるから介護していられます」という方が少しずつふえてきました。でも最近の労働省の調査で、要介護者をもつ女子労働者四人に一人が退職している事実を、忘れてはいけないと思います。

●現実からの政策提言を

——この頃は、皆が口を開けば「高齢化社会」と言いますね。行政は、金のかかる大変な社会になる、と言う。抜目のない企業は、早速シルバー産業に乗り出して、これがまた成長産

業になっているんですけど、そういう対処の仕方はおかしいと思います。手厚い医療ケア付きのマンションのような有料老人ホームが次々にできて、お金のない庶民には高嶺の花でしかない。

「高齢化社会をよくする女性の会」がやっていらっしやったことは、お金にあかせて素晴らしいホームを捜し、自分または自分と配偶者がそこに入れればよい、という個人的に解決できる道を探らなかった。

また学者先生の話を聞き、知識を殖やして、あれこれと評論を下すのではなくて、自分の置かれている状況をはっきり見定めるところから始めて、政策立案上の提言までしている。また、生活をしながら、自分たちにとって希望のもてる社会をデザインしていった。だから皆さんが勇気づけられたのだと思います。

樋口 一九七七年頃の厚生白書は「日本のお年寄りとの同居は社会福祉の含み資産である」って言ったんですよ。私たちは、その言葉に怒って「会」を始めたような面もあるんです。この頃の厚生白書は違いますものね。だから論調も変わってきたようです。この間の国民生活基礎調査でも、六五歳以上の人で子供と同居している人が、まだ六一%いるそうです。子供と同居していると言えば、今までの常識ですぐに安心しちゃうんですけど、六一%の中には、九〇歳ぐらい

の親が、六〇歳過ぎの子供と共倒れ寸前の状態にいるという例もあるんです。私たちは、ただ不満を言うんじゃないで、現実の変化を等身大に世間に示して、新たな政策を作るための提言をしてきたと思うんです。

—— 諸々の運動体が政策提言集団となった時、運動は実を結びますね。

樋口 そうです。スウェーデンの高齢化率が一六・七%でしようか。一五%を超えて数十年続いているわけですよ。西ドイツもイギリスも一五%を越え、日本よりはるかに豊かな福祉を行って、別にどこも潰れていないじゃないか、つて言うんです。ですから、こんな貧弱な福祉のままで、金がかかる、潰れる、と言うなら「豊かな国、ニッポン」なんて言わないでほしい。

さらに、全国の母子世帯八〇万、これは平均収入の四割切っているんです。これが百万ぐらいに増えるかもしれないけれど、この人たちが老後に突入した時の生活の苦しさは、身の毛がよだつ。こういう女性の年金なども、これからのテーマにしたいと話し合っているんです。雇用機会均等法は、確かに大学卒の女に入口は広げられ、三十五過ぎたおばさんのはるか頭上を素通りしてしまっているんです。女性問題は再び労働の問題に返ってこなければならぬと思っていますが……。それから高齢化社会は、マイナスのイメージでと

らえられることが多くて、確かに大変なこともたくさんありますが、高齢者がふえた社会というのは、逆手にとって考えてみると、とってもいい社会ではないでしょうか。

—— 働き盛りの男だけがさばっている社会よりも、からだも弱くなり、ピンピンと働けなくなっているも、高齢者の知恵とか経験とかが、尊重されている社会は、はるかに暖かみのある柔らかな社会ですね。

● 高齢化社会は五つ星

樋口 老いの豊かさがその社会の象徴となることを目指しています。日本が豊かだ、ということと、老いが豊かだということがパラレルにおかれなかったらおかしい、と私は思います。私たちの活動も老いを豊かに、「豊かな国の貧しい老後」ではおかしいということを、ずっと言い続けてきました。

私は、「高齢化社会は五つ星」だと思っていますよ。

—— その五つとは？

樋口 東西ベルリンの壁が崩れたことに象徴されるように時代のキーワードは、ボーダーレス、壁が崩れる、ですね。五つともみんなそこに関係があります。

一つは、高齢化社会は、平和でなければ訪れません。イラクがいつ高齢化社会になるかわかりませんわねえ。戦争か平

和か、その壁を崩す、ということです。

二つは、人間の生き方として、生物的生き方から人間的生き方へ……下世話で言うなら、人生二毛作ということでありまして、男も女も、仕事や子育てやいろいろなしがらみの人生を突き抜けて、個として生きられるというのは、長生きできるとは違ったからです。

三つは、障害者と健常者の壁が崩れたのが、高齢化社会なんです。私も国際障害者年のころは「私、健常者、あなた障害者。私はいい健常者だから、あなたを差別しないよう努力します」って感じだったんです。しかし、高齢化社会が進んでくると、「健常者と障害者」「いい健常者と悪い健常者」というのではなくて、「今障害者である人と、これから障害者になる人」とでしかないことが見えてきて、その壁が崩れたんです。

私の場合、母がしっかりとボケて教えてくれました。また私自身も三年前にムチウチ症をやったりして、首が固定されていると、道の僅かな段差にもつまずきそうになるんですね。障害者のための町づくりは、健常者にとってもいい町になるんで、高齢化社会はその壁を崩してきています。町づくり家作り、カッコイイだけで賞を貰っていたころとは変わってきましたね。

四つめは、わが家族論の持論でありまして、血縁の壁が崩

れる……。

——それは、まさにそう、ね。

樋口 夫婦別姓なんていうのも、その一つですけど、人生五十年、子供平均五人、どの家にも長男あり、ヨメは世世代代外部から調達する子産み労働力——これが通用する世の中では人口論的になくなってしまうたのですね。高齢化社会というのは、死亡率が減って、出生率が減る、というまさに人口の構造的変化なのですが、だから第二世代が共々高齢化して共倒れになっちゃう。そこへもってきて、三十代からは、少子時代でありまして、「嫁入り」要員がいなくなっちゃうんです。

去年、総務庁が行った調査ですが、男と女をはっきり分けてデータを出しています。三十代から六十代までの中年・熟年層で「年をとって寝たきりになったら、誰にみてもらいたいですか」という問いですがやっぱり変わったと思った。ヨメが減っていますよ。

男は相変わらず配偶者を頼りにしているんですが、女はヨメからムスメに移っているんです。私は、性別役割分業には絶対反対だし、介護をすべて女に押しつけて、ろくな評価もしないでいることに、腹を立てているけれど、高齢化社会を女がより多く支えていくことに「否」は唱えないんです。だって寿命が違うんですもの。あんまり男が甘ったれて何もし

ないから「撃ちてしやまん」と言いたくなるけど。だからこそ、女が提言することをきちつと受け止めてほしい。やれって言われてハイッてやるのが女じゃない。高齢化社会の主役はこっちだって言うんです。

この間もあつたけれど妻がボケたからって無理心中させられちゃたまりませんよ。介護疲れの殺人者は、いつも男です。日本の女房が介護に疲れたからといって、亭主を殺している例はめつたにないのに。こういうことを含めて、男たちがせめて日常的に自立できるように……。二人分の家事なんて、その延長線上にあるんですよ。それができれば助かったやうのに。だから家庭科の男女共修は、われら女性のいのちがけの運動なんですよ。

——そうですとも。

樋口 夫を大事にしたつもりで台所に入ると言っている女性がまだいますが、大事なら真面目に律義に生きてきた夫の晩節を汚さないでくල්て。無理心中なんて、生き残りや殺人罪ですよ。

ですから五つめが、性別役割分業が破たんして崩壊せざるを得ない社会、ということですね。家庭科の男女共修の問題を含めて、女の運動が提起してきたことは、性別分業を変えんということ。それが最も求められるのが、高齢化社会なんですよ。

さっきの調査には「寝たきりになった時、誰に面倒をみてもらうか」の間に「家庭奉仕員と老人ホームと家政婦」という非血縁三点セットが選択肢にあるんですが、それを選んだ男は十%そこそこなのに、女は二十五%近くなんです。つまり三十代から六十代の女の四人に一人は、家族以外の非血縁を選んでるんです。だから血縁の壁を破っているのはなると言つたつて女なんです、だから私はこのことを「血縁から志縁社会へ、共倒れから共立ち社会へ」って言っているんです。思えばトモダチというのは、血縁ではない個人が親密な人間関係を自らの志で選びとつたもの。そうすると「血縁から志縁へ」ということになりますね。

長寿社会とは「一度の人生、二毛作」「男も女もおのが志をもちうる社会である」。いまや、わが子も地球の隅々で働かなきゃならないのですから、血縁だけを頼つてはおれませんが、男の役割ががんにがらめの社会より、それが崩れた社会の方が、血縁の壁に囲い込まれたよりも、志縁で豊かな人間関係を持てる社会の方が、ずっと暮らしたい。だから私は「高齢化社会は五つ星」って言っているんです。

——そのキャッチフレーズ、明るい展望を実現させるためにも流行らせましょう。甲府の病院から直行してインタビューに応じて下さつて、ありがとうございます。

—— 命のぬくもり ——

器（うつわ）

てのひらの
くぼみに
支え持つ
栗のごはん
豆のごはん
巡る日々の
飯の器
両の手に
抱える
菜の花
紫陽花
女郎花
通う季節の
花の器

浜 文子

器よ
物を掬い
物を受ける
揃えた両の手の形の
ゆるやかな曲線の内に
あふれる想い
湛える命
満ちてゆくものを
包み
抱え
ここからむこう
連なる永遠を
手渡す器よ

女よ
羊水を湛え
命を運ぶ
器よ

夢

祈り

盛られぬもの
はない器に
しずかに盛る
日々の糧

飯の器

花の器

習わしにした

愛を

満たし

食卓に並ぶ

器のゆたかさ

女よ



●●●高齢化社会がやってくる●●●

人間尊重の

精神が基本

金谷千都子

一昨年のことだが、ヨーロッパの福祉の現状を知ろうと旅をした折、ストックホルムでイブニング・ケアのチームに同行し、訪問ケアの実状をつぶさに見ることができた。

ご承知のように、福祉先進国であるスウェーデン、デンマークでは、二十四時間体制で在宅介護を行っている。ヘルパーやナースが老人や障害者の家へ出向き、生活面での介助や介護、そして治療を行い、彼らの自立生活を可能にしているのだ。必要なら朝昼晩、何回でも訪問するし、コールがあれば真夜中だろうと急行する。自力で寝返りができない人のためには一時間毎に寝返りさせるためだけに訪問するのとこの。

私が同行したイブニング・ケアは夕方五時から十時までの間に、ナースとヘルパーが一組となって担当地区内のケアを

必要とする人を訪問し、夕食をとらせ、着がえさせてベッドに寝かせるなどのサービスをする。この仕事を行うのは地方自治体であり、ナースは県、ヘルパーは市区町村の職員、つまり二人とも地方公務員である。

一方、ケアを受けるのは日本のように独居老人や老人のみ世帯に限らない。家族がいようと老人は老人、障害者は障害者としてサービスの対象となる。彼らは一般の人同様に自分の意思と力で自分の人生を営む権利をもっているからだ。実際に訪問した家に夫や子どもが在宅しているケースが何件もあった。でも、その家族はヘルパーやナースが親や夫、妻の世話をするのは当然としてまかせている。つまり、老人や障害者をもつ家族のために他の家族が生活を束縛されたり、不自由になったりしはしないのだ。中に片足切断した中年の男性がいたが、彼の妻はフルタイムの仕事が続けており、日中、夫はひとり家でいる。夫の介護のために妻が職場を離れることはない。これも、密度の濃い在宅ケアの賜とみていいだろう。

日本でも超高齢社会を前に福祉政策が進められ、在宅福祉推進のための10カ年戦略が打ち出された。しかし、どうも日本の高齢者福祉の考え方はヨーロッパの国々と異なるように思えてならない。対策が後手後手に回るとか、予算のかけ方が少ないという問題ではなく、根本的に福祉の理念という

か、人間に対する考え方、あるいは社会はどうあるべきかという基本的な捉え方が違うのではないだろうか。

この点については、過日、東京都立大名誉教授の唄孝一氏が、世田谷ふれあい公社の会報で述べておられたが、日本の老人福祉法がとんでもない誤解を示しているのだ。同法の第二条に「老人は多年にわたり社会の進展に寄与してきた者として敬愛され、かつ健全で安らかな生活を保証されるものとする」とある。

つまり、老人は社会に貢献したから尊敬するという考え方で、これではまるでごほうびか取引きとして福祉が成り立っているようだ。そうではなくて、人は人だから尊重され、人権が認められなければならないはずだ。日本の福祉に今もって「施し」の感があり、「ごくろうさま」の体裁がつきまとうのはこのためだと思う。ヨーロッパでみた限りでは、老人だから大事にするのではなく、老人は生命ある人間だから大事にするという考え方である。だから老人も堂々と当然の権利として福祉サービスを受けている。

社会とは、そこに住み生活する人々が健康で安定して、自分の思う通りに暮らせるような場であるべきなのだ。そのための秩序、制度を作り、守る。行政機関はその秩序を守るために機能するもので、中に自力では社会の他のメンバーと同じようにその恩恵を受けたり、寄与できない人がいるから、

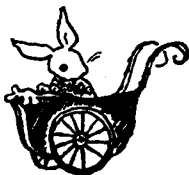
それを可能にすべく力を貸したり、協力するのも行政の重要な仕事のひとつなのだ。

高齢者福祉に関して行政がなすべき具体策はたくさんある。第一に所得保障として年金制度の充実と安定。第二に住宅の保障。だれもが健康で文化的な生活を営む権利をもつものとして、それを可能とするよう弱者にも住みよい住居の提供と経済的援助をも包含した施策。第三に人手。自力で生活したい人には介助、介護の手が得られるようにする。それは、どこにだれと住んでいようと平等に与えられねばならない。そして、もちろん医療や自立のための器具、道具の給付も必要である。

これら、生活全般にわたって人間らしく生きられる条件を設けるのは行政の責任であり、それを実現するには、先に述べた、人は人だから尊重される、そしてだれもが平等に生きる権利を施行できるという思想がなければならないだろう。

この人間尊重の理念を国民の心に根づかせ、福祉こそ文化的社会のパロメーターだという国民的合意が不可欠ではないだろうか。

(生活コンサルタント)



●●●高齢化社会がやってくる●●●

高齢化社会がやってくる

——家庭科への期待——

荒井 利春

これからの暮らしの道具や住環境を、ハンディキャップをもった人から計画していく必要があると考え、自分の研究活動をハンディーデザインと名付けている。日々、様々な能力障害をもった人の生活現場でデザインの実践研究をしている者の一人として、一言お伝えしたい。

●暮らしの基本的問題

人口構成の高齢化が人類史にない早さで進行し、高齢にもなる様々な問題が大量に発生することに私たちは直面しているが、高齢者の生活環境で生じている問題は時代が高齢化するしないにかかわらず、基本的な暮らしの問題であることに目を据えておかなければならない。つまり、高齢化社会だから問題なのではなく、私たちのこれまでの生活観や人間

観、その表れとしての道具や住環境の在り方に問題を内在させたままで、暮らしが進んできているところに問題があるといえる。したがって、高齢者の問題を考えるにあたり、「高齢者対策」とか、「弱者対策」といった後付的発想ではなく、ものごとの始まりから考え直す新しい発想が必要となる。新しいといっても、ごく当たり前のことなのだが……。

●不連続な人間のイメージ

公営住宅に生活して驚いたことは、浴槽を自分で購入する方式だ。裸になって風呂に入ろうと思ったら、浴槽が無かったという程度のことなら笑い話ですむのだが、据置式の浴槽だと洗い場から浴槽の縁までの高さが60cm近くなり、幼児が入るのに一苦労だ。出る時は浴槽の縁から濡れた洗い場の床に跳びおろることになる。お腹の出た妊娠中の女性が入りするのも困難となる。ましてや、足腰の弱くなったお年寄りには危険な場所となる。公営住宅の公共性の概念に問題が内在している。私たちは公共の場に登場する幼児から高齢者までの連続した人間像をとらえ、物と人の相関を丁寧に考えた安全で使い易い当たり前の設計をすることを忘れていた。また、そういった当たり前の設計を要求することを鍛えられていない。

●ハンディキャップの概念から

国際障害者年を契機として、街の中に「車いすトイレ」が作られた。車いす使用者にとって活動空間を獲得する基本条件の一つが自立的に使えるトイレの存在であり、良いことは言うまでもない。だが、車いす使用者のためだけにしか考えることができなかったところが大きな問題だ。洗面器の前の斜めに傾いた鏡はその展型で、車いす使用者にしか使えない。車いすで使い易い広いトイレを街の中に作るということは、バギーで幼児を連れた父母にとっても、そのまま入れる便利なスペースとなる。

シルバーカーのお年寄りにとっても同じだ。コーナーに広めの棚を作れば、たくさんの荷物を持っけていても安心して利用できる。そこを少し工夫すれば、赤ん坊のオムツ交換にも便利な場所となる。つまり、「車いす使用者のための」ではなく、条件のシビアな「車いす使用者から」公共のトイレを考えたらば、街の「車いすトイレ」はもつと魅力的になったはずだ。ここで要求されることは、様々な人の様々なハンディキャップを、ともに補い合う暮らしの知恵を働かそうという視点だ。

●高齢者から考える

脳卒中で片まひとなったお年寄りが、リハビリテーションを頑張る、病院内でトイレや入浴が自立して家庭にもどる

と、自宅のトイレや風呂が使えないというのが現在のパターンだ。地域の中で、退院にともなう住宅の造改築が方々でなされている。しかし、住宅設計の基本を杖歩行でゆっくり歩ける人から考えておけば、特別な造改築を必要としない場合が多い。高齢者専用住宅か一般住宅かといった対立概念でとらえるのではなく、「高齢者から」考えた一般住宅を計画し、その上に、能力障害に応じた特別住宅を計画することで、現在の住宅問題は大きく変わっていく。ちなみにスウェーデンでは'75年から、「余暇活動以外の住宅は障害、年齢、その他のハンディキャップのある人に使い易く設計されねばならない」という法律が制定され、住宅設計の基本が決められている。

●家庭科への期待

私たちは自分の生まれた時代をどうとらえ、いかにかわっていか、そして次の世代に伝えていくかという、大きな営みの中に生きている。目の前に生じている暮らしの問題に対する感性豊かな発想と、具体的行動の意欲を、子どもたちが社会に出る前にいかにして経験的に獲得していくか、その育みの場として家庭科に期するものは大きい。

(金沢美術工芸大学)



●●●高齢化社会がやってくる●●●

ロスのシニア・シティズンズ・

ビューローで見たもの

佐藤 葉

ドライバー、エディ

エディは、ロサンゼルス圏サン・ペドロ市で老人や障害者のための運転手をしている。メキシコから幼い子二人を連れてやって来た。ドライブの契約者は現在四人。各々週二日ずつ、病院や買物など外出時の送迎をする。彼女への支払いは、彼女の申告に基づき時間給で州政府が行っている。今月は……と見せてくれた二人分の小切手は合計二六七ドル。エディは明るく優しい人だ。時には契約者たちからランチやお茶に誘われることもあり、話相手をするという。

このようなドライバーが各市にいるわけではない。同圏のガーデナ市や周辺の地区では、市営のダイヤル・ア・ライド・システムという、小さなマイクロバスが家と老人センターや病院、商店街を運行する方式をとっている。利用の前日

に電話連絡する。片道五十セント。料金は目的地により、また各市の予算などによって異なる。これは他の内容についても同じで、州政府からの補助もあり、受ければ利用料は格安だが同時に規制も受けるので、市や住民は選択権を持っている。

ガーデナ市のシニア・シティズンズ・ビューロー

老人専門福祉事務所とも呼びたいこのビューローには、六十歳以上の人の生活に関する情報と相談の機能が集中している。豊富なパンフレット類は、老人が孤立無援ではないことを伝えようとする。『物忘れは当然、気に病まないで』『友人を作ろう、一人暮らしなら友人は大切』『もし犯罪に出会ったらシークレットの機関へ相談を』『カウンセリングを受ける時はどんな時？ どこへ？』等々。

このような老人政策は、The Older Americans Act of 1965を基に進められてきた。ガーデナ市は一九七三年に食事サービスの開始、二年後から他の内容を充実。（質の）豊かな人生をを目的とし、ビューローでは次の事柄を扱っている。

Ⅰ 一般サービス ①情報提供——税金相談、法律相談（低所得者や六十歳以上の人専門の事務所がある）、書類作成手伝い、求人・住宅・老人ホームなどの照会、医療費補助を含むシステム説明、老人用割引カード発行、その他 ②個別相談 Ⅱ病氣老人を抱える家庭へのサポート——家事・買物など

Ⅲサークル活動——老人センターを中心に、会食のほか、アートや音楽、ダンス、水泳、演劇など多くのクラスがある。ボランティア登録をした退職者たちがインストラクターとして教えるクラスもある。隣りの市でジェム・カッティングを教えるハリー氏は七十六歳。彼の石に関する知識と情熱には感嘆するほどで、長年の趣味を今、他の人々と分かち合っている。

さて、ガーデナ市のビュローにはコーディネーターが三人おり、仕事を分担している。ミール・サービス（会食や食事の宅配）担当のメアリー・フルタニさんは、ビュローが受ける相談の中で最も多いのが、食事の宅配だと言う。自立心の強いアメリカ人は、一般に、一人暮らしや体が不自由になってもなお自分の生活を大切にするため、できる限り一人暮らしを続ける努力をすること。

食事は一括して作られ、申込者や老人センター、デイ・ケア・センターなどに月曜から金曜まで配達される。老人センターでは、人々がおしゃべりを楽しみながらの会食。一食一ドル五〇セント。余裕がある時のみ六十歳以下でも買え、二五セント増。この日は、ビーフシチュー、コールスローサラダ、パン、アイスクリーム、牛乳、コーヒーク紅茶。塩を加えたいほどの薄味、サラダは甘酢和えのように油が感じられなかった。

現在の大きな問題はハウジング、とメアリーさん。市営の低家賃（収入の半を払う）の老人用アパートが三カ所にあり、ビュロー近くの棟の場合、入居者百人に対し空き待ち三百人。仕方なく家族のもとへ行ったり（狭いことが多い）、中にはホームレスになる人もいるのでは？ とのこと。第二次大戦後のベビーブーム世代が老いる将来はさらに深刻な問題、と彼女は嘆息まじりに語った。

取材を終えて、また、ロス圏に三年住んで

自由と自主自立を導び、自分の考えと生き方をしっかり持つことを一般にアメリカ人は一人前の人間として考える。自立して働き、相応の税金を納めれば、老後は福祉を受けるのが当然なのである。十分な貯えがなければ、家などを担保に福祉を受け、死後は州政府にというシステムが、カリフォルニアにはある。その人の資産は、その人自身に収斂される。

老人政策は、私たちの人生（人生観）の集大成——人生の豊かさとは？ 豊かに生きるとは？ という思想を基盤とし、さらに行政と国民との間に信頼関係をもってこそ実るものではないだろうか。

取材／'88年12月、'90年8月

（フリーライター）



Weの仲間・北欧を行く

なぜ企画したのか

・立山ちづ子

私の住む農村集落三〇戸にはどの家にも高齢者がいる。私も六六歳の母と同居。わが町の六五歳以上人口は今年二〇％を越えた。わが周辺はすでに高齢化社会に突入している。だから、家庭科に「高齢化社会をどう生きるか」のテーマは私にとって不可欠となった。男女共学二単位「家庭一般」の学習項目とし

て約八時間を設定して四年を過ぎた。資料は新聞・テレビ・週刊誌・本。人口の統計、老人介護の実態、先進国の様子などで展開してきた。近くに85年開設特別養護老人ホームでは主に食事介護実習を入れた。特に男子生徒の訪問が老人たちに歓迎された。このホームは五十床で出発したが、'90年よりデイケアセ



全参加者が並んで、カルマルを発つ前に

ンター（三十名）、ショートステイ棟（二十床）、痴呆棟（三十床）と大幅に増設。すでに入居者は満杯。介護者は中年女性だけでなく、若い男女も入った。それぞれ精一杯励んでおられる。でも「無理しておられるな」という感をもつ。もっと、自然な触れ合いがほしい。

その青い鳥を求めて、先進国を訪ねたかった（成果は他の報告に譲る）。

人々の好意をよせ集めて

数回の海外研修の経験はあっても、自分の企画では初めてのこと。見学先を決めるに際して、半田たつ子氏の友人でストックホルム在住のビヤネール多美子氏にアドバイスを求めた。そして、一人ひとりの権利が大事にされる政治が一日のそれぞれの労働のあと開かれる議会で実現しているという、荘厳な市庁舎の議場を見学できた。また、旧市街の一六〇〇年代の修道院跡の建物の中で活躍している男女平等オンブズマン代表の若い男性と三時間意見交流ができた。参加者の、普通の生活者と交流したいという希望を多美子氏の友人の藤井美恵子氏の紹介で、障害児をもつ家庭、普通の子どものいる家庭、教師の家庭（二

日	月日 曜	滞 在 地	摘 要
1	8/16 (木)	成 田 発	自己紹介。グループ編成。
2	8/17 (金)	コペンハーゲン市	(午後) トーンビュー市立高齢者総合福祉センター訪問 (ナーシングホーム・デイホーム・ケア付住宅)
3	8/18 (土)	コペンハーゲン市	(午前) グラスサックセ市立高齢者特別養護センター訪問 (ナーシングホーム・デイセンター) (午後) アマリエンボー宮殿他市内見学 (夜) 伊東敬文先生(コペンハーゲン大学)の講演
4	8/19 (日)	デンマーク北部	(終日) ルーテリクス城・フレーデンスボー城・クロン ボー城見学
5	8/20 (月)	カルマル市	(午前) カルマル市立マコグスロイツサービスセンター見学 (デイセンター・ケア付住宅) カルマル市立オックスハーグヘメット高齢者福 祉センター見学 (デイセンター・ケア付住宅(痴呆を含む)) センターで昼食 (午後) ガラス工場(オレフォシュ)見学 カルマル市内見学(カルマル城他)
6	8/21 (火)	カルマル市 ストックホルム市	(午前) 市内・自由行動 (午後) 市内観光(北方民族博物館・市庁舎・旧市街他)
7	8/22 (水)	ストックホルム市	(午前) スウェーデン国消費政策庁訪問 公立保育園(ボンステュ) (午後) 障害者ホーム・公立ダグヘンメット訪問 (夜) 家庭訪問 ①障害児(ぜんそく) ②子どもがいる ③教師 a ④教師 b
8	8/23 (木)	ストックホルム市	(午前) 男女平等オンブズマン訪問 (午後) スカンセン見学 市内自由行動 (夜) ビヤネール多美子氏との交流会
9	8/24 (土)	ストックホルム市 フランクフルト市	出国手続き、フランクフルト空港で買物
10	8/25 (土)	成 田 着 14:50	入国審査、解散

軒)を四グループに別れて訪問、共感と刺激を受けた。最後の夜は多美子氏にたくさん質問を浴びせ、快く応答していただいた。

伊東敬文氏(コペンハーゲン大学医学部社会医学研究所主任研究員)からは高齢者福祉についてだけでなく、市内の建物の歴史まで

バス移動中に解説していただき、手厚い介護が、長い民主主義の積み重ねの結果実現していることをはっきり理解することができた。一人のこの企画は旅行社の近畿日本ツーリスト、紀平梯子参議院議員(熊本県選出)、その他多くの方のご好意を得て実現した。誠

に感謝の念で一杯である。最後に。社会のしくみとしての高齢者対策のありようがより鮮明になった。文部省の学習指導要領で言う「ボランテニア精神の養成」はますます、ま、切れに映る。社会保障の概念を培わねばと思っている。

トーンビュー市の ナーシングホームを 見て

・武田 綾子

道路から正面玄関に行き着くまでの道のりには、ブロック塀や柵などというものは見当たらず、両脇に赤や青のリンゴの実をたくさんつけた木が多数植えつけられていた。緑の芝生や窓側に飾られた花があちらこちらで目につく。とても広々として、緑が多く、また、大変明るい感じがする。これがデンマークに来て、初日に訪れたナーシングホームに対する私の第一印象であった。

施設内に入ると、二人の老婦人が椅子に腰

かけており、笑顔で私たち一行を迎えてくれた。この二人の老婦人の身なりは整然としており、気品さえ漂っているように思えた。これも私には一つの驚きであり、感激でもあった。なぜならば、日本の老人ホームでは、身なりが整然としている、という印象を私自身あまり受けたことがないからである。

ショックに似たような思いを胸に抱いている私のことなどおかまいなしに、案内されるがままに施設内見学を行っている一行の後ろをただひたすら歩いていた私を、次々にショックが襲う。案内されるありとあらゆる部屋の広さ、整っている設備、部屋全体の雰囲気

の明るさなど、ため息が出るばかりだ。

その中でも私自身、作業療法室と呼ばれる部屋、及び、その内容に大変感銘を受けた。色とりどりの毛糸が棚にぎっしりと整理されており、天井や壁などには老人たちがそこで作ったと思われる作品が飾られている。私たちが見学したときにもこの部屋で数人の老婦人たちが、友達と話しながら楽しそうに作業を行っていた。作業の内容は機織りであったり、布に補助器具を使用しながら絵を描いては色を丁寧にのせていたり、人様々である。その補助器具を使用している老婦人の手

先、及び指先は、関節が拘縮している様子でかなり変形していたが、作品の方はとても上手で、まるでプロが作ったのかと思えるほどである。このほか、タイルのようなものに絵を描いては色を付けた、陶器を作ったりと、男性が比較的多く参加している部屋もとなりに設けられていた。しかし、残念ながら見学したときは、その部屋で作業をしている人はいなかった。

私がこの作業療法室で何よりも素晴らしいことだと思ったのは、作業が作業らしくなく一つの趣味感覚として、また、行っている人々がとても生き生きとして、楽しみなで行っているという点である。まだまだ日本の施設では、このホームのように数多くの材料を用意したり、ゆったりとした気持ちで作業を行えるほどの広さを確保することは、難しい状況があるのではないだろうか。それだけではなく、作業療法を実施するにはしているが、このホームのように全体的にゆったりとした気持ちで実施する余裕が、日本のホームで働く人々の間で持てない、というのが事実なのではないかと思わずにはいられなかった。日本のように、ホームで働く人々の数が足りなかったり、やりこなさなければなら

い仕事が多かったりでは、どんなに立派な人でも余裕をもって入居者の人々と接するのは不可能ではないだろうか。

さらに、見学したナーシングホームの入居者は全員自立していた。ここが日本と異なる大きな点だろうと思う。デンマークでは個人がとても大切にされ、自己決定を尊重し、その人に残されている能力は何なのかを常に考えて援助している。つまり、何かを手助けしようとするとき、「何ができますか」という訊ね方をする。日本も残存能力の活用を言うてはいるが、相手に手助けをしようとするときに、「何をしてあげましょうか」と訊ねていることが多いのではないだろうか。結局、そこが日本の高齢者の自立しにくい状況を作っているような気がする。

また、日本は家族に世話を、という考え方がいまだに残っていることも多少なりとも影響しているように思える。人に世話になるということも大切だとは思いますが、全てを依存してはいけないと私は考えている。つまり、世話する方も世話される方もどこまでするべきなのか、どこまで頼るべきなのかということをも、もう一度考えてみる必要があるように思える。

在宅ケアで家族に世話になることは、大いにけっこう。しかし、どこまでが家族にできることなのか、どこからは専門家に頼むのか、もう一度考えたい。そして、家族が安心

して身体を休めることのできる制度ならびにナーシングホームを、一日も早く日本で実現させてもらいたい、そう思わずにはいられなかった。

8月18日

ナーシングホーム

「かしの木園」見学と

伊東敬文先生の講演を中心に

・村岡 洋子

高齢者の残存能力に注目し、できないことだけを手伝う「自助に到る援助」。

肉体的な面だけでなく、社会的精神的な援助——ここに来る以前の間人間関係を継続し、社会参加をしながら最後までアクティブに生きることを支える。

ホームの部屋は、その人が一生住む「家」だから、職員も看護婦も「客」であって勝手には入れないし、もちろん鍵もかけられない。

高齢者は、脱水症状を起こしがちだから水分をたえず手の届く所に置いておくが、強制はしないで説得をする。

死の近い高齢者には、家族と協力して支援体制をつくり、痛みのケア等はするが、延命治療はしない。

入所の判定は、医師、施設長、OT、PT在宅ケアの主任らが集まってするが、入所するかどうかを決めるのは本人であり、その意



デンマーク（コペンハーゲン郊外）グラスサックセ市立高齢者特別養護センター。食堂は、通いの人にも開放されている。

向によっては症状が重くても在宅介護で看取る。受けるサービスの種類も本人が決定する。

コペンハーゲン県の北西、グラスサックセ市の七つの公立ナースィングホームの一つ「カシの木園」の主任看護婦リス・ロイさんの話

である。’79、’82年にかけて、国の高齢者委員会の提出したレポート「高齢者福祉の三原則」——人生の継続性の尊重、残存能力の活用、自己決定の尊重、がきちんと活かされている。

この施設には、112の居室があり、半数は何らかの程度の痴呆症を抱えている。職員数は延べ150人、フルタイムに換算すると110人。私たちが通されたホールは約180人のパーティができ、ずらりと壁に並んでいる絵は、若い芸術家の卵の作品発表の場となっている。

住宅の他にリハビリ室、中央調理室、足の手入れ、歯の出前治療の部屋、売店（お酒も煙草もある）、美容室……と見学。食堂はカフェテリア式で地域の人にも開放されている。

住宅は、キッチン、トイレ、収納部分と、ベッドの入ったリビング（約16㎡）を併せて26—27㎡（夫婦だと二部屋を使う）だが、現在建築中のケアハウスはリビングと寝室の二部屋を備えた60㎡の「天国」、スウェーデン並みの広さである。それぞれ、人生の歴史と思いついたつまった個性溢れる住まいであった。

しかしここではなおさまざまな新しい試みが企画されている。①現在は施設の住人しか使えないリハビリ室を地域に開かれた大きな

デイ・センターにすること ②今年の8月1日から、施設の嘱託医の代わりに、入所者の家庭医が、その人を見ることになった。今、13人の医者とコンタクトしており、手数はかかるが入所者には、この方がよい ③入所者の収入は全て施設が預かり、その中から小遣いとして一万五千円程度を渡していたが、全額をその人の口座に振り込み、そこから全費用を自分で払う、という仕組みにしたい。使途と金額はそれほど変わらないが、これも自己決定の一つである（一人当たりの経費は約60万円。入所者の年金は平均して10万円程度）

④介護に携わる人材、自治体のヘルパー、病院のシックヘルパー、看護婦、看護婦長等、ケアの教育を一本化し次々と昇格できるシステムをつくる……等ほんの一例である。官民格差がなく、公務員であるヘルパーや看護婦は、充分な給料を得ながら、ボランティアの要求も併せ持つ生き甲斐のある職場として、希望する人が多い。これは経済の発展とともに、変わって行くのだろうか。

重度の要介護の女性を支えるヘルパーの活躍、車の改造をはじめ、ボタン一つで動くエレベーター、台所、トイレ、風呂の改造。入院中の患者が、退院後自宅で暮らしたいとい

う意向を持っていれば、これらの改造は、本人も交えてプランをたて、退院までに完成している。もちろん無料である。

記憶力がなくなっても、感性は鋭い痴呆の人たちには、安心できる適度の狭い部屋と、暮らしの継続性が必要だが、それと同時に歩くこと、いろんな人に出会って挨拶を交わすこともまた大切。歩きに歩くおばあさん、第九のメロディを口ずさみながら歩く50代の女性、彼女らを支えて一緒に歩く若いヘルパーさんの方が疲れちゃっているのがどこか哀しくおかし。

何より愛されている。好きにしていられるという安心感があれば、泣いたり暴れたりのような攻撃的な呆け症状は現れない。

しゃれた服装で夜のチボリ公園を妻の車椅子を押す夫、施設の個室の個性に溢れた雰囲気……、次々と与えられるスライドの前に、二日間行動を共にして、デンマークの福祉を説き続けてくださった伊東先生は、日本にだって高福祉は実現できる、と断言される。

誰にでも生じ得るリスクを、社会全体の仕組みで支える「福祉」は、公的な制度以外は成り立たない。北欧の福祉のキーワードは、「自助に到る援助」だが、援助なき自助を強

いられ、その弊害が急速に表面化してきているのが今の日本である。

老後にかかる費用を、税金として拠出して社会で支えるが、日本的自助努力で貯えるか、家庭内悲劇として破局を迎えるか、これからの選択に当たって、生活者として女性の視点が必要とされる。よい福祉制度ができれば負担増も止むを得ないと、国民の意識も変化してきている。どんなに保守的な政党も、大企業も、筋の通った要求は無視できないし、国民を敵には回せない。お金はある。日本人は具体的な福祉の味を知らず使い方がわからないだけだ。だからそれを見た人からまず火の手を挙げよう……。

福祉が地域で生きた制度として役立つためには、地方自治体の権限を強め、その地域で生活に近いところで、住民の要求に応じた施策をとるニアデモクラシーが必要条件である。前述の高齢化委員会の三原則は法制化されなかったが、各地方自治体は、ちゃんとそれに沿った施策を採っていた。意欲的に福祉の制度をつくろうとすればこの方法しかないからである。

民主主義とは、人に迷惑をかけず、自分や家族をまもるだけではなく、社会全体の「生



コペンハーゲン大学医学部主任研究員、伊東敬文先生とご家族

「活の質」をあげるため、積極的に活動に参加し、社会を変えて行く力量を持たねばならぬのです。

練瓦造りの300年近い家が並び、街の中に大きな樹々の葉が風にゆれる緑地と、時には池までが点在する。スウェーデンよりさらにガンコに古い街並みを守るデンマークの人たちの質素で堅実な生活の中に、しっかりと根を張った民主主義と、自分たちの暮らしを守りぬく強い信念を、恐ろしいまでに肌で感じとった二日間であった。

カルマル市

高齢者福祉施設を 訪ねて

・入江 一恵

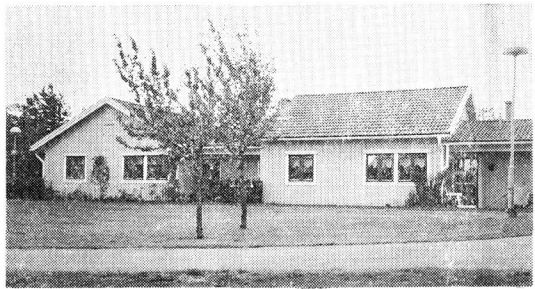
スウェーデンの南部に位置するスモーランド地方の中心カルマルは、バルト海に面した人口五万五千人の古い町。十三世紀に築城されたカルマル城の静かなたたずまい、素朴で緑豊かな自然が息づいている。中世がそのまま残っているかと思う街角、ここに先進的な高齢化社会を見た。ゆったりとした個性豊かな高齢者の住まい、生活の場があった。ハツとするような明るい表情を見た。私たちはカルマル市福祉課のトーマスヨハンセンさんの

同行で、ステイヴさん（スウェーデン語→英語）と添乗員の池上さん（英語→日本語）の二重通訳で二つの施設を訪問した。

高齢者サービスセンター

「スコッグロイツ」（森の鹿）

一階建、九六戸、カルマル住宅公社から市が年間七〇万クローネ（一八九〇万円）で借り受けている。広さは五一㎡・七五㎡・八三㎡・九九㎡の四タイプがあり、九九㎡の部屋は家族も住めるようになっていた（そうい



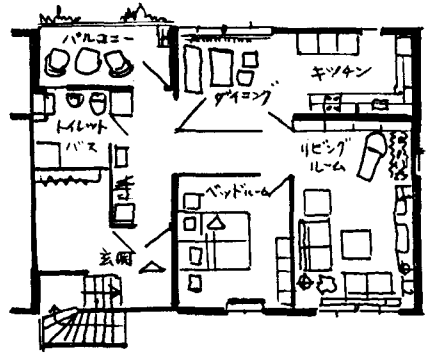
カルマル市立マコグスロイツセンター 一戸建住宅
（障害者・高齢者兼用）

ば入口で出会った男性はここに家族と住み、電気自動車で孫を学校に送り迎えしているとか。うち二六戸は完全に二四時間アラーム体制で緊急の場合に備えている。

入居希望者は、コミュニティのニーズ判定による。七五㎡で基本料金は月三千クローネ（八万一千円）、週のヘルプ回数で加算がある。ここでは入居者の①自立②社会活動参加をモットーとし、銀行、郵便局、ショッピングにも本人が行くよう仕向けている。職員は三十名、八時間制で二十四時間三交替、ケアは個人の状態にあわせて三週間に一回～一日四～五回、メデイカルケアについては、この施設にも医師はいるが基本的には必要な時本人のかかりつけの医師に連絡をとり、かけつけるシステムになっていると館長のウラカルさんは説明。こちらとしてはとても複雑になるのですがと苦笑される。ここにも個人の生きてきた過程が大切にされていることを思う。

アンナさんの住宅（部屋）訪問

七十二歳にこやかに車椅子で迎えてくれる。なくなったおつれあいは日本にも立ち寄られたことのある船員、血色のいい堂々たるその姿に、一瞬どこが悪いのかしらと目を



2 rok 75m²

疑い質問すると、「膝が年をとり過ぎて」と笑っておられる。七五坪の部屋（図参照）には冷凍庫・冷蔵庫・オーブンが並ぶ清潔なキッチン、ダイニング、リビング、ベッドルーム、トイレ、バスルームと私たちには溜息が出るばかり。ここでケーキを焼くのが楽しみとか、目下お孫さんのために編んでいる編物と見せて下さる。訪問ヘルパーが一日に二回ケア、デイケアセンターに通いショッピングはヘルパー付添い。近くに住む娘さんが週二〜三回訪ねてきて遊んで帰るが、家事には手出しをしないときっぱりいわれる。

ナーシングホーム

「オックスハーグヘメット」

二十年前に建てられた五階建て、二、三年後に建てかえが予定されていると説明のエバさんは何度も強調される。私たちには築後二、三年に見える。塗装・改修がゆきとどき人間が住まう住空間への感覚が違うことを痛感する。一〇四名の入居者、入居費用には家賃、食事代、クリーニング代が含まれ基礎年金の七〇％、他の収入の八〇％となる。二五〇〇クローネ（六七五〇〇円）〜四五〇〇クローネ（二二五〇〇円）が平均的である。入居者平均年齢は八七歳、一〇五歳が最高年齢、七五名の職員が二四時間体制をとっている。フルタイムは週三七時間労働。

この施設の特徴は痴呆性老人の住居を一四室特別に設けていること。入居条件は内科・外科に精神科の診断が加わる。痴呆が進まないようにいろいろな活動に参加させ、料理・洗濯などの家事も職員はできるだけ手出しをしないのが原則、スタッフミーティングは精神科医を含めて行う。

スペンサーさん宅訪問

八二歳、元船員、入院中のおつれあいを毎日訪ねておられるとのこと。家族の写真、大

切に蒐集された船、海の絵とご自身で彫刻された家具が並んでいる。この部屋はスペンサーさん以外の何ものでもない。個性豊かな趣味とその人の歴史がそこにある。

両施設とも個室以外の共用の場としての食堂は、地域の人なら誰でも利用できる。私たちもコーヒープレイクと昼食をいただく。アクティビティセンターを訪れる人は、毎日百人をくだらないと聞く。織機と染めあがった糸、クロスししゅうにしばり染め、おとしよりのカラフルな洋服に作品が映えてまぶしいほどだ。他に美容客室、足の手入れ室、リハビリセンター、図書室がある。スウェーデンの高齢者福祉も在宅へと移行しつつある。当然マンパワーの確保が要求され、十八歳から各年齢層の人達がヘルパーとして働いているという。何よりも六十年も前から住宅政策は行政の最重要課題だったというスウェーデン、高齢者のひとりひとりが人間として豊かに生きる場を保障されていることは驚きであった。

この後、市の広報センター秘書室のクリステイナーさんから福祉関係の予算の説明があった。翌日の新聞 *Barometern* の四面に私たちの訪問の記事が大きく報じられた。

・家庭訪問

知的障害者のグループ住居と

障害のある子を訪ねて

永井 恵子

私たちが訪ねた知的障害者四人のグループ住居は、ストックホルム郊外、日本で言えば公団住宅が立ち並ぶ一棟の一階二世帯の壁を取り払った形で、看板もなく、外見からは普通の家族が住んでいるかに見えた。病院の四入部屋を想像して中に入ってみると、一人ひとりが個室を持ち、ベッド、机のほか、趣味の楽器やマスケットなどで、個性豊かに飾られていた。共用スペースとして、台所、居間、食堂、二つのバス、トイレ、そして職員室、そうじが行き届き、花や写真など心あたたまる雰囲気があったよっていた。

職員は、五人（内一人はパート）で、夜勤は一名、皆近くに住んでいるとのこと。たまに二十歳〜二十四歳の男性だけが集まり、二人はデイセンターへ働きに、二人は外出中

で会うことはできなかったが、職員のゲンさんの話では、四人の中の一人はダウン症で、八歳でここに来た時はあばれたが、今は落ちつき、料理を作るのは無理でも、教えている。親が来るのも、親の所へ行くのも自由だそう。

「72年にできた施設なので、もう古い。五、六年後には、各自が台所、バス、トイレを持つように改修したい。ストックホルムには、もっと良いグループ住居があるのに、なぜ、こんな所を見に来たのか理解できない。ふつうの人とわかんないように生活する」と最後に語ってくれた言葉が印象深かった。午前中に訪問した保育園でも、障害児のため職員が一人ついてしたが、日本では考えられない整った施設設備、そしてマンパワーのすごさ

に、ため息が出てしまった。

夜は、障害児と母親に会えることになり、通訳をして下さる藤井恵美子さんと待ち合わせるため、地下鉄に乗った。ホームに降りると、障害者用エレベーターから車いすの人が降りてきて、誰の手も借りずに、スリッパと地下鉄に乗っていった。公共の駐車場に障害者用自動車の広いスペースが確保されていたり、信号の赤青が音でわかるようになっていたり、街の中で障害者がふつうに暮らせる工夫が、いくつも目についた。

ぜんそくとアレルギーのアンドレア君と母親マルガレータさんは、彼女の所属する事務所で、私たちを出迎えて下さった。彼は八歳、小学校二年生で、私たちが母親と話している間も、一度だけ吸入器を取り出し、吸入した外は、おみやげの折り紙で紙ヒコキを折って遊ぶ元気な男の子に見えた。一歳の時、百日咳からぜんそくとアレルギーになり、夜中発作で親がかかりきりになったとのこと。また、衣服はもめんだけ、食物も魚や添加物がダメ、住居では、ジュース、カーテン、香水などが使えず、生活全般にわたり制限がたくさんあるという。

スウェーデンでも、ぜんそく、アレルギー

患者が急増し、障害者として認定されている
そうだ。彼は、人的援助を受けるのではなく、
お金をもらい、自分にあったアシスタン
トを雇う。いわば自分が企業主の形をとる組
織（ステイル）に入っていた。職安に広告を
出し、面接をして六人（内一人は准看）を雇
った。アシスタントたちは、自分の生活にあ
わせて、ローテーションを組む。その日のア
シスタントの青年モルガンさんは、「自分も
自由に時間を選べ、自分もぜんそく患者なの
で、彼のが良くわかってよい。この方式
を気に入っている」と語った。

アシスタントが吸入器の入ったカバンを持
つことで、遠足に行ったり、放課後も自由に
遊べるようになり、先生も彼を特別扱いしな
いそうだ。

母親の仕事をたずねたところ、他のもつと
重度障害者のアシスタントをしているといわ
れ、皆、エーツとびつくりした。「なぜ、自
分の子をみないで、他の人を見るのか」と質
問すると「親子関係では、二十四時間エンド
レスで、甘えが出て彼の自立に役立たない。
母親として、他にやることはたくさんある
し、私には、私の自由、私の人生がある」と
自信に満ちた答がかえってきた。日本で、障

害をもつ子の母親に、この質問は絶対にでき
ないと思った。

スウェーデンに来てはじめて、しかも短時
間ではあったが、知的障害者たちのグルー
プ住居と、ぜんそくの子と母を訪ねて、これ
まで全く障害者問題を知ろうとしなかった、考

8月22日

消費者庁を訪ねて

柴田 栄子

消費者庁は国立の消費者保護の機関で、日
本の経済企画庁にあたると考えてよいよう
ですが、ネーミングがいかに国民向きです。
年間予算17億5千万円、このなかには一八〇
名いる職員の給料も含まれていて大した額で
はないと教育課課長のM・Cさん（45歳ぐら
いの女性）が話してくれました。
各コミュニケーション（自治体、二八四あるとのこ
と）にも消費者保護の担当者があり、自治体

えなかったことを恥ずかしく思った。障害者
があたりまえの生活ができる社会が、健常者
もあたりまえに暮らせる社会ではないか。み
んなの問題として「共に生きる」ということ
を、考えて行かなければならないと強く感じ
た。

内の消費者教育や企業への意見提出などをし
ていますが、その指導や資料の提供など庁が
援助しています。主な仕事内容を紹介します。

1 学校に対する働きかけ

消費者教育のプランニングと教師への研修
（内容・方法について）、教材の作成、消費者
問題について関心をもたせるために展示や意
見の発表というところでしょうか。高校には

消費者問題を扱う専門家がいてこの人とコンタクトを取ってすすめているようですが、国語、数学、経済、絵画などいろんな教科の教師を対象にして研修しているようです。もちろん消費者教育は幼稚園からすべての教育機関（成人教育、服役中の者も対象）で行われ

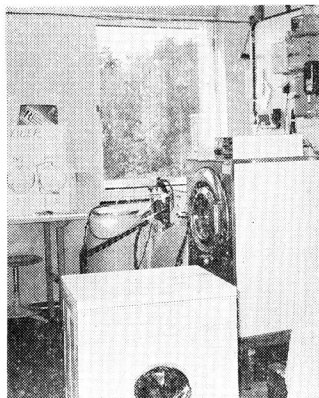


消費者庁教育課長 MARIANNE ÖRBERG さんから説明をうける

いろいろな企業の誇大広告のとりしまりや、種々のパンフレットを発行しています。食物教育、たばこの害、環境資源問題や家計管理に関するもの、消費者気をつけなさいというようなもの、子供向けこすかい帳……など。マクドナルドは良いか悪いかなども議論になるように入れている、とか。たばこのパンフは業界から非難されたが、WHOから賞をもらいとくに自信と誇りを持っているものである。企業と私たちとは考え方がどんなに違うかが分かるといわれ、スウェーデンにしてもそうなのか……と記憶に残りました。

2 広報活動

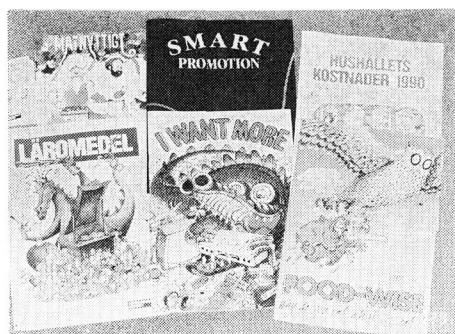
ているとのことでした。



洗たく機のテスト室

3 市場裁判、消費者オンブズマンについて
消費者問題でトラブルが生じ、重要な問題の時に消費者オンブズマンが参加して消費者の立場に立って解決する制度で、ユニークなものです。また、消費者オンブズマンは企業が新製品を作るときに意見を言うこともできます。消費者庁やコミュニケーションの消費者課は企業に対して、消費者保護の観点にたって交渉したり話し合いを持って意見を入れさせたりすることができ、これは重要なことであると話されました。消費者オンブズマンは国会で任命され、任期は四年、政治的には政党に属さず行政活動を調査し、国民からの苦情を処理する機関。現在は男性であるが、その前は女性で現在法務大臣をやっているとのことでした。

説明の後、チェルノブイリの問題、食品添加物に対する具体的な施策についての質問が出ましたが、食品の質や安全性に関することは他の機関（食糧庁）でやっているとのことでした。確かにその後実験室を見学しましたが、皿洗い機、掃除機……など家庭電気機器の性能実験が主なようで、企業や家庭から持ち込まれた物の性能や安全性についての実験



消費者庁で出している出版物

は有料と言うことで意外に思いました。洗濯機のテストでは布に汚れをつけその洗浄効果をみるというような、私たちがやっていることと似たようなことでした。使っている洗剤は合成洗剤のようでそのことに対して質問が出ましたが、あまり問題意識を持っていないようです。環境汚染がもたらす人間への害が出ていないからなのでしょう。それとも基本的に人間を大切にする国家に対する信頼感があるせいでしょうか。垣間見た限りでは消費者対策は日本の方が進んでいるような気がしました。

8月23日

男女機会均等・平等 オンブズマン委員会を訪問して

星野 英子

今日も北欧の空は青く、柔かい光に満ちていた。気温二十度。このツアーの最後の訪問先、機会平等委員会を訪ねる。

この委員会はストックホルム市旧市街ガラ・スタンにあり、王宮・大寺院に近く修道院跡の古い建物の中にあった。案内された部屋は半地下室、土塗りの天井には古代風彩色の壁画が残り、一三〇〇年代のままとのこと、運河に向かって開かれた窓からの微風と光の反射で、しっとりとした明るさに包まれていた。

団長、入江さんの挨拶を受けて応待されたのは、ロルフ・クリステンソン氏、四十歳位、この委員会のサブ・弁護士で妻と四人の子どもを育てている。有児休暇も四ヵ月半位とった、という自己紹介であった。通訳は在住十

数年のカツベ・サンドベリー・アツコさん、美しい発音と日本語のかすかな出雲訛りがなつかしい。

ここでは私共は自由に多くの質問をし、時間を超えて話し合うことができた。その主なことを問答風に記してみよう。

Q 男女雇用均等法の立法化の背景は

A 一八〇〇年代は農業時代で、過酷な諸条件の中、女性の労働力を必要とする時代が長く続いた。産業革命以後、男は工場へ、女は家事・農業の時代となったが、相変わらず女性の労働力は要求され、労働組合、社会民主党、連帯する小党の働きで一九八〇年に成立した。

同様に工業化の道をたどりながら、日本で



男女平等オンブズマン代表、ロルフ・クリステンソン氏と通訳のカツベ・サンドベリ・アツコ

はなぜこの動きがなかったのでしょうか。

Q 出産・育児への対応は

A 休暇として、出産は一年間、育児は満十二歳までは一年間に六十日まで、いずれも所得を九〇%保証され、両親のどちらかがとれる。実際には父のとり方が少ないので、更に細かい施行令で、一日でも半日でもとれるようにしている。法令婚、同棲、父子または母子家庭すべてに適用される。

Q 保育所入所は一・五歳なので、産休明けの六ヵ月間はどのようにするのか

A この期間は雇用主の判断により、休みにもなるし、自治体の援助による保育ママも利用できる（同氏は父が休暇をとり、母の職場へ哺乳に連れていくのが、乳児との接触上好ましいと言っていた）。

Q 男女平等雇用法のその後について

A あくまで雇用の平等を中心に進められて、男が家庭へ、女が職業へと歩み寄るのに男性もよく協力している（同氏自身も親から受けた「しつけ」を子どもにはしないとのこと）。

この法に関して三点ある。一つは性別による差別の禁止、二つは雇用主にはあくまで自主的に法を守ることを説得する。三つは一、二を監視する機関としてオンブズマン制度があり、更にこの法を社会全体に浸透させ、世論を興し、宣伝・普及・啓もうをしている。

年間七〇〇八〇件の査定事項があり、多い例は、高学歴の女性管理者の下に若い男性を採用した時のトラブルである。この場合は未熟な点を雇用主の費用で再教育をすることによって適用している。

（その他、この法令の運用上の質問に率直に答えてもらうと）従来まで慣習上固定されていた男・女の職種はまだそれほど変わっていない。

ない。理由は、プレッシャーがあるためだ。低賃金の職種が多く、この差の解消を指向しているから将来は変わると思う。女性の多い職場の長でもまだまだ男性が多く、五十歳代以上の人の頭は容易に切り換えられない。（笑）もっともこの委員会の長は女性であるが、これからもっとポジティブになる必要がある。

また、コマーシャルに、女・男の表現として「やさしい、美しい、たくましい」等の形容詞を取り除くように指導している。

Q 採用条件に学歴はどう関係しているか

A 関係ない。職業やボランティアの経験がないと入学できない大学もある。本人の仕事への考え方が第一の問題である。

Q 公共・民間で給料差があり、公共の保育所・施設で働く希望者が減少しているそうだが

A 事実である。民間では再教育により、昇格・昇給の機会が多いが、公共部門はその点、こう着している。

Q 性的差別・暴力については

A 働いている女性へのアンケート結果では、回収率五〇%、それを全体として、うち一七%が一度以上受けたとある。答えにく



スウェーデン、ストックホルム市民俗村「スカンセン」。この日は、一年に一回の老人のお祭り行事日。中央広場では、にぎやかにたくさんのお老人がダンスを踊っていた。

く、限界をどこにおくかで届け出にもためら
いがある。

Q 家庭科の男女の共修に関して

A 学校では従来のイメージ・チェンジのため、家庭では父が子への模範のため実行して

いる。

Q 売春の実態は

A 禁止されているが実際はある。判明した後は、男性は汚職と同等、それ以上に非難される。

Q 若い男女の労働観の二十年前との変化は

A 就労時間以外のフリースタイルをどう過ごせるかということが、逆に職業選択に結びついているのが現状である。

先進国といわれるこの国でも、まだ多くの

問題を抱えていることを実感した。それにしても同じ工業化へのプロセスの中で、その蓄積を、かたや国民の平等につながる『幸福』を目的として進んでいるこの国に比べて、戦争へと向かった日本の過去とこれから、その反省をどう生かすかと、考えさせることの多い訪問であった。

最後に約束の時間が過ぎても、誠実に、話して下さったロルフ・クリステンソン氏及び、カツベ・サンドベリ・アツコさんに心よりお礼を申し上げます。

スウェーデン

みて歩き

(教育)

小原 真弓

北欧視察旅行にあたって、できれば、実際の教育の様子を見たい、と思っていた。だが残念ながらバカンスの季節とあって、まだ学校が休み。保育園やいくつかの家庭の様子に教育の一端をかいま見た。

1 保育園にて

私たちが訪れた保育園(ボーンステュガ)は、閑静な住宅街の緑豊かなところにあった。ちやうど食事の時間だったらしく、窓越しに子どもたちが楽しそうに食事をしているのが見えた。出迎えてくれたアンネリーさんは、若いけれど、保育園で十六年働いた人で、こ



ビヤネール多美子氏

の時は、おなかに赤ちゃんがいる上に、七歳のお子さんの入学式だったにもかかわらず時間をさいて案内してくださった。

現在、五十三名の子どもを、十二名のニクラス（一歳半～四歳）と、十五名のニクラス（四歳～七歳前）にわけ、各クラスに大人が三名ずつ働いている。保父さんも二人いて、障害児の世話等もしている。子どもにストレスが生じないように少人数にしているのも、子どもと先生の関係が親密で、先生たちもゆったりと子どもの相手をしているように見受けられた。他に保育園長、料理人、掃除人二名がいる。職員は、朝六時半から夕方六時まで二交代で、週四十時間労働、週休二日である（この国では出産にあたり一年間の育児休

暇がとれる。両親どちらがとってもよく九〇%の有給である）。

この保育園では、幼い時から自立心と連帯感を学ばせている。部屋に簡単な台所がついており、どんな小さい子も食後は自分の皿を洗う。子どもたちは、喜んでその作業をするという。グループ生活では自分のことばかり考えないで、順番を待ったり、自分の意見をはっきり言うなど、将来の社会生活に必要なことを小さいうちに身につけさせる。子どもたちは、各々「自分の」人形を持っている。一緒に遊んで、帰りはかごに寝かせて帰るのだが、それは「自分が面倒を見てあげているのだ」という感覚と、責任感を培うという。また病気で休む子がいれば、他の子がその子の人形を寝かせてあげるようになっていくので、もし自分が休んでもみんなから忘れられないし、連帯感も生まれる。子どもは、遊びを通してみんな一緒に何かを作ったり、大人の世界の真似をすることで、自立し協力する力をつけていくのである。

しかし、保育園は、子どもに対する責任を親から取り上げるところではなく、あくまでも親が子どもの第一責任者であるという理念があり、機会ある毎に（夕方）親と、親の考

えや子どものこと、保育園の方針を話し合う。職員みんなが子どもたちを愛しているというのを親に信用してもらうことが大切と考えているのだ。小さいときから自立と連帯を促す教育がなされていることが強く印象に残った。

2 学校教育

さらに学校は、社会の一部というしっかりした位置づけのもとに「生活」を重視している。小さい時から親の職場に連れて行くし、八、九年生（中学二、三年）になると、二週間の職業実習がある。旅行中、ビヤネール多美子さんのお話を伺う機会に恵まれたが、多美子さんのお嬢さんは、病院に職業実習にいき、癌の末期症状の患者さんの世話をされたそうだ。人間形成の大切な時期に意義深い体験だったと話しておられた。

3 家庭のなかで

スウェーデンの若者はたいいてい十八歳位で独立する。日本の成人式のような形式的なものでなく、実際にアパートを借りて一人暮らしを始めるのだ。私たちが訪ねたある家庭―父は診療所に勤める歯医者、母は福祉関係の

役人、今度独立する十八歳の兄と、中一の弟の四大家族―では、兄の独立にあたって経済的援助は一切しないということで(国の援助がある)、本人も自立への意志が強かった。

この家庭では、例えば夕食は、父が月曜、母が火曜、水曜は兄、木曜が弟、金曜に外食をして、土、日は、休みなので夫婦です。また掃除は父、洗濯が母、弟は…と家事が男女に関係なく自然に分担されていた。もちろん

いと 〈荒野のバラ〉

の
田中裕一さん



「荒野のバラ」の田中裕一さん。昨年のWe熊本フォーラムでの「水俣の授業」の講演、野草を訪ねる野外コースの魅力は今も語り草に。熊本の、近松文学の研究者の父を持つ。ラジオオラスの赤い薔が開き、牡丹の花の散るのをうっとり眺めていた幼い日の記憶。六歳のとき買ってもらった原色の植物図鑑に夢中になるが、やがて、関心は昆虫へと移行。

不都合な所があれば交代をして助け合う。各個人が自立して家族として助けあっていた。

受験勉強、点数、内申書など日本の教育で日常的に使われている言葉を、スウェーデンでは全く耳になかった。どこでも、誰もが言っていたのは、「自立」であり「連帯」であった。もちろん、この国でも様々な問題はあって、どちらの教育が良いか悪いか判断はできないが、すべてを総合してみたとき、日

小学校の高学年の頃、セミを卵から育て、セミが仲間の声を聞きとれる音域まで調べて、県知事賞を。「理科の先生」になりたいと思う。

旧制中学では、歴史は英米のアジア侵略史のみ、音楽といえは、軍歌・校歌に、飛行機の爆音の「レコード鑑賞」で、徹底した体罰教育。少年飛行隊に入隊直前、敗戦となる。「民主的に」貌変した教師への不信が、教師になることの、もう一つのきっかけに。

大学では国文科からドイツ哲学へ。一九三〇年代のドイツ精神史。ハイデッガーなどの実存主義者たちの「転向」を追う。

丸刈り訴訟の証人台に立ち、障害を持った子どもたちへの「評価」・入試差別への取組み、給食の自由化etc、学校の内外を問わ

本はいかに人に頼ったり、人をあてにして生きていく人が多いかをあらためて感じさせられた。自分の利益だけに走らず、お互いが自立した生活をしながら助けあっているのはうらやましかった。社会背景や文化の違いはあれ、スウェーデンに学ぶべきところの多い旅だったと思う。

(まとめ協力者・田崎加代子 金津紀代 特手ナツ)

ず数々の運動・改革を闘ってきた「闘士」には見えぬ、静かで穏やかな語り口。孤立したことも絶望したこともなかった、と。

この春退職された藤園中学校には「教材植物園」があり、約七十種の植物が育つ。古代紙製作用のバビルス、卒業式コサージュ用洋蘭、そして、アンネの隠れ家に咲いていた「アンネのバラ」……。生徒が硝子を割れば自分たちですぐ予備の硝子を切って入れ、卒先して校舎の壁塗りを楽しむ教師たちだった。

社会科が専門だが、美術や英語を教え、芸大の通信教育を楽しみつつ音楽を担当したことも。「いまは、教師自身が、学ぶこと、わかることの面白さを味わってきていないことが問題なのは」の一言は、重い。(稲邑)

座談会

100冊のWeとともに

—Weのこれまで、そしてこれから—

出席者（発言順）

武田 秀夫（学習塾主宰）

磯部 幸江（中学校家庭科教員）

福島 澄香（かながわ女性会議メンバー）

諸橋 泰樹（マスコミ研究者）

川名 はつ子（大学職員・We城北の会世話人）

半田 たつ子（We編集長）

司会 中嶋 里美（男女平等運動家）

（9月16日 東京都婦人情報センター）

一、Weとの出会い

中嶋 先ずWeとどんな出会いをなさったか、ということ話を話していただき、次に、これまでのWe、最近のWeについて感じていらっしゃる、更にWeがこれから二百号に向けてどんなふうに発展していけばいいと思われるか、この三本柱を立てて、座談会を始めたいと思います。いかがでしょうか。

武田 半田さんがおやりになっていた「家庭教育」に頼まれて、「虚飾をそぎ落とした学校」というテーマを与えられて書いたのが始まりでした。ちょうどその頃、中学校には校内暴力の問題などが色色あって、一つの曲がり角にはきていたと思うんですが……。その文章を書く前は、学校を辞める気はなかったのですが、書いているうちに、私の中に眠っていたものがゆり動かされて……。そういうと半田さんは、私に教師を辞めさせた下人みたいですが（笑い）。

私が教師になった二十二歳のころは、こちらには未熟ですから、仮面を付けないと生徒の前に立てないようなところがありました。ところが教師を長い間していると、仮面がはり

ついちゃいましてね。仮面なんだか、本当の自分だからなくなった。教師という仮面をはずして、その後に新しい面貌が生まれてこないとやっていけない、と思って、そんなことを書いたのです。

書くということは、恐ろしいことでして、それによって再出発するつもりが、辞めるという方向に進んでしまった。そのすぐ後で、半田さんが前の出版社を辞められ、Weを創刊されたんですね。

翌年の鳩の巣でやった合宿に呼ばれて話をしたり、「霞通信」を三年間、「読書つれづれ草」を二年間連載し、単行本を出して戴いたり、春や秋の集りでパネラーを務めたり、話をさせてもらいました。考えてみると教師を辞めてからの私の生活とWeはびったり重なっています。時間的に重なっているというだけでなく、辞めてからの生活の上でWeとともにあったことが私を支えたという意味で、Weには感謝しています。

磯部 学生時代に入っていた研究会に半田さんの以前の雑誌がありました。教員になったのは、ちょうど「家庭科の男女共修をすすめる会」が発足した年ですが、教員になるとすぐ学生時代の続きで「家庭科教育」の読者

になりました。そこに書いてあることは、私の常識が壊されていくような気がして、半田さんってどんな方なんだろうって思ってたが、そのうちに出版社を辞められて、新しい雑誌を出されるというのですね、すぐ申し込みました。

鳩の巣の合宿に参加したのが、半田さんと会った最初でした。合宿では、武田さんや永畑道子さんのお話に感動して、以来、'85年の国立婦人教育会館のフォーラムで、初めて実行委員になり、'86年の四月号から「新しい家庭科を創るために」の「中学校では」に連載。このようにしてずっとかわってききました。

家庭科教師として自分に磨きをかけるには学校の中だけにいてはダメ、Weの集まりに出て、色々な人と触れ合うことが絶対必要だと思ひ、これまでに沢山のものをいただけてきました。

福島 半田さんが前の出版社を辞められてすぐ「支援する会」ができた時、私は参加していませんが、一橋出版の方たちが肩入れをしていらしたので、そこから話を聞き、共感していました。Weが出てから、相模原で読者会をしようというお誘いがあり、勤

務校の私の研究室をお使い下さいと申し出ました。読者会は、長谷川孝さんや山崎京子さんが熱心に組織されたのですが……。

勤務校の女生徒の比率が高まってきたので、私は社会科の教師から家庭科に、少しずつ移行したのです。「家庭科の男女共修をすすめる会」ができた頃、京都をはじめ全国の先進的実践を支えに、共学の授業を始めました。そのことをWeに書かないかとすすめられて一年間書かせていただきました。

それが『家庭科新時代』の本になるという事実が、「神奈川女性プラン」や「女子差別撤廃条約」に伴う女性運動の高まりの背景と共に私の共学家庭科を支えました。授業の見学者は増え、県の教育委員会で実践集を作れば、そのトップに載せられ、文部省から授業内容のデータを出せと言ってくるやら……と変わりました。

また家庭科といえば、家事・裁縫と思われる、エリート女性から軽蔑されているところがあり、何とかならないかと思っていた時、「経済の目」の連載を三年間させてもらいました。Weにかかわることで得難い勉強ができて、人生を豊かにしていただきました。

諸橋 僕は皆さんと違って、朝日新聞の記



武田秀夫さん



磯部幸江さん



福島澄香さん

事でWeを知ったのです。

僕は、ずうっと、学校教育に疑問を持ち、早い時期から、家庭科は男女共学にすべきだと思っていました。だから新聞記事で、僕と同じことを考えている方がいるんだなと思いました。

その後、井上輝子さんの研究室に揃ってWeを必要に応じてパラパラッと読むという程度で、熱心な読者ではなかったんです。国立婦人教育会館女性学講座で、半田さんの事例発表を聞き、その後、見本誌を送っていたいて、これは支援しなくちゃと思ったんです。

同じ年に女性民教審が始まって、傍聴に行っているうち、ゲストとして「私にとって大

学とは何か」ということを話しました。
一昨年、井上輝子さんと研究をまとめ『女性雑誌を解説する』という本を出す時

志ある雑誌を出している方として半田さんと、子どものテレビの会の鈴木みどりさんに、座談会に出席していただきました。われわれはマス雑誌の分析をしてきたけれど、ニコミ・ミディコミについても取り組む必要があると思います。

Weとの直接的なかわりは、今年の一月号で「男性にとってフェミニズムとは何か」を書かないか、という誘いをいただきました。僕にとっては重い課題でしたが、ちょうどその頃、書きたくてたまらない問題が二つあり、その一つが大学に入った時に一人称に「僕」を使おうと、心に決めたことについてでした。そのことをWeに書かせていただきました。与謝野晶子が青鞥の創刊号に書いた「そぞろごと」の「一人称にてのみ物書かばや／われは女ぞ／一人称にてのみ物書かばや／われはわれは」をもじった小見出しをつ

けたのですが、半田さんもWe発足の時、「そぞろごと」を思い浮かべられて、「Weは一人称で物を言う人の集りなのだ。Iの拠って立つ場としてのWe、Weの中のI」ということを語っていらっしやいます。僕はそのことに感激し、共感しました。一人称で物を書くことを保障してくれる場としてのWeに連なりたいと思ったのです。これがきっかけで半田さんから連載をすすめられて、いま「男性学への契機」という欄を書いています。

川名 半田さんの雑誌が出るという呼びかけを横山雅子さんから送っていただきました。横山さんとは学生時代からの仲良しで、蔡和美さんとは顔見知り程度だったのですが、偶然道でバッタリ会った時に、Weの創刊の話が聞かれました。ちょうどその頃、私は二人の子を保育園に預けて、職場と保育園と家庭とを目まぐるしく回るだけの生活で、やはり何かを求めていると思うんです。だから二人の話を、これは面白そうだと、たちまちひき込まれてしまったんです。

皆さんと違って、ミーハー的な興味で仲間になったので、ほんとうは気楽な読者でいたんです。ところがWeへの思い入れが強いので、言いたいことが溜ってくと、Weに手紙

を書き、それが誌面に載ったりすると、それをきっかけに人間関係が広がるのです。都会暮らしをしていると「隣は何をする人ぞ」で、同じような思いを持っている人がいても、全く見えませんよね。ところがWeに載ったことがきっかけで昔の友人との途切れていた関係が復活し、新しい友人もできました。

またせっかくの雑誌を読みっ放しではないから、読者会をつくろうということ、蔡さんと始めたのですが、それが今も続き、ここでも新しい関係が生まれました。蔡さんが指紋押捺拒否をした時には読者会のメンバーが蔡さんを支えることができました。

放っておけば日常性のなかに埋没してしまうところを、この雑誌を読み続けることで救われたという思いがあります。蔡さんを支援する運動をする中で、学生時代とは違う地に足の着いた活動をしているのを感じて、うれしかったです。

Weには'85年の夏増刊号「働き続けるために」に書いたことがあるのですが、文章を書くのは苦手で、もっぱらWeに集まる人たちの面白さにひかれて、交流を楽しんでいます。

中嶋 教員になったのが'63年、その頃から

家庭科は男女共学でなければならぬと思います、学校の中では職員会議で毎回主張しているんです。ところが、なかなか通らないものですから、色々なものに書いて訴えていたところ、半田さんの「家庭科教育」にも書いてみないかと、声をかけていただき、書くきっかけを作っていただきました。

'73年の指導要領の改訂で、女子高校生からも不満が吹き出していた時、私は市川房枝さんの「婦人展望」に家庭科女子必修は憲法違反だという文を書きました。裁判闘争をするか、運動を起こすか、どちらかをしたかったのです。裁判より運動だ、ということになり、その年の十二月に、半田さん、和田典子さん、文部省の小笠原ゆりさんを招いて「家庭科教育検討会」を開きました。この会がきっかけで共修運動が始まり、以来ずっと半田さんと一緒に運動をすすめて来ました。

その中で、半田さんが前の出版社を辞めさせられるということが起こり、「半田たつ子さんの新しい雑誌を支援する会」を作りました。

二、最近のWeについて感じること

川名 「婦人の友」という雑誌には各地に読者の会があり長く続いているというのが頭にあり、Weも不特定多数が買って読むより、ある程度定まった読者がいた方がフィード・バックする場があって、長続きするんじゃないかなと思ったんです。それで、読者会をつくらうという蔡和美さんの提案に大賛成して創刊と同時に「We城北の会」ができました。最初は十人ぐらいのメンバーで、ゲストを招いて話を聞くとか、映画をすると五十人ぐらい集まったりもしましたが、最近、都内でそういう集まりをしても人が集まらないんですね。蔡さんと二人だけ、なんていう時もありましたけど、二人いるから続けてこられました。今も二カ月に一回、無理ないペースでや



諸橋泰樹さん



川名はつ子さん



中嶋里美さん



半田たつ子

っていいこうと思つてます。通信も出して、そこに出来なかった人にも伝えていいこうと思っています。

城北の会も、地域の会のようになって、読者でない人もいますので、Weの内容にふれることはなくなっていますが、やはり、ここであつてなおしてWeの内容に則してやつていいこうとみんなによかけようと思つています。

半田 「このごろつまらない」とかの声は、一番胸にこたえるものですから、何がつまらないのか、どうしたらおもしろくなるのかを、是非歯に衣着せずおつしやつてほしいと思います。

諸橋 おもしろいですよ。(笑)

これはという一流の人に書いてもらつてゐるのは、さすがだなと思うのと、いくらでもこういう事を論じていそうな雑誌はありそうで実はなくて、それが一冊の本に編まれると

いうのは、「中央公論」でもないし、「思想の科学」でもないし、Weぐらいしかないですね。そういう意味では、一冊で全部まに合う、最初から最後まで読むと、重くなつて、ああ出口がないなという

ことは思いますけど、普通だったら、一つぐらいしか読むところがないのに、Weだと十カ所、二十カ所、必ずあり、考えさせるテーマがあり今のところ、退屈しないで読ませていただいています。

ぼくは、そういうことで不満がないんですけど、人に聞くとまず読む気がおきない。やはりビジュアルでない、活字が多すぎる、中身が濃すぎるせいなのかとも思ひ、Weのスタンスの問題でなく、世の中の全体の傾向としてそういうことがあるのですが、世の中に迎合する必要があるとは思ひませんが、しかしかたい中身をやわらかく読ませる工夫というのは必要になるだらうなと思ひます。

そうしないと、Weの財政的基盤があやうくなるであらうし、健全経営が第一だと思ひますので。読めば絶対おもしろいし、絶対役に立つ。絶対手ばなせない本だということで、

まず活字を読んでもらう工夫をすることが必要かなと思ひます。

半田 はじめの頃は、字が小さくて読みづらいということで、途中で活字を大きくしたんですけど、すると、薄まったという感じもあるんですね。

武田 字が大きくなった時に連載を書いていたんだけど、「ぼくのところは、活字を大きくしないで下さい」とって頼んだんですよね。

字が大きい、小さいというのは、ぼくはあまり関係ないと思うんです。ガリ版刷りで、読みにくくても、自分に関心のあるテーマだったら、読むんですよ。

なぜ、そういう声が出てくるのかなと思うのは、Weは、家庭科の教員や他の教員と別の分野で仕事をしている人とか、家庭にいる人など、さまざまな人が創刊の頃いたつたわけで、新しい家庭科と銘うち、そのことをうたつていながら、教員ではない人たちが、家庭科の内容うんぬんより、家庭科を教えている教師とはいつたい何なのか、教師とは何かとかなり厳しくつきつていたと思うのです。

教員も、自分の中にある教師であることの根柢みたいところで、迷つたり、当時、流

行った言葉でいえば、自己否定というようなことを考えている人たちも集まってきたと思うんです。

それが十年たって時代そのものがグルッと回ったということもあるかもしれないけれど、学校とか教育教師というものに対する外からのつきつけがWeの中で弱まっているんじゃないかと思うんですね。すぐれた実践や、テーマに関するすぐれた文章はあるんですが、教師や市民の読者の足もとをゆるがすようなものが弱まっているような気がするんです。

「教師って何なんだ」なんて言っていてもしようがない、そういうことから卒業して次へ行ったということもあるかもしれないけど、その問題は、いつも立ちもどっていくようにしないと、腐敗すると思うんです。

自分の足もとをゆるがされるような、そういう文章が載っていれば、やはり読むんですね。

半田 武田さんの言葉でハツとしたのは、おもしろくないという声の中に「オモイ」「クライ」「シンドイ」というのがあって、今やこの時代は、つきつけ、いくというのが向かない、つきつけにモロくなっているのか、読者が好まないのか、と感じたこともありま

すね。

諸橋 武田さんのお話、その通りだと思いますが、ぼくは、そういうつきつけられることに弱い読者がふえたことが、読者が減ったこととつながるんじゃないかなと、そうすればするほど、読者が減るんじゃないかと、逆説的に聞きましたけど。

武田 つきつけるといっても、糾弾するとかいうイメージで言っているのではなく、今年の夏のフォーラムでも、家庭科の先生がたくさん参加されて、家庭科の分科会はとても充実したんだけど、先生として参加して、また先生として帰っていくという、教材研究としてこれはもって帰るということがあったかもしれないけど、教員として参加して、若干、教員であることに疑いを持ちながら帰っていくというような変わり方があったかどうか。

もっと厳しく言えば、教員以外の人と、教員として参加した人が、同じ場所、二つのことをやっていたという感じが、あった。以前はいろいろ問題があったかもしれないけど、ゴチャゴチャしていて、交流があって、教員として参加したつもりが、自分の中に異質なものををつかんで帰らざるをえなくなると

いう、以前のような熱気がなくなった。整備されたがゆえに、そのへんのところが弱くなったような気がします。

福島 私は整備した方ですが。(笑い)

家庭科の最後の日の分散会で、そのらの問題がかなり出たんです。つまり、男と女の問題、自分自身や生活の意識変革が新しい家庭科の課題ではないかと。それがもう少し時間があって深められればよかったとは思いましたが……。

家庭科の各分科会では、かきまぜるような議論やアンチテーゼを提起するような、そういう参加はなかったんですが、たとえば「高齢化社会」の分科会で、市民の方から「家庭科で高齢化の問題をとり上げる時、とり上げ方によっては非常に危険性がある、それについて充分ふまえているとは思えない」と批判した人もいました。

もう一つ、「クライ」「オモイ」ということですが、武田さんの言われることはあるが、だいたい、こういうかたい内容のものは、今部数が減っていますね。大手出版社でも「顔」として採算は度外視して出している現状で、そういう中でWeが、100号続いたというのは並大抵のことではなく、非常に貴重な

と思うんですよ。

磯部 私は、Weは届いたらすぐ読むようにしています。フォーラムやゼミナールに参加していますと、Weに書いている方にお会いできるんですね。生の声を聞くと、また読み返して、その方の著書などを読んだりして、自分としては、少しずつ広まっているかなと思います。

Weへの私の要望は、いままでどおり広い視点から問題を扱ってほしいということです。

私は中学の家庭科の教員をしますから、同僚にすすめるんですが、なかなか読者になってもらうまでに至らないんです。ハウ・ツーもので、明日の授業にすぐ役立つ実践が載っていれば、とびつく人もいると思うんですが、私はそういうものは望んでいません。

今年のフォーラムでも家庭科の教師も教師である前に一人の市民であり生活者であるわけで、その人がどんな生き方をしているのかが問われているんじゃないか、ということがたくさん出たんです。そういうことを職場の中でたいへん思いをしている先生方につけていかなくてもはダメで、そういう時にWeに書いてあることが参考になるんです。

半田 活字も内容も詰めこみすぎ、もっと

内容は少なくていいから、カットを入れたり読みやすくしないと、今の若い方は読まないというご意見もあるんです。

武田 編集上工夫してビジュアルにするというのは少しは効果があるかもしれないけど、Weの場合、そういうふうに活路をひらくのは無理だし、意味がないと思うんです。

川名 「クロワッサン」とか、「オレンジペーじ」に太刀打ちできるわけではないです。ですから、読者層をどういうふうに考えるのかとか、読者と執筆者を含めた輪をどう設定していくのか考えた方がいいですね。

武田 読者もフォーラムに来る人も、学校の家庭科をどうするかという以前に、教師であることがつらくてしょうがないとか、授業が成り立たない、授業どころじゃない。男女共修どころじゃないんですね。それ以前の問題、つまり学校がつぶれかけているんです。

校内暴力がバーストと出た頃、ちょうどWeが創刊された頃の陽性な毀れ方でなくて、グズグズに学校自体の基盤が崩れてきている。あと20年、30年すると学校っていうのはなくなるかもしれないぐらいの感じがある中で、いろいろ考えている人たちに応えるものと、かつてのWeのある意味で混沌としたエネルギー

みたいなものがつながるんじゃないかと思うんです。今はそういう力が、整備されたがゆえに落ちているんじゃないかと思うんです。

福島 それは武田さんのおっしゃるとおりだと思います。今は普通学校でも、授業が成り立たなくなっているところはたくさんあります。そんな中で男女共修の家庭科をやらなくてはいけないとか、クラス運営をどうしたらいいとか。

教員が一番つらいのは授業が成り立たないことです。教員自身の生活と、生徒の生活との乖離が大きいのではないかと。

生徒がどうしてあんなに困っているのか、実態をつかみ、理解することができない、その悩みに、授業が成り立たないことの苦しみで、もう逃げ出したいって言うんですね。若い人も途中で辞める人がものすごく多いですね。以前は、結婚や出産でたいへんになって辞める人が多かったのに、その前に授業が成り立たないことで飛び出してしまふ、そういう状況ですね。

半田 武田さんがおっしゃること、よく分かります。私がやりたいのも本当はそのことです。川名さんが最初はワクワクして読んだとおっしゃったでしょ。誌面からドキドキし

たものが立ち上ってくる、そういうものがないとダメだと思うんです。

原発の問題でも、自分の生活はそのままにしておいて、原発が悪いという言い方は、私はイヤですね。そう言うなら、自分はどういう生活をしているのか問わなければ。たしかに追求を弱めた、ということはあります。

福島 学生運動のさかんな頃は、いろいろぶつかって、やっていただけ、今は分断されて、違った意見がクロスしないということはないのかしら。

川名 なにかやっていれば結局はつながっていることはすぐに見えてくるんじゃないでしょうか。近頃は、どこの会に行っても同じ顔に出会うということが多く、逆にそのことでみんな忙しすぎて会が続かないということもあるんです。

私も創刊の頃は不特定多数の人にWeの宣伝をして回ったりしたんですけど、今は特定の読者間で問題を深めていく雑誌だと思いますし、半田さんのご心配はないと思います。

諸橋 問題が専門化するにしたがって、達者になって自分の生活からかけ離れてくるという書き手の問題もあるかもしれないね。自分の生活はそのまま原発反対を達者に書

いてしまうような人が書くと、どうしてもそこから矛盾が出てこないでスッキリして終わってしまつて、行間から苦悩が伝わってこない。緊張関係がないというのか、文章全体の勢い、Weのもっている混沌さ、ページを開けば爆発するような話とばしりみたいなのがなくなくなってきた、そういうことなのかもしれないとお話を聞いて思いました。

武田 ぼくはWeを後ろのページから見ます。それは五年も書かせていただいていたから、ぼくの文の感想が載っているかなということでクセがついたんだと思うんです。書き手はそういうものが載ると、すごく元気になるんです。

ふつうは文章を書くというのは闇夜に鉄砲を打つみたいに、当たったかどうか分からない、反応が見えない、どういう受け取り方をされているか分からない。Weの場合は、これもどつてくるとというのが、私にとっては楽しい経験でした。ところが、この読者からの手紙が、おもしろくなくなっているって最近思うんですが、どうですか？

編集部の方で選択されるのだらうけど、以前は一つ一つは短かいんですけど、いろんな人がいろんなこと書いていたんですね。それ

が、今、長くなっているけど、パワーが落ちている。読者からの反応のボルテージが下がっているということもあるんじゃないかと思うんです。依頼原稿だと構えて書いてしまうんだけど、投稿の時にはストリートに核心部分と言う。その迫力が楽しみだったんです。

川名 思っているにしても、なかなか書くところまではいかない人が多いのでは。

中嶋 教師も読者もエネルギーがなくなってきたのはなぜなのか。こんなこともテーマとしてとり上げていくのいいと思います。

私が目を病んで休職して、復職した時に職員室の雰囲気、私はもうここでは何にも得るものがないという、そういう感じがしたんです。病院では、生の感じで接していたからでしょうけど。学校も閉塞状況というのか光が見えないです。教師も疲れているし、一般企業で働く人も働きすぎが問題になつて、今もう、その頂点に達しているような気がします。

三、これからのWeへの提言

川名 やはりWeはミディコミ程度でちよう

どよい規模で設定して、そういう特定の読者にとつておもしろい、刺激になることに絞ってやる。自分たちがおもしろいと思ってやっていたら周りの人も、寄ってくるんじゃないかと、そんなイメージが湧いてきたんですが。

半田 社会科の授業を創る会で「授業を創る」という雑誌を出していたのですが、誌代が高いですね。この会を主宰した故白井春男氏が「千五百円出して買ってくれる人だけを対象にしている。これを読みこなす人は、自分はそのくらいじゃないかと思っている」と言われ、一つの見識だと思ったんです。

はじめから、Weを読む人はこのくらいだろうと、色気などは捨てて、その人たちにとつて、ハラハラしたり、ドキドキしたりするものと決めていけば、こちら腰がすわるわけです。でも、出し続けるための読者数を獲得できるかどうかと、すぐ思ってしまうんです。論文だけではカタイので、インタビューなども入れましたが、その試みに対する声も届いていないんですね。武田さんではないですけど、読者からの反応は、とても淋しくなっています。

武田 昔、投稿雑誌というのがありまし

て、田舎で悶々としている少年が映画評などの投稿をして、投稿したもの同士でやりとりをして、初めて東京で出会うとかありました。他のメディアがなかった時代だったというところもあるんですが、Weのよさはそこに近い。すこし意図的にでもそのへんをもう一度活性化するようにするのも一つの方法だと思います。

フォーラムで担当した分科会は議論が中途半端でしたから、このままにしておいたら来年つぶれてしまうと思って、パンフレットを作ったんです。単に内容をテープおこししただけでなく、ほとんど限られた人しか発言する時間がなかったので、感想を書いて下さいってお願いのハガキを出したんです。そうしたらずいぶん集まって、それがおもしろいんですね。ですからやりようによったら書いて下さるし、書こうという気持もあるんだと。そういうところに活路を見いだしていけばいいと思うんですが。難しいのは、妙に家族意識みたいなものが出てくる危険性があって、他の人が入りにくくなる。必ずそういう問題が出てくるんです。そこを考えつつ、矛盾しているようにだけど、両方いっしょにやることが、大事じゃないかと思うんです。

川名 発起人のなかで途中で離れていった方たちがいることに、いまでも私はひっかかりがあります。最初、「面白路線」と「真面目路線」などと、ふざけて呼んでいましたけれど、その「面白路線」のひとたちが離れていった。「半田さんの雑誌を自分の売名行為に利用している人たちがいるのではないか」と投書なさったかたがいて、それが載ったことがきっかけだったのでは、と思っています。

どんな意見でも載せる、言論の自由を保障する、ということはもちろん原則ですが、あの場合、あの投書は、私には悪意と偏見に満ちているとは思えなかった。編集者がそれをなんのコメントもなしに載せてしまったのは大変にまずかったのではないかと。私などは、放っておくと堅真面目になってしまうので、自分に広がりを与えてくれる異質な人がいてほしいと思い、今でも残念です。

福島 開かれた雑誌という点では、読んでいて、抵抗のあるものも載ったほうがおもしろいわけですね。そういう面で、ちょっと弱まったこともあるかな。いま、面白グループというはなしがでたけれど、真面目グループで暗い人もあまり書いていないですよ。（笑）

その代わり、また、若々しい雰囲気も入ってきているし、それは時代の流れでいろいろ変わるけど、そういう点ではやはり、常に開かれていて、異質な意見が誌上で議論されるいいですね。いまのひとは、なかなか手紙を書かないですから。読者の声といえ、電話なんかも載せるようにしたらどうでしょう。

武田 そういのがあってもいいですね。いま、ワープロが出てきたから、活版ではなくて、わが家で作ってわが家で製本する、それを百も二百も作ってばらまくという、そういう、ミニコミよりもっと私的で、しかし、みんながかなり面白がって読むというのが出てきている面もあるから、大雑誌か、ビジュアルなものか、それではなければ、ミニコミを越えて家族新聞や個人通信を出してきている、その流れをどう取り込めるか。この十年でずいぶん変わってきているから、一回点検して、個人通信では果たせないような、また、大雑誌では果たせないような役割、開拓できる面はなにかを考えてみる必要がありますね。

中嶋 Weの活性化のことで、ひとつ考えていることがあるのですが、さっき、武田さん

が、フォーラムの分科会でパンフレットを作るとおっしゃっていましたが、私、Weにつどうメンバーで共同執筆してみるとか、Weの事業として、読者たちもひとつのキーステーションを作って共同作業をする。そういう利用者から活性化していく部分があるのではないかと。

Weでは特にフォーラムをみんな楽しみにしていますよね。参加者一人一人が、楽しみにしているということを中心に、お互いがネットワークを結びつけて関係をつけていくといいですね。

川名 最初のころWeの発送のお手伝いをしましたが、それがとても楽しかった。共同作業の楽しさが、最初からの、私にとつてのWeの魅力のひとつでした。

武田 「新しい家庭科——We」という雑誌が中核にあつて、重装備の単行本があつて、この二本でやるというのは、なかなか厳しい。もつと機動力を発揮するためには、ブックレット的なものをワープロでいいから、もつと小回りをきかせてワツと作って、みんな読んで、また集まりましょうかというようなのを、Weのひさしを借りてそれぞれがやっていく。そして、それ自体がWeの活動にな

り、Weの誌面の分散した形なのだ、というぐらゐの発想をしたらどうか。中嶋さんがいま言われたのは、とてもイメージがわきますね。

福島 ワープロでいいのよね。表紙だけちょっと加工して。

武田 そういのがたまつてきて、これはものになりそうだなということで本にする。

今度の夏のフォーラムの記録は冬の増刊号になるわけだけれども、それはそれで大事なだけれども、そういうふうにとしと構えなくとも、分科会ごとに、参加者の感想などを聞きながら、いったん早く出してしまふ。それを読んだ人から感想が来ればまた増補して出す、そうして次のフォーラムにつなげていく。そういう日常的な活動とあわせて一本にして行くと、Weの本誌の方も違つて来る。

僕の担当した分科会では初めから、パンフレット作りますから、と宣言してかかりました。誘つたけれど来られなかった人にも、パンフレットできたら送ります、次またお願いしますとつてあります。初めからその気で作ると準備の段階からおもしろいと思うんですよ。

磯部 フォーラムのとき、家庭科ネットワ

ーキングが広がっていかないのはなぜだろうか。話をしたんです。葉書一枚でいいのになぜ書かないのだろう。書きたい思いがあるのについまぎれて時期を逸するのか、書き手が見えないからか、そのくせ、書かれたものを見たい、情報を知りたいがっている、そのところを打ち破っていかないと広がっていかないね、と話しあったんです。

川名 書き出してみないとおもしろさがわからない。

磯部 そうなんです。書いてそれに反応があればまた書いてみようかなと思うんですけど。

武田 分科会を担当したので、必要に迫られて今まで読んでいなかったWeを引張り出して来ると、だいたい揃っているんだよね、テーマごとに。一種の百科事典のようになっている。その意味で、今回、関西の人がWeの会で索引作ってくれていることは、とてもありがたいことだと思う。

だから、半年遅れでも、きちんとしたものを出し続けていくのは大事なことからそれをやりつつ、一方で軽快なフットワークでやれることをやって行く。両方やれるといい。

半田 中嶋さんに男女平等のことを書いて

いただいたときも、福島さんの「経済の目」連載のときも、安い値段でパンフが出来たらいいいつも思っていたんです。それが、日常の忙しさにふりまわされて、具体化できなかった。確かに、その軽いフットワークというのもやってみれば出来るのかも知れないけれど。

武田 それはウイ書房がやるのはたいへんだし、また、限界があると思うんです。その点、Weの会にはいろいろなひとがいるから、じゃああなたこれちよつとお願いね、という感じでできるのでは。

福島 参加型の話がでしたが、最近は何でも少しづつ、個が確立してきているので、自分がその気にならなければ動かないということがある。「参加型」を周囲に「衛星」につけることはいいですね。できるだけたくさんの人が参加できるような。

中嶋 だれかがこういうのをやりましようと呼びかけて、一定の期間で作る。そういうような実際になにかを共同するのはいい。ただ意見をかわすだけではなく、いろいろな意味で関係が深まる。全部をウイ書房にまかせて、自分たちが離れていって、そのぶん、参加しない故におもしろくなっている、

その距離を縮める意味でも、やってみるといいと思うんです。

川名 ひとは、いま既に誌面にある記事を発展させ、再編集させていく、あるいは逆に武田さんのおっしゃったような、これからのものを誌面に反映させていくというように、いろんなやり方があると思うんです。

福島 大きな雑誌は情報量は多いが、必要な情報が少ない、Weが出たひとつの動機はそういうところもあるわけだから、そういう情報を。例えば、スウェーデンの高齢者問題も、税金が高いとか、自殺者が多いとか、間違った情報が流れている。国連で決議された問題も届かない。専門家だけが知っていて、我々は知らないものがたくさんある。情報について、また、いろいろな意見が展開され、それがまた記事になれば。あるいはさっきいったような「衛星」でそれがなされれば、なおいい。

半田 さつき諸橋さんがあとで提案するといわれたことは？

諸橋 いま、武田さんのいわれたことに尽きるという気がするんですが、僕は新聞協会にいて、どうやって、新聞業界という活字メディアの落ち目の産業が生き延びるかをずっ

と研究させられてきたんですが、やはり、その中で唯一生き延びそうなのは日本経済新聞と朝日新聞のようなんですわね。

ジャーナリズム機能を持ち、専門情報機関として生き延びること、多メディア展開がうまい。同じネタをいろいろな媒体で転がして、読者層の違う多メディアで出す。いま言われた、集まりの記録をすぐにブックレットに、そして本誌に、本誌連載を単行本に、それを全部ウイ書房の名前を使って、しかもウイ書房のスタッフだけでなく、周辺プロダクションが出していく。(笑) We一誌でいろいろなアウトプットができるような気がするんです。「十字路」、あるいは「アンテナ」を三年分一冊にして出すだけでも、ある程度の買い手はつくでしょうし、小回りのきく経費のからない、多メディア展開をやっていく。

もちろん、参加型で、周りの衛星を使っ

て。そうすればもちろん活性化するし、欲しい情報がたどころに手にはいるし、しかも廉価で。メディア論的に言うときまさに、Weはある種の情報処理機関、情報発信基地としてそれを等身大レベルで直接のコミュニケーションを含めてコミュニケーションを生む場を確保してくれると。そうすればすごくおもしろ

くなるなあ。そのためには、葉書も、ワープロも、ファックスも、電話も、使えるものなんでも使う、挟み込みの葉書ととにかく書いて投函すればいいというのを半年に一回はやる、電話投稿欄を設ける。多様なメディアをとりこむといい。

それから、家政学部や女性学の講座のある大学、教育学部のある大学の生協などへの販売ルートの開拓、Weのブレーンの先生がたに教科書に使ってもらうとか、売するための地道な努力も必要ですね。

これは保坂展人君から聞いた話ですが、「学校解放新聞」を出していたが、毎号出す毎に赤字十万円、これは駄目だと潰したところ、(いじめ110番)を始めた。

そのうちただでやるのはしんどいからと、N T Tのダイヤル・Qという、電話の受け手に情報料を支払うシステムを使った。一人一人の「いじめ」についての声を編集し日替りテープに録音しておいて流す。電話が一種の放送局。それを聞いて、また留守番電話に感想をいれてもらう……、というのが軌道に乗り儲けになり、テープ編集して売ると一本三千円で売れた。そのうち聞いているだけでつまらないと、また、新聞を復活した、というん

です。Weでもいろいろやってみてはどうか。

武田 家庭科ホットラインなどというものでも一年一回ぐらいやるのではないか。一番もったいないと思うのは、さっき言ったような、百科事典のようなものが死滅されてしまうことと、だれかが書いたことがそのまま流れていってしまうこと。提起された問題でとりあげるべきものは最大限受けていく。それがあると、また、書く人も張り合いがあるだろうし——。単行本と本誌ではとてもそれに対応できないと思うから、さっき言った軽いフットワークを使う。思いつきで言うけれど、「創刊時の一年のWeを読み直す会」とかしてもいいね。

福島 テーマ毎とかね。

磯部 図書館に注文したとき一般の人が読むには、表紙が地味だね、といわれましたね。

川名 でも、周りが派手だとかえって目立つこともあるし——。(笑)

福島 索引ができるのを機会に、主要な図書館に入るといいわね。

武田 そうなると、どの図書館に入っているかウイ書房でつかんでいる必要がある。

中嶋 いろいろ具体的提案が出たところで、どうもありがとうございました。

新しい 家庭科を 創るために

小学校では

子どもたちの食事の周辺 (二)

わたしの朝食と仕事

●東京都世田谷区立弦巻小学校

村田 汀子

一、生活を変えていける子どもに

家庭科の学習の最初の時間に子どもたちに見せる絵本がある。谷川俊太郎文・長新太絵（福音館）『わたし』。そして私の家庭科の授業は「わたしのくつ下」から始める。わたしのくつ下のこと知っていますか。なぜはくのか？ わたしのくつ下のめんどろみてますか？ 昨日はいたくつ下洗ってみようよ。せつけんも水も少なく使うようにしてね。家でもやろうよ。家の人のもできればね。

次は「わたしの朝食」。何を食べましたか？ おいしかったですか？ 食器出したりよそったり、テーブル拭いたりしました

か？ 誰がしたの？ 栄養のバランスはとれていたかなあ。三色に分けてみよう。赤の食品がなかった人いますね。わたしにできないかなあ。ゆで卵だったらできる。

くつ下洗いもゆで卵作りも面白い。これが生きていく力です。「わたし」がすてきに輝いたらそれは「わたし」を支えている人たちの喜びではないかしら？ 「わたし」は一人ではない。「わたし」は、「わたし」と「わたし」を支えている人たちのために、手にも体にも力をつけていこう。心を働かせていくためにもね。かけがえのない「わたし」を大切にすることは、人間を大切にする事です。

子どもたちが自分の生活を考え、自分の周辺に働きかけな

がら生活を変えていける力をつけてほしい。家庭科を学ぶことで自主・自立の力が少しでも育って欲しいと希う。そのための学習の内容や方法を模索することの連続である。

二、生活に取り組む

さて前号、子どもたちの夕食の周辺に焦点を当てて、子どもたちのおかれています現状の問題点を浮彫りにした。台所や食卓の機能の変化をまざまざと見たわけである。そこにどの子どもをも一つの主体として位置づける生活をとらえることの難しい時代であること、私が無力であることを痛感する。

そこで観点を変えることにする。子どもたちの朝食の状況は以前から気がかりで、今までも学習内容に組み入れてきた。その視点を抜けてみたらどうだろうか。朝の生活と朝食、一日の生活と朝の生活、そして「わたし」の生活行動と家族とのかかわり、「わたし」にできることは何か。これなら子どもたちが主体的に考え行動できそうだ。

「起床から登校」までの生活行動の調査結果では、生活行動の数は子どもによってかなり開きがあった。しかしそれらは家庭内での行動で、しかも自分で律することのできるものなので、学習の対象として効果を期待できるのではないかと考えた。学習は段階を追って四つに組み立てた。

三、私の朝食と仕事

(1)調べる

図1のような調査用紙を作り、三日間記録させた。

《調べて感じたことの記録より》

- ・朝食については、記録することにより食事の状況や食事内容を自分なりに把握し問題点を発見できた子どもが多かったし、充実した食事のために努力した家族もある。一人食べ、内容のバランスのとれていないことも指摘している。
- ・仕事についても、仕事をしていない、仕事量が少ないことに気づく。しなければいけないと思う。ここで努力をして、仕事の面白さ、母親の大変さに気づいた子どももいる。
- ・就寝・起床時刻については、遅寝遅起きであることを認めた子どもが多く、しかも時刻が不安定。安定しているという子どもも少数はいる。
- ・全体的には、仕事をしていない、何にも食べたくない日があった、そしてあまりよくないと朝の生活を省み、もう少し仕事をしなければと思う子どもが多かった。一方、調査の意味を理解し、仕事の大変さと自分がかかわることの楽しさを感じた子どもたちもいる。

(2)考える

朝食の大切さを中心に話し合いをした。朝食をおいしく食

わたしの朝食と仕事 (1)

調 べ る

年 組

月 / 日	曜	わたしが食べたもの / 上…料理名 下…食品名						一緒に(わは)に食べた人		食事の仕事 (自分のだけ…○ 家族のも…● しない…V)										食事以外 の仕事 (朝)
		主 食	汁	主 菜	副 菜	その他	一緒に 食べた人 <small>いっしょに 食べた人</small>	一緒に食べな かった人(理由) <small>いっしょに 食べた人 就寝・起床時刻 (時 分)</small>	した 人	準 備				か た づ け						
										食卓 拭き	食器 だし	食器 作り	もり つけ	食器 さげ	食器 洗い	食器 拭き	食卓 拭き	お はよう		
/		料理 食品名								はし										
										就寝時刻 今朝の起床時刻 (時 分)	就寝時刻									
/		料理 食品名								はし										
										就寝時刻 今朝の起床時刻 (時 分)	就寝時刻									
/		料理 食品名								はし										
										就寝時刻 今朝の起床時刻 (時 分)	就寝時刻									
記入例 1	月	料理 食品名	パン	紅茶	目玉焼き	生野菜	/	母 兄	父 (会社)	はし	●	●	紅茶 入れ	●	●	V	V	●	●	玄関はき 洗面所 みがき
9/8			パン バター	紅茶 砂糖	たまご 油	トマト	/			就寝時刻 今朝の起床時刻 (9時30分 6時30分)	就寝時刻			母	母		兄	母		
記入例 2	火	料理 食品名	ごはん	みそ汁	なっとう	/	果物	一人で	父 母 兄 (はしおしおし)	はし	V	V	V	○	○	V	V	V	V	V
9/9			米	みそ とうふ わかめ	なっとう ねぎ	/	りんご			就寝時刻 今朝の起床時刻 (12時30分 7時30分)	就寝時刻	母	兄	母	母	兄	母	兄	母	

* 食事の並べ方 (食事の型)

副 菜	→	主 食 … ごはん	パン	めんるいど
主 菜		汁 … みそ汁	スープ	牛乳ど
		副 菜 … 肉 魚	卵	大豆製品ど
		主 菜 … 肉 魚	野菜	緑黄色野菜
主 食		その他 … 大豆	いもど	
			果物 ど	

調べて感じたこと

1. 食事について _____
2. 仕事について _____
3. 就寝・起床時刻について _____
4. 全体的に _____

家の人より

表1 食事の仕事

仕 事		調 査		実 行	
		家族の	自分の	家族の	自分の
準備	食卓拭き	29	16	40	18
	食器だし	35	21	48	18
	食事作り	20	8	40	11
	もりつけ	22	13	31	14
かたづけ	食器下げ	36	54	46	44
	食器洗い	17	8	17	11
	食器拭き	16	9	18	16
	食卓拭き	27	12	34	15
	お皿洗	24	15	35	22

(数字は3日間の合計 5の1)

表2 食事以外

仕 事	調 査	実 行
くつそろえ	3	6
ふとんあげ	6	18
新聞取り	39	28
風呂洗い	1	1
雨戸開け	7	14
カーテン開け	3	
ごみだし	9	20
動物の世話	5	10
米とぎ	1	
げんかんそうじ		1
げたばこそうじ		1
牛乳だし		1
くつみがき		1
起こす		1

(数字は3日間の合計 5の1)

べるためにこれから私にできることは何かを考えさせた。

結論は、早寝早起き、食事前の仕事や運動とごく当たり前のことである。明日から実行しようと、具体的に時刻や仕事の内容を決めて目標とした。

(3) 実行しよう

(1)の調査と同じ形式の表でまた三日間実行させた。

《食事の仕事》《その他の仕事》

子どもの変容が一番際立った項目である。仕事量が増え、家族の分までする子どもも増えた。ただし五年生としては淋

しい内容である。(表1・表2参照。クラスの人数35人)
《就寝・起床時刻》

就寝時刻は、目標はやや早い時刻に設定しようだが、実際は調査時の結果とほとんど変わりがなかった。夜型生活が定着しているようである。起床時刻は、少し早い時刻に移った子どももいるが、全体としてあまり変化はない。
《実行してみても——子どもの感想》

全く前と変わらなかった、一日しかできなかった、部分的にしかできなかった、という子どもも少数いるが、大半は仕事をしたり、朝食をきちんと食べたりした結果に満足

し喜びを感じている。

(4) もう一度考える

調査時と実行時を比較しながら、生活をもう一度考える時間を取った。「朝の生活が変わったことでよかったことはなかったか」「自分の生活と家族の生活のかかわり方」「これから自分と家族の生活をもっと大切にしていくために、わたしに何ができるだろうか」を考えさせた。自分の行動と家族とのかかわりの関係は子どもにはとらえ難く、難しい授業であった。

四、親のひとこと

この調査に対して大きく四つの反応があった。

①行動する子どもを認め、ほめたり今後の成長を期待し、また親子の朝の協働の姿が見えてくるもの、あるいは学校の指導への感謝：四分の一強

②食生活の内容や家族の在り方を、調査を契機に反省させられたとするもの：五分の一位

③子どもの行動をよくないとし、もっと早く起きて欲しい、仕事を手伝って欲しいと子どもに求める傾向：五分の一位

④言葉の添え書きが無いもの、無関心か？：四分の一強
実行の段階では①が増えた。内容としては子どもの変化を認めたり、親子で楽しんだはりのある三日間であった、親子

で就寝・起床時刻について話し合ったなどがあった。一方子どもにただ求めたり、無関心の傾向はやや減ったが、ほとんどが調査時の人と重なっており、できなかった子どもともほぼ重なる。

五、おわりに

家庭科のどの領域の学習も子どもたちの生活の基盤である家庭・家族を抜いては考えられない。このテーマを追って数年、メンバーとの試行錯誤は苦しく、深みにはまりながら道を見つけようとした。この学習のために考え作った調査表は子どもたちや父母が生活を考え直すきっかけとなった。しかし、この後果たして子どもたちは生活全般に拡張ながらこの生活を継続していけるだろうか。そして働きかけを受けとめられなかった子どもたちはどのような生き方をしていくのだろうか。私たちは私生活にまで介入しすぎているのか。そうではない。何と言われようと、豊かな生活経験こそ真に豊かな人間を育てていくものと信じての実践なのだ。子どもが、家庭が、また学校現場が私たちに返してくる辛い空気の息苦しさを薄めて、陽の当たる場にしていくのも私たちの仕事としばしば思い返す。喜びが返ることも格段に多い家庭科教師なのだからと。時間が欲しい。子どもたちの多様な状況に対応するきめこまかな指導を継続していくには私たちも忙しすぎる。

新しい 家庭科を 創るために

中学校では

くらしを考える延長に 「古い」の授業を

●熊本県菊池郡七城中学校

境 洋子

一、はじめに

阿蘇郡の小国中に勤務していた十年くらい前、身障者コロニー光の丘「みづよ高原」を知った。将来福祉関係の仕事につきたいという高校生と共に家族で訪れた。障害児を紹介された時、「こわい」と言った長男(当時五歳)に私は驚き、申しわけなさでいっぱいだった。そして、授業だけでなく子育てでも何をやっていたのだろうかという痛惜の念にかられた。

その数年前から家庭科の授業では、食品添加物や合成洗剤の危険性について学習していた。子どもたちも私たちの将来も絶対安全であるという保障は得られない。そこで三年生の保育で家庭科のまとめに人間が障害を持つというところを取り

入れ、障害をかかえ生きていくことがどういふことなのかを考えさせた。私は、その延長で「古い」も扱っている。

二、授業では

(1)障害児の誕生、生、それにかかわる親の思いなどを取り扱う

授業の展開は、ビデオ、プリント、新聞切り抜き、私からの話題提供などとし、討論会形式とした。授業の中心は生き方を変えさせてくれた「みづよ高原」との出会いと、そこでの私の体験である。

子どもたちは「かわいそう、自分は障害者でなくてよかった」と同情はしても、自分のこととしてとらえられない。体育大会時の養護学校との交流でも、表面は楽しくやさしくふ

るまっけていても、ダンスなどでは手をつなぎたがらない。授業が実際の生活の中に根づいていないのだ。そこで近くの養護学校との半日交流を取り入れ、一緒に学習し、遊び、給食を食べるという体験の後、学習の場を設定した。子どもたちは自分の差別心と闘うようになり、少しは自分自身の課題として考えさせることができたと思った。

「かわいそうだ」「めんどろみてあげる」「何かしてあげたい」と話し、書く子どもたち。「そんな対応がその相手の人の幸せにつながるか、自立ということ、そして対等な生き方というのは何か」子どもたちと探りあった。そんななかで、教師である私と子どもたちの、日常のくらしにおける差別心が浮きぼりになってきた。

(2)近藤原理さん(なずな園園長)の講演を聞く。

障害者を封じ込めたり、隔離するくらしでなく、一緒に仕事をしたり、旅行をしたりして家族同様に暮らしている近藤さんのくらしぶりに感銘した。授業にも講演の録音テープを使った。「ものづくり」よりも「心づくり」の大切さ。細やかな心づかいでその人があるがままに受け入れていくおおかさ、そして共に行動できる人になる。つまり、「対等な生」のありようを子どもたちに考えてほしかったからだ。

*子どもの感想

今までで一番感動とゆうか心に残っているのは障害者の

詩だ。「命はきれいです」。私はあの言葉になにかすぐくひきつけられた。私が一度も考えたことのないような言葉を障害者の人は考えている。私は今まであんまり障害者に対して真剣に考えなかった。でもあの詩を聞いて私は見方がかわった。「なんてりっぱな人だろう」そう思った。その人だけではない。障害者でも三つ子を生んで苦しいのに一生懸命自分の希望を見つけていつてる人もいる。どうしてあんなに世の中を一生懸命生きられるのだろう、どこにそんな力があるのだろう。私にはどれも無い。健康でなにも不自由してない私には生きる力がない。私は自分が恥ずかしい。もっと希望を持ちたいと思う。もし私に障害児が生まれたらどうするだろう。岡元夫婦のように子のためにつくしてつくして一生めんどろをみるだろうか、みづよ高原はそんな親たちの不安をやわらげたものだと思う。努力すればその努力はむくわれるものだという。でもなみたいていの努力ではとてもできないと思う。私たちは一人じやなんにもできないけどみんなと力を合わせればできる。これから先、私は障害者の人たちと力を合わせてがんばることができたらな、と思う。特別な目で見ていた私がここまで考えたんだから、保育を学習して本当によかったなと思う。

(3)菊池郡の七城中に転動して
新しい学校で、前任校での実践を再度検証し、より実践を

深めていこうと決意した。

* A子の感想

障害をもつ人を差別してはならないということは、最初からわかっていたことですが、自分だったら、特別な目で見えてほしくないと思うと思います。ということとは、障害を持つ人も当然そんなふうにいると思います。授業の時、普通の人と障害を持つ人とどこで決めるかと聞かれた時、少し「ドキッ」としました。私はどこでどんなことを決めていたのだろうか。なんとなく、障害を持っていても、もっていないくても、みんな同じという感じがしてきました。でも、どこか心にひつかかるのは、どこかで差別しているということなのでしょう。

* B子の感想

私は障害を持った人に対して、今まで共同募金などを通してしか、余り考えたことがありませんでした。障害をもった人たちも、同じ人間です。私には今、どうしたら良いか具体的には分かりませんが、複式のような子ちゃんに言葉をかけたり、励ましたりしたいと思います。自分の子どもに障害児が生まれたら、させるのではなく、その子のやりたいことの手助けとして、めんどろをみていきたいと思えます。そして、学校にいきたくてもいけない人のために、そういうことが可能になるような運動を、将来やっていき

たいとも思いました。今私がやれることを少しずつやって、弱気にならないことが大切だと思います。

七城中でも体験学習を取り入れたいと考え、養護学校の体育大会などの見学に行ったが、距離的に無理であり、断念せざるを得なかった。しかし、視聴覚教材を使つての学習は理解する段階にとどまり、子どもの日常につながらないものどかしさがあつた。いかにして子どもの生活現実の中にくい込んでいくか。自分の差別心をえぐり出す場を設けるかが、新たな課題となつた。

そのころ、七城中では全教師が、子どもたちの自主性を育むために取り組んだ。生徒会にかかわつた私は、他の担当者とも相談しながらその活動を校内だけでなく、地域とのつながりまで広げていった。例えば、保健委員会が校区内を流れる「菊池川」の水質について考えさせ、地域の老人たちからの聞きとりをし、家庭での合成洗剤の使用について考えさせ、粉石けんの販売に取り組み、「カッパのように泳げる川に」というスローガンで、菊池郡市の合成洗剤追放集会で発表する。給食委員会で、地域の老人に「昔のおやつ」について聞きとり、老人たちとおやつ作りをし、そのことを全校集会で発表するなど……。つまり、生徒会活動の中に家庭科の授業で学んだことを発展させ、地域に住む老人との交流を組

み込んでいった。

子どもたちは、学級の中だけでなく、地域にとび出して地域の老人たちとふれあいながら、老人の知恵とともに「若い」ていく人間の生について、ゆっくりとではあるが学んでいた。

研究会や粉石けんの販売で知り合った「くまもと障害者労働センター」の人々との交流を授業の中で持つことができた。お互いの紹介の後、私が司会をして、交流を深めていった。何よりも労働センターの人々の開放的でしなやかな対応が、会の雰囲気をも明るく楽しいものにしていった。労働センターの人々と給食を一緒に食べたところ、足にスプーンをはさみ、カレーライスを食べている男の人を見て最初子どもたちは驚きの表情をしたが、じきに一緒に話をしながら楽しく食べた。子どもたちは障害を持つことの実態と労働センターの人々のたくましさやユーモアを学び、思いは自分たちと一緒にあることをつかみとることができた。

* C子の感想

私はこの交流会に参加して、とてもよかったと思います。まず私が初めに思ったことは、労働センターのみなさんが、とても明るいところでした。私はこういうことは初めてだったのでとても緊張しました。でも、話していくにつれ楽しくなってきた、まだたくさんのお話を話したいと

いう気持ちが増してきました。みなさんから学んだところもたくさんありました。私が今までに思っていたこととはだいぶ違っていました。それは始めに書いたように、とても明るいことでした。私はこの交流会に参加して、本当によかったと思いました。

* A夫の感想

僕ははじめ、今日は笑うことなんか絶対ないと思っていました。でも今日ここ七城中学校に来て下さった人たちはみんなすつごく楽しい人で、いつの間にかその笑いのうずにはひきこまれてしまい、ガラガラ笑っていました。今まで僕が考えていたことと全然違った感じで、なんとなく身近に感じられました。こんなに楽しい人たちなら、僕もすぐ友達になれるような気がします。今からは、今までと違った目で、障害者の人たちを見ることができると思います。

次なる課題は子どもたちに障害を自分の生とびつたりと重ねて考えさせることだが、子どもの感想から次の授業のヒントが得られた。

* D子の感想

自分の生活を見ると、普通の人は街などで車いすや障害者の人がいたりすると、すぐに目を見張りがちです。でも、私は、自分の祖父が左側は目も耳も手も動かなくて

どうにか歩けるぐらいで、はつきり言えば、寝たきりに近い状態なので、障害を持つ家族というものがよくわかります。私は人間が障害を持つということとは、それはとてもつらく毎日がいやな生活だろうと思います。それを私たちが少しでも和らげてあげることが一番望ましいことだと思います。私の祖父の例を言うと、楽しい話をしてあげると祖父はほほえみがこぼれます。それに車イスで外を散歩していろいろ教えてやったりしますがそれは時々です。なぜかという祖父はじろじろ見られるのがきらいだからだと思います。やっぱり自分が障害者の身にならなければいけないと思います。あと、相撲とか楽しいTVを見せたり、肩をたたいてあげたり、それは喜びが大きいです。してあげる方までうれしくなります。祖父は、赤ちゃんと同じになった”と言いますが、私は違うと言いはります。そんな祖父を見て私は、将来老人ホームのボランティアをしたいなあと思っています。

七城中の場合、祖父母と同居の子どもも多く、自分のできる範囲でつらい立場の人たちに手をさしのべるやさしさは持っている。

私は以前「ボランティア」と聞くと、なんか「まやかし」性を感じていた。それは行政が取りくむべき「福祉」を時間に余裕のある人に無報酬で奉仕させて……と。しかし、原発

反対の運動する人々、手当も旅費の支給もなくとも原発はいやだというただそれだけの個人の思いで動く人々の姿に感動し、そのような行動こそがボランティアの精神なのではないかと思いはじめた。やりたい者で進めていけば、いつかやりたいもの、考えてもないものを引き込める。そこに運動の力を感じ、そんな活動を子どもたちにもできないか、と考えた。

正直にいうと、七城にきて数年間、生徒会活動にかかわり、動くうとしない子どもたちまでも組織的に動かすことに「つかれ」てきはじめていた。こんな経緯から、町内の老人福祉のボランティア活動に意志のある子どもたちと共に参加し、障害や老いを子どもたちと共に考えたいと願っている。

三、おわりに

「高齢化社会」にかかわる実践とはいいいく報告で、心苦しい。

私の場合、「最初から子どもたちに『高齢化社会』について……」というのではなく、添加物、合成洗剤を扱う延長に、障害や、老いの問題が自然発生的に生じてきている。「老い」については、まだまだ入口に達したばかり……、これから先、子どもたちの授業中の様子や、授業後の姿から、次の学習の課題をみつけ、その内容や方法を模索していきたい。

新しい 家庭科を 創るために

高等学校では

高齢者問題と福祉

●新潟県立柏崎常盤高等学校

矢代 節子

一、はじめに

'94年から実施される新学習指導要領では、家庭一般・生活一般・生活技術の三科目から一つを選択履修することになります。三科目に共通している新しい視点は次の三つです。

- (一) 家族と家庭生活、家庭経済と消費生活に関する内容
- (二) 青年期の生き方と結婚、親としての役割に関する内容
- (三) 高齢者の生活と福祉に関する内容

新学習指導要領は多々問題を含んでいますが、日本の高齢化は他国と比較して非常に早く進行しており、厚生省の推計によると二〇二〇年には全人口の二三・五%が六五歳以上になることが予想されています。そして老人が皆幸せな生活を

送っているとは言いがたく、また老人を抱えた若者の生活も決して幸せとは言いがたい現状を思う時、「高齢者問題」を授業でとりあげ、高校生に考えさせることは大切なことだと思います。

二、授業実践

(1) 資料による理論学習

- ① 高齢化現象について
- ② 老人の生き甲斐について
- ③ 独居老人について
- ④ 老人介護の問題について

(2) 実習・体験による学習

- ① 敬老の日になんだ新聞作り
- ② 障害者福祉も含んだマンガの作成

2時間
2時間

③サイコドラマの脚本作り（家族関係、友人関係、教師との関係等も含む）と実演 5時間

④特別養護老人ホームでの介護・ふれ合い実習 6時間
ここでは紙面の都合で②の実習・体験による学習についての報告します。

①新聞作り

このねらいは教師が一方的に知識を与え、それを生徒がノートにとりテストのために暗記するという学習ではなく、生徒自らが新聞を読んだり本を調べたり、祖父母にインタビューしたりして学習を展開していくところにあります。新聞作りを通して得たものは、断片的で体系づけられたものでないにしても、自分自身で調べ、考え、まとめて表現したということから心に深く残るものがあると考えています。生徒はB4の画用紙を用い、色をつけたり、絵や写真、グラフをつけたりして各々工夫していました。新聞のタイトルでユニークなものをいくつかあげてみますと、「極楽タイムズ」「特別養護老人ホーム特集」「私のばあちゃん新聞」「おじいちゃんへの手紙」「1・2・3でおばあちゃん、元氣いっぱい夢いっぱい」「共に歩もう高齢化社会」「長生きしてね」「ほのぼの新聞」等。

内容は各国の福祉制度、年金制度、特別養護老人ホームに

入っている祖母の一日の記録、老人の生きがい、アルツハイマー氏病について、在宅介護は可能か、祖父母からの昔の暮らしや衣・食・住・遊び、教育、戦争体験についての聞き書き、事故のため車イス生活を送らざるを得なくなった祖父の家の改築の紹介、家庭看護の方法、老人をベッドから解放するには、地域の敬老会の取材、村役場での調査等多岐にわたっています。新聞は教室に掲示してお互いに読み批評しあいます。

②マンガの作成について

「なあんだマンガか」と軽べつされるかもしれませんが、この授業はむづかしかったです。老人や障害者を理解し、同情ではなく真のやさしさや思いやりの心を持ち、ユーモアを持ってそれを四コマに表現するのですから、心理学の勉強でもあり、福祉の勉強でもあり、描画の勉強でもありました。生徒は楽しそうにおしゃべりしたり相談し合ったりして書いていました。テーマを探すまでが大変でしたが、描画はごく一部の生徒を除いて苦労はしなかったようです。私はブラックユーモアにならないように机間巡視しながら、「おばあちゃん早くお星様になろうね」はだめよ」とか、「このセリフはこう変えたら」とか、「この場面はこうしたら」等とアドバースしました。このマンガは、柏崎市社会福祉協議会で募集している「福祉マンガ」に応募し、プロの漫画家秋竜山氏の



審査により六編が入選しました。九月に開かれる市民福祉大会の会場に出品作品は全部展示され、入選者は表彰されることになっています。これは教育は学校のみにとどまらず広く地域社会と連帯すべきだと考えて、応募しました。ここにあげた作品は入選作品ではありませんが、老人を対象としている代表的な作品という意味でとりあげました。

③サイコドラマについて

③サイコドラマについて

六〇七名でグループを作り、テーマを決め、危機的場面をどのように解決していくかを討議させ、それをシナリオに書き、役割を分担して演じるものです。いかに問題を解決していくかの過程が大切なことから、シナリオ書きでは心の動きを適切にセリフにあらわすように指導します。一例を紹介し
ます。

題は「明日に向かつて」、登場人物は祖母トメ、妻花子、夫太郎、子供賢一の四人です。ぼけはじめた祖母との少しピントのずれた会話、祖母と妻の口論、老人ホームに入れると言い出す妻となだめる夫、子供の心の痛み、祖母の嘆きなど、最後は家族で面倒を見る結論になるという筋書きです。このグループは祖母をどうするかで「殺したら。よく新聞にあるじゃない」とか、「絶対老人ホームにやるべきだよ。ホームの老人の生きがいは家族との絆だって言うから時々面会に行くようにしたらいいんじゃない」等と話し合っていました。

たが、結局在宅看護という結論を出しました。高校生に痴呆性老人の在宅介護がいかに大変かはわからないと思いますが……。生徒たちは「小学校の時お楽しみ会でよくやったあの要領だね」と言いながら、楽しそうにシナリオを書き演じていました。

④特別養護老人ホーム実習について

特別養護老人ホームで、一日介護とふれ合い実習を行いました。このねらいは「人間はかならず老いる」「老いるとはどういうことか」を理解させることにあります。もちろん、老人と接する技術や心構えを修得するという点においても意義があります。次に特に優れた感想文ではありませんが、最も平均的なものという意味で紹介します。

◆特別養護老人ホーム「やすらぎの里」を訪問したのはこの実習を入れて四回目でした（この生徒はボランティアで三回訪問している）。何度行っても良い体験のできる所だと思いました。初めに私は施設内の清掃をしました。あるお婆さんがベッドに座ってぼんやりと外を眺めているので、「お婆ちゃん、今日は雨が降っているね。雨つていやだね」と声をかけると、「そうだね、雨はやなもんだね」と返事がきました。ドキドキしながら声をかけたので、お婆さんの返事があった時はホッとしてしました。「これから雪も降っ

てくるね」「そうですね。あんたたちはどこの人だい。偉いね。こうしてここに来てくれて」「私たちはね、柏崎の常盤高校から来たんだよ」「そっかい。こないだ来てくれた人たちは俺たちにしりとりにしてけれなんて言うんだども、そんがん知らんがに、しりとりに歌なら知っているけどな」と私とお婆さんの会話が続きました。

「お婆ちゃん、しりとりに歌ってどんな歌、歌って見せて」と頼むと、快く歌ってくれました。歌を歌っている間お婆さんはとても生き生きとしていました。私はずっとこのままこうしてお婆さんと話ができたらと思いました。

このお婆さんは足が悪く杖を使っていました。この日は何度も食堂へ行ったり来たりしたけど、その間私はずっとこのお婆さんと手をつないでいました。私がお婆さんと手をつないで歩いているとお婆さんは私に気を使ってこんな優しい言葉をかけてくれました。「お前さん、お前さんが早く行きたかったらかまわんで行ってもいいんだよ」「うん。いいよお婆ちゃん。こうしているよ」。そして私はお婆さんの次の言葉には涙が出そうになりました。「お前さんたちは偉いね。こんなに足の悪い俺たちのところに来てくれたり、こうして手をつないで歩いてくれたり本当にありがとね。うれしくて、うれしくて一生忘れないからね」。必死になって私は涙をこらえて言いました。「いいよ、お

婆ちゃん」。これが私の精一杯の言葉でした。私たちがお婆ちゃんに優しくすることで、こんなに喜んでもらえて感激しました。この実習で得たものは大きかったです。

◆(略)前に新聞でアメリカの老人のことを読みました。アメリカでは老人が赤やピンク、紫等のきれいな色の服を着て、アクセサリーをつけ、化粧もして身を飾り、誇りを持って自立して老人だけで生活を楽しむということです。ホームに入った場合でも自立した生活が送れるように配慮されており、もちろん個室が用意されているということです。このホームは個室がないし、老人が皆地味だし少し考えさせられました。

◆(略)寮母さんが汚れたおむつを交換するのを見ていたら、てきぱきとしていてさすがだなあと思いました。同じ部屋のお婆さんが「いやだねえ。汚れた物は」って言う感じで言った時、寮母さんは「どうして？ そうは思いませんよ」とやさしくほえんで答えた時は感動しました。私は今まで老人のお世話はいやだなあと思っていたのが恥ずかしくなりました。

私は特別養護老人ホームでの一日実習を心に決めてから、そのためにはホームの所長さんの信頼を得ることとともに、なによりも私が入所している老人たちを理解しなければと思います。夏休みに二泊三日でボランティアを行ってきました。生

徒たちは、附属幼稚園で実習を積んでいたもので、老人たちに対してとても良い動きをしていました。大勢の様々な老人たちに接して、生徒は学ぶところが大きかったようです。

三、終りに

この実践は保育科でしたものです。保育科だからここまでつつ込んで実践できたのですが、これをすべての男女が必修として学ぶ家庭科(私は家庭一般を実施したいと考えています)で実施することは可能かどうか考えてみました。新聞とマンガはどちらか一方好きな方をさせればいいでしょう。サイコドラマも可能で面白いと考えています。老人ホーム訪問は課外活動にならざるを得ないでしょう。

老人福祉に限らず、障害者や病人等も含めた弱い立場にある人たちが生き生きと生活していくことができる福祉社会が実現するためには、福祉政策に力を注ぎ、一般市民の福祉への関心、弱い立場にある人に接する時の心構えや技術、ボランティア活動が広く深く市民に根付くことが大切だと考えています。そんな思いで授業する私のねらいが生徒に伝わるかどうかは、私が生徒との間に良い人間関係を築いているかどうかにかかわっているように思います。反省する所も多々ありますが、私のねらいはこれで良いかどうか、方法は適切か、御批判をいただけたら幸いと思います。

新しい 家庭科を 創るために

高等学校では

高齢化社会がやってくる

●前宮城県立高等学校

高橋 香代

日本の高齢化社会の進展速度は、欧米のそれより極めて速いという。このことは厚生省人口問題研究所推定の高齢化率が修正されたことや、日本大学黒田教授などの指摘で明らかにされている（一番ヶ瀬康子著『現代の老後考』より）。そして、高齢化社会への対応が不十分のまま、今日に至っている。

一九七〇年代（50歳代）に、家族問題を取り扱っていた頃の私の感覚では、いろいろの社会的背景等から自分たちの老後は大変な時代になると予想はしていたが、一九九〇年代、私の周辺を見ると、正にどう老後を過ごし、生命を全うすることができののか、寿命一杯生かすことができるのかが大きな課題として、のしかかってくる。

私は現在六十七歳と五カ月。姉六十九歳、母九十三歳の家族構成からしても、正に老人家庭そのものであり、七〇歳代が九〇歳を看ながら生活することは、いろいろの面で困難が山積している。先ず居住地の問題、母の居住地まで私の生活根拠地（仙台）より一〇〇キロメートル余りの遠隔地であること。金・土・日は帰宅のためのシルバー運動も、身体的に限界かと思うが、幸いに母は九〇歳を越したとは言え、まだ歩けるし、自分の身の回りの処理はできる状態であるが、住・食生活・交際等のすべてを担当する姉は、高血圧と膝関節炎の病を持ち、治療しながらの生活で、医療機関に遠い二人にとっては、常に不安がつきまとう。といって明治時代から住み馴れた土地を離れて、都会に住み替えることは容易で

はなく、土地・財産の管理問題と地域社会の交際、墓管理のこともある。老人施設に入れようにも、入所できる施設もなく現在の養護老人ホームの規定には該当せず、先の短い老人に、ホームのことなどおくびにも出せるものでもない。このように考えると、次の問題が浮かび上がってくる。

一、人間の生き方を学ぶチャンス

高齢者が二十一世紀には四人になるとすれば、高齢者の存在は社会の“一部”ではなく、かなりの部分を占めることになり、それは社会的・経済的にさらには文化的にも大きな影響力をもってくる。またそのかなりの部分をしめる高齢者の若い世代への影響、及び両者の関係は当然かわってくる。老人の問題は他人事ではなく、人間の生き方とかかわってくる。ライフワークの中で、人間生活とは何かを考え、どう生きるか高校生活の中で考えるチャンスを作る必要があり、家庭科がその具体案を作るべきものと思う。祖父母・父母の生活・考え方から学ぶ三世代同居説の可否、自立、将来に対する明るい展望が開かれるような学習を期待したい。

二、日本の社会福祉問題——高齢者の立場から——

高齢社会とは、いったいどのような社会であろうか。十五歳未満の幼少人口に比し、六十五歳以上の人口が多くなると

いう点から考えて、職場でも地域でも、高齢者がその重要構成員となる。高齢者の問題は、社会全体の問題としてとらえ、政策に反映させるための学習が必要と考える。五人に一人が六十五歳以上、人生八〇年、あるいは九〇年という暮らし方など予想だにしかつたことを思うと、高齢化社会に向かつては、私どもが今まで当然と考えてきたことや、無意識に思っていたことを改めて自覚し、福祉のあり方を根本から考え直してみる必要がある。

(1) 年金の充実と定年延長、婦人年金の拡充

日本の年金は、定年が五十五歳、あるいは六〇歳であるにもかかわらず、その給付は六十五歳からのものが多い。この間のギャップをどううめるのか、今や賃金生活者のきわめて深刻な悩みになってきている。

アメリカでは公務員定年なし、企業定年七〇歳、スウェーデンでは六十八歳という定年のあり方も、福祉問題の前提として考える必要がある。定年問題は、経済問題だけでなく労働によって生き甲斐を得る側面を、七〇歳に達する今実感として強調したい点である。

さらに日本の年金には格差があり、主要な年金は八種類あるが、その中でもっとも加入者の多い国民年金の給付では、とうてい生活することはできない。したがって最低限生活できるだけの額を保障しながら格差是正する方向への抜本的改

正をする必要を考えさせることと、さらには専業主婦が自分の権利として入る唯一の制度である国民年金の受給額の低額さに、気づかせ、この改善を考えることと、あわせて憲法二十五条について学習するチャンスでもある。

(2) 日本の住宅政策

日本型福祉社会論や、第二臨調のもとでの社会福祉や社会保障の切り捨てを主張する論調には、社会福祉や社会保障が国際水準並みというまちがった認識がある。これについて諸外国と比較の上で考える素材をあげたい。

イギリス・西ドイツ・スウェーデン等では、住宅保障を福祉政策の重要な柱として基盤に据えていることにふれる時、わが国の住宅政策に対して抜本的検討を加える必要に目を向けさせる必要がある。我が国の持ち家政策中心の考え方が、老人ホームの居住基準に現れている。長い間大切にしてきた思い出の家具や置き物等、一切捨てて入居しなければならぬ実情など、福祉国家と銘打つ為政者には考えも及ばぬことかもしれない。

(3) 老人医療

過密都市においても問題はあがるが過疎地における高齢化社会問題の深刻さは、きわめて大きい。現在六十五歳以上の人口が八割を占めている地域も出現している。その上過疎地では医療及び福祉体制がきわめて不充分であり、緊急医療につ

いての十分な配慮が全くなされていない現実も、生徒を参加させる試みによって把握させることができる。

高齢時の大きな課題である保健医療問題について、最近の老人保健法の相つぐ改正には、年金生活者の医療を受ける立場と、退職後、医療機関に多少の関係ある者の立場の二方面から、みせかけの医療改悪に腹立たしさをおぼえる。

全日本民主医療機関連合会のパンフによると、政府は「医療法」の改悪法案を今国会に提出、その内容は、医療機関も患者も差別するものとなっている。

厚生省は、医療法改正に先立って、一九九〇年四月より医療保険の内容について、大改革を実施した。老人病院（七〇歳以上の入院患者60%を超える）に入院している患者の治療費は保険から除外され、治療上検査や注射が必要でもこれ等の費用は病院の持ち出しとなる。つまり、七〇歳以上は治療する必要があるということか。お金の持ち合せのない老人は、うば、捨山、ということか。

また一般病院では老人の入院患者が多いと老人病院にされ、保険からの収入が減り、病院経営が困難となるので老人の入院を断ったり、無理に退院を迫ることになる。

医療法改悪の第一のねらいは、「効率的な医療」体制の名のもとに、病院をランクづけして、老人の長期入院患者に、入院を制限、受けられる医療を制限し、命の重さも金次第と

	特定総合 病院	一般病院	長期療養 病院	老人保 険院
医 師	9	6	3	1
看 護 婦	40	25	17	8
介 護 人 (無資格者)	8	+α	25	20

いう営利医療を大きくすすめようとするものだ。病気の治療を受ける立場から病院を選択するが、「医療法」によってランクづけされるので、各病院施設・人員基準を参考まで記載すると表の通りである。

厚生省の伊藤雅治老人保健課長は五月十五日付朝日新聞論壇で「低医療費を押しつける政策をとっていない」と述べたが、千葉の病院長・遠山正道氏は、同じく論壇で「『医は算術』強いる低医療費政策——患者処遇低下し経営も苦しい——」とのタイトルで、経

済大国日本の一人当たり国民医療費世界十四位、社会的入院など福祉費相当分を差し引けば実質二十位ともいわれる現状に、「国民がモノ申す時であろう」と述べている。

(4) 老人福祉事業の活用と改善について

わが国の老人福祉事業は、戦前は家族制度のもと、老人を対象とする社会事業が主で、その施設収容者は極貧で「独り身」の者に限られていた。この傾向は戦後もひきつがれ、一

九六三年に老人福祉法が公布されるまでは、生活保護法の養老施設が存在したにすぎなかった。

ところが高度経済成長のもとで老人問題が浮上し、老人福祉法が制定され、その理念は「社会の進展に寄与してきた者」という老人像であり、施設中心主義、経済的必要度による施設需要の供給原理によって運営されてきた。

一九七〇年代に入り、高齢化社会が注目されると、在宅福祉、コミュニケーションが叫ばれた。必ずしも望ましい形とはいえない状態で、いまだに老人を「社会的弱者」として扱い、今日に至ったと。

老人ホームの存在は、老人の心身の状況と遊離し、それが老人に不安を与えている。すなわち養護老人ホームや軽費老人ホームに生活できるのは、健康な老人に限られており、受け皿としての病院や、特別養護老人ホームとの連携は制度的になされていない。軽費老人ホームでは、家族との不和や、住宅問題が理由で入所したのに病気になるという手がかかるその苦悩は深刻である。

第二に、居住性の弱体、日常生活上、生涯の住居としての機能は考えられず、大部屋雑居が多く、個室も余りにも狭い。そこでの生活時間もさまざまな問題がある。

第三に、わが国の施設は巨大規模であり、入所定員二〇〇〇人を超えているものもある。厚生省の認可基準は最低五〇

人であり、昨年西ドイツ、スウェーデンの老人施設を見学して、明るく小規模で、地域や家族との交流がのびのびとできる環境にあったことは、学ぶべき点が多かった。それにひきかえ一昨年、知人の老後について相談を受け、仙台市の福祉課へ出向き、その収容施設の少なさと、三カ所の養護老人ホームを訪ねての感想は暗く、官僚主義が濃厚で、弱者に対する侮べつ的な視線に国の老人福祉に対する方向をかいまみた気がする。

三、家庭科教師の方たちへ

家庭科は、命とくらしを守り、発展させる教科であり、民衆的家庭生活を創造するねらいを持っている。男女共に学ぶものとして位置づけられた今日的役割は大きい。命を守り健康生活を維持し、社会的役割を担うことは、人間生活の基盤でもあり、家庭科はその一翼をになっている。

しかし、高校生は受験競争の中にいて家庭科を息抜き、教科としか考えていない。彼らをどのようにしたら燃えさせることができるか、教師と生徒との人間関係をどう作っていくかが課題であろう。私は、幸い市内の女子高校に勤務、現代の高校生気質にふれ、得難い若さに圧倒された経験がある。

その高校は普通科女子高校で大学進学者は八割位、就職が二割といったところ、長い歴史と伝統を誇っている。ここの

家庭科では十五年以上も生徒の共同研究を続け、意欲的な学習活動と取り組んできた。前期の共通テーマは「家庭生活を考える」。後期は家庭の問題、老人問題、介護問題、女性と職業、福祉の五つに焦点をあてた。五、六人でグループを作り、授業と併行しながら学習に取り組ませ、図書館、社会施設、実地見学、資料等でレポートをまとめる。クラス発表、全学年発表の場を設けると教師も圧倒されるような研究も生まれる。そこで後輩の方々に言いたいのは、教育とは伝達ではないということだ。

私は現在個人病院で病人食を担当し、食習慣が健康に及ぼす影響を目の当たり経験している。食生活に関する働き蜂の認識不足をどう指導すべきか悩む。一般社会の豊かさの中の貧困は何に起因するものであろうか。家庭科は食生活に関して健康とは無関係に教えているのではないだろうか。私はかつて家庭科教師だった者の反省として、社会的・文化的・医学的側面から家庭科を考える力が足りなかったと思う。後輩の方々に期待して筆をおく。

荒野のバラ

地域再生の試み (その2)

—風成の海は碧く—

元熊本市立中学校社会科教諭

田 中 裕 一

1 カタカナには毒がある

「カタカナがきたら気をつけろ」と、宇井純は『公害原論』に書いている。ウォーターフロント、テクノポリス、シートピア、バイオ、ハイテク、リニアカー、大型プロジェクト、第三セクター……。ワープロ、パソコンなどは、その液晶や電磁波やハイテク汚染の全貌も解明されぬうちに、市場原理だけが先行して、大資本はすでに教育現場までその支配下においた。生活の拠点である住居さえ、ハイツ、コーポ、メゾン……と性懲りもない命名が続く。これでは人が主と書いて「住」と読むどころか、犬が倒れると書いてワンパターンと

読む方がまだ。安アパートが「マンション」、水害常襲地帯が「リバーサイドニュータウン」だから恐れ入る。「川端新町」で事足りるというものだ。

どの業界にも共通のこうした現象は、とても文化の国際化と呼べる代物ではなく、正確には主体性をかなぐり捨てた文化の植民地化と呼ぶべきものだろう。

ゴルフの解説では、助詞だけ日本語という奇妙な言語を使う。「ギヤラリー」などカッコつけなくたって、その実意訳すれば「ヤジ馬」ではないか。最近ではゴルフの会員権がらみで、地価操作から政財界の癒着まで、土石流、景観・生態系破壊から地下水汚染に至るまで、リクルート、新都庁汚職から地方自治体の汚職まで、まさに「亡国スポーツ」の観さえるあるゴルフだが、最近のレジャー産業による国土破壊は狂気の沙汰だ。

一九八八年、日本のゴルフ場は一五八三か所、造成中が二二〇、計画予定が五二〇、リゾート法がこれに加速をつけた。

世界のどこに、これほどばかげた国土の野放しの使い方を許す国があるだろうか。日本人が、制服↓君が代↓野球↓ゴルフ↓ゲートボールとパターン化した生活スタイルになびくことからして異常である。この狂気の国土破壊は、中曽根民活とリゾート法に触発された。一九八三年三月国会は売上税で荒れた。中曽根が、「この顔が嘘をつくかと嘘をつき」と公

約違反を問われていた時、「総合保養地域特別整備法」（通称「リゾート法」）は審議も不十分なまま六月に成立した。法人税特別償却、特別土地保有税減免、政府系金融低利融資などの措置で、大資本、地上げ屋、政府・自治体による自然の私有化と破壊が始まった。その無残な実態を見ると、再生なき地域の死は目前である。十八ホールのゴルフ場に年間四・五トンの発癌性、魚毒性の疑われる農薬の散布、地下水汚染と枯渇、土砂流と、人体被害（キャディなど）。生態系破壊など止まる所をしらない。カタカナはおそろしい。「リゾート」は代表格である。このすさまじい国土の私有化と地域破壊の背後に、大資本への過保護と、第一次産業への無策と、国民の愚民化という決定的な政策の貧困が歴然と映るのである。

2 「周遊管理」を本来の修学旅行へ変更する試み

地域住民の未来に重大な責任を負うもの―それは教育である。地域の破壊と再生は、それ故重大な学習テーマとなる。貴重な時間と金を、業者まかせの観光コース修学旅行に注ぎ、残った想いはショッピングと枕投げと記念写真のVサインという、貧しい修学旅行を改変した理由はそこにあった。私の勤めた桜山中学で討議の末、修学旅行のテーマを「人間と自然―その過去・現在・未来」とし、コースを山口県秋吉台秋芳洞、新産都市大分、臼杵市風成区かまたしの三か所に定め

た。前例がないコースなので、事前調査に六名の職員が二泊三日で出張した。教委からクレームがついたが、生産工程（理科）、立地・行政・経済・社会（社会）、住民の健康・安全（保健）、生徒の生活と安全に（養護・生徒指導）、涉外と全体計画（学年主任）担当を主張して認めてもらった。調査は、大分は新日鉄・昭電・九石・鶴崎パルプ・住友化学・公共草頭・二期埋立地・三佐家島地区（公害による移転地区）、明野あけの団地（企業職員住宅）、それに神崎・佐賀関、臼杵市は大泊・風成区を強行軍で調査した。

幸運にも、青年劇場の大分公演「風成の海碧く」にスケジュールを合わせる事ができた。熱気を帯びた現地公演とあって、上演後のステージにはそのモデルとなった風成区長や吉田弁護士も現れ、会場は興奮と感動の余韻がいつまでも収まらなかった。この思い切った修学旅行の試みの原動力は、この時六名の職員が受けた芸術的感動にあったのかもしれない。かくして旅行のしおりも作成されたのであった。

3 新産都市・大分に日本の現実を学ぶ

山口県秋吉台地では、日本列島の自然の形成と共に、ここを戦後米軍が爆撃演習地に使おうとする計画を阻止した住民運動をも学んだ。幸い山口美術館の印象派百年展も計画に組めたので、生徒たちは初めてセザンヌ、ルノワール、モネ、

ゴッホらの作品に心ふるえる感動で接することができた。

大分市では、新日鉄所内をバスで一巡し、日本の高度成長を支えた重化学工業の花形を目の前に広報担当の説明を受けた。ここで終われば普通の工場見学だがわれわれは違った。

事前想定学習の通り、スプリンクラー撒水と二百メートル煙突とグリーン・ベルトを公害防除努力として、広報係から説明を受けた後、新日鉄を出てバスで護国神社の高台から臨海工業地帯を一望し、そこで住民運動のリーダーから説明を聞いて学ぶことになる。

驚いたことに、新日鉄の二百メートル煙突の排煙は、上空の逆転層から下降し、大分市を直撃しているのであった。事実は、大企業の広報課より重く雄弁であり、目の当りその光景を見た生徒たちに衝撃が走った。その晩のホテルでは、住民運動で作成したスライド学習会が開かれた。海水の汚染と奇形魚の数々、住友化学の農薬プラントの火災とガスもれによる住民被害、パルプ排水汚染、海岸侵食、大気汚染に悩む三佐・家島地区などのスライドに写し出される新産都の優等生大分臨海工業地帯の現実とは、まさに現代日本の象徴であった。

4 風成の海と人々に、本当の豊かさを学ぶ

息詰まる工業化の現実を見た翌日は、抜けるような青い空

の下に広がる碧い海の臼杵市風成区ふうせいこの訪問であった。この地域は、カジキマグロを追う遠洋漁業と民主的な海員組合の伝統を持つ地区で、「突きん棒漁船」と呼ばれるへ先が海上に高くつき出た船に乗った男たちは、獲物を追って東シナ海から三陸まで移動する。当然その間地域社会の運営は、消防隊に至るまで婦人の手に委ねられる。

大分県・臼杵市が大阪セメントと結び、周辺の漁協の有力者（網元・船主ら）を籠絡して、風成の上浦小学校を移転させ、海岸を埋め立て、セメント工場を誘致する手筈を整えていた。風成では漁業法八条三項の埋立免許取消し訴訟の手続きを取った。男たちの出漁中、県・市・企業らは工事を強行しようとした。風成の女たちは、土砂を運ぶダンプの前に坐りこみ、また、真冬の日比海岸の荒海で、四日三晩の間、強制測量の阻止の為、筏の上で命綱で体を縛り合わせて機動隊のゴボウ抜きに耐えた。そして、一九七三年十月十九日、地裁に次いで福岡高裁で、漁業権放棄の無効・埋立免許取消しの全面勝訴が確定、県・市・企業は進出を断念した。地域の自然と生活を守る住民運動の典型が、ここ風成にあったのである。

津久見島を臨む碧い海と、心優しい婦人会の人々に私たちは暖かく迎えられた。風成の闘いの本拠となった公民館で、住民たちと生徒たちの対話集会は、息を呑むような感動の中

旅行文集の作品から

(中学二年)

―大分市と風成で―

風成の海

早川るみ子

風成の海の静かさよ!

あなたはまるで母のよう

時おり聞こえる波の歌

渚にただよう浜千鳥

あなたは何もあたえず

何も残さず

真珠の瞳はものいわず

太陽は

琥珀の浜にかけをなげ

小舟はシーツのしわをのばす

ああ!

目をとじる

潮風が心にしみてくる

ありし日の思い出が

かすかな微睡みにさそわれて

いつしかわたしも舟の上

ああおまえ 母なる風成よ!

今日 (こんにち)

神谷真佐美

立ち並ぶ煙突

灰色の空

もはや魚一匹もない海

それは人間が作り出した恐怖

赤白にぬり分けられた煙突からは

たえず炎があがり

霧がたちこめたようなスモッグの空に

ぼんやりと うつろに赤く 黄色くふき出す

その煙突を その炎を

どんよりと濁った海が

悪臭を漂わせながら じっと見つめてる

青く澄んだ海は面影もなく

今は 生きる屍となった海の上に

タンカーが行ききするだけ

手がつけれなくなった自然を

ほろびかけている自然を

まだ若い私たちは ただおろおろと

傾きしりしながら見ているだけだ

でも

私たちが大人になり

あらためて自然を深く考える時がくるまで

自然よ!

どうかほろびないでいてほしい

に続いた。生徒たちは、突きん棒船に乗り、美しい海岸で弁当を食べながら、その感動を反芻していった。

必死に海を守ろうとした母親たちの心が、セメント

粉塵から子供たちの健康を守り、海の豊かさ、真

の共同体を子供たちに残す点にあったことに感動し

た。生徒たちは事前学習をし、松下竜一の「風成の

女たち」を回読もしていた。生徒たちはここで、こ

の力強く厳しい闘いが、こんなに心豊かな優しい人

々に支えられた事を発見した。海辺で釣糸を垂れる

老人の笑顔に、平和がどのようにして守られるかも

知った。彼等は文集に書いている。

「本当の豊かさとは何だろう。それは物があふれる

ことではない」「本当の優しさと強さは、裏表で一

つなのだ」「この海の美しさは、単なる自然だから

でなく、人間が守り抜いた美しさなのだ」、「人々が

守りたかったのはこの平和なのだ」……と。

生徒たちは帰校後、文集を作り、文化祭での演劇

「風成のおなごし(衆)たち」に取組み、感動を全

校の輪に広げた。地域の幸福は、お上(かみ)が守ってくれ

るのでなく、自分たちの手で守るのだという住民の

知恵と力を、風成の碧い海と心優しい住民たちに、

生徒たちは心ゆくまで学んだのである。

家族と家庭科

日本の独立

——個人の尊重から天皇御一家まで——

酒井はるみ

51年9月8日、日本は対日平和条約に調印し、翌年独立国家となった。GHQ/CIEは戦後教育体制の維持を漸次日本に委せていったが、50年には第二次教育使節団を派遣、「極東の防波堤」へと位置づけの変わった日本に対し、独立後の教育へのテコ入れを行い、「民主教育」の反共的役割を示唆している。

同年、中学校学習指導要領職業・家庭科編(試案)が出、この年から職業科は職業・家庭科となった。またこの教科の特徴を実際の生活をふまえた実践の教科としたところから、地域別などの内容が示され、家族の領域に割りふられた時間は農村生活中心では20時間、都会生活中心では35時間であった。教科書は都会生活中心6種類、農村生活中心7種類が刊行されたが、文部省『昭和二十七年使用教科書目録中学校用』に

よれば、家庭生活中心(従来の家庭の内容に近い)も11種類刊行され、従来の5種類も継続使用されたので、29種類(各々一、三学年用あり)もの教科書があったことになる。

雨後の筍のようなこの増加ぶりをどう解釈すればいいのだろう。独立の熱気、それにも増して前年七月にCIEによる「検閲」が廃止されたことが大きかったのではないだろうか(当然だが文部省の検定は残った)。

さて、民主改革のほとぼりさめやらぬ独立後の教科書に私たちはどのような家族をみることになるのだろうか? 今回はすべての教科書を見つけ出すことはできなかったが、家庭生活中心では松平友子らの『明るい生活』『楽しい生活』『よりよい生活』(52年、以下Aと表記)、北陸教科用図書研究会『明るい生活』『楽しい生活』『豊かな生活』(52年、B)、都市・農村をわけた教科書では海後宗臣監修『明るい町』『楽しい町』『よりよい町』『明るい村』『楽しい村』『よりよい村』(53年、C)、日本職業指導協会『私たちの仕事—都市生活を中心として』1、2、3(51年、D)、山崎厚二『私たちの家庭』一、二、三(51年、E)をとりあげることとする。

この時期の最大の特徴は、民主主義の概念をあらわすキイ・チームがオンパレードだったことである。いわく「日本は……民主主義に基づく社会になった」(B)、「個人の基本的人権を尊重し、男も女も平等の立場にたつ新しい憲法」

(B)、あるいは「私どもの生活に民主主義をとり入れて行くことは、これからの家庭生活にとって最もたいせつ」(A)など、また近代家族を意味する「民主的な家庭のよい点はほんとうの愛情が家庭の中心に生まれるということ」(C)「妻となつても夫と同等の権利で、家庭の維持向上に協力していくことができるようになった」(C)などのような記述がほとんどどの教科書に認められる。この二年前に刊行された教科書では一例を除いて全くみられなかったのであるから、ここに至つて、中学・高校を通じて、民主主義にもとづく家族観や近代家族の理念を最もよく描きえたと言える。家族に関する記述内容が一大転換した。

第二の特徴として、新しい家庭では人格の尊重と愛しあうことがあげられることである。従来は家族が仲よくまとまることに重点があり、団欒が強調され、これに家族会議がついて回っていた。そして家族員が力をあわせて働くことが重視され、仕事の分担と責任が説かれた。このトーンは太い流れとして受けつがれているが、そこに「人格の尊重」がわりこんできたというのが一番あたっているだろう。たとえば「私どもの家庭を楽しい所にしようと思うならば、家族が互にその人格を尊び、愛し合わなければならぬ。また、家族がそれぞれに仕事を分担して責任を持ち合い、楽しみも苦しみも共にするように努めるべき」(A)や、「家庭の一人一人の個

人の人格や個性をじゅうぶん生かしてそれぞれの任務を美しく生かしていくことができる」(B)などである。

人格の尊重とは具体的にどんなことかは示されていないが、つぎの文はヒントを与えてくれそうだ。「互いにその人格を尊重し合えば、自分だけに都合がよくて、家族の人々に迷惑をかけるようなことは少なくなる……。……自分の分担している仕事は、責任をもって熱心になしとげるようにしたいものである」(A)。人格というより人を尊重する程度のもので、Eでは団欒の時間に父親が「一家総がかりで私(父)が家庭に心を引かれないようにしてくれるので、職業がうまく勤まるのです」と語っているが、この一文はかつて「検閲」においてさしかえられた一文とほぼ同じである(90年1月号)。CIEの姿勢では、家庭を共に築くためには、家庭に心を引かれていなければならないのである。文部省は「検閲」を経験しても、意識的にか無意識的にか看過してしまった。この教科書はまた本文ではふれないまま、「天皇御一家」の写真を掲載しているが、その配置からい家庭のモデルということのようなだ。こういう検定教科書もあったのである。

なお、家族構成モデルとしては核家族のみ1、核家族と直系家族の併用1、直系家族のみ2、表示なし1で、49年よりずっと直系家族が多くなっている。

大学生たちと歩く 小沢牧子

ゼミ合宿

——学びを紡ぐ



(カッタ 井田裕子)

晩夏、富士山麓に建つセミナーハウスで、ゼミ合宿の数日を過ごした。教室での学生たちとはまた違う、あれこれの素顔。「やっぱり合宿っていいですねえ、食べたり寝たり、とにかく一緒に生活するっていうことが」と、Sさんが言っていたが、その通りだなあと思う。学び討論することの意義もさることながら、数日間ではあれ、共同生活が人びとの関係にもたらす豊かさや奥行きのは、他に代えがたい。教室という切り取られた時間・空間の中で人が出会う関係のぎこちなさ不自然さが、逆によく見えてくる。

企画運営は合宿委員たちが担い、私はそれに乗っかり、お

せっかいをやくとという形。今年の通年テーマは、「カウンセリングをどう考えるか」である。最初の夜は、合宿委員Mさんの前期のまとめ報告から始まった。テキストを読みながら討論してきた問題点が、レジュメにおさめられている。「適応、治癒とは何か」「問題を個人・家族に還元する考え方への疑問」「ファミリー・カウンセリングをどうとらえるか」「危機介入理論はどのように登場してきたか」「カウンセリングの専門性とは。その是否」「心理療法と宗教の類似点、相違点」「ありのままの自分とは、何をさしているのか」……。どれを取っても大テーマだが、若者なりの生活実感や感性を駆使して、グループ別に学習と議論を積んできた半年の足跡だ。

面白いのは、合宿では誰もが、自分の日常に引きつけた発言をじっくりと重ねていくことだ。ともすればコトバ・知識にとらわれがちな教室での姿勢との、微妙な違いが心にとまる。時間がたつぷりあるという条件もさることながら、一緒に生活しながら、という場の力が味方しているのを感じる。

Tさんは、「適応・正常・治す」をめぐって、いまアルバイトをしている保育園での体験を、ていねいになぞりながら語る。子どもたちを束ねていくときに、保母たちがしばしば使う「キマリ」という言葉。「それがキマリだから!」といえば、子どもたちはさっと従う。なぜあんなに効果的な

か？ ラクだから使いたくなる。でも気持ちよくない。そう言えど「それがフツウなんだから」も、似たような強制力がある。「不適応・逸脱・治療」を支える裏側を、こんな足もたから出発して、ゆっくり辿っていきそうだと。

Iさんは、カウンセリングを受けていた頃の自分のカルテを見せてほしいと希望して断られた、最近の体験を話す。彼女は「登校拒否問題」をテーマに、卒論にとりこんでいる。高校生の頃、登校拒否状態でカウンセリングに通っていた。

その頃の記憶が、いますっぽり抜け落ちてしまっているのど、何を話していたのかを知りたくなり、当時のカウンセラーに会いにいった。ところが記録は見せられない、と言われる。本人についての情報であっても、公開できない場合がある。それは「公文書公開条例」で保証されている、と（そういえば内申書もそうなのだろう）。Iさんは、自分のことがどう解釈され、どう記録されているのかを知らされないまま、それが保存されているのは納得できない、苦しい時に話をきいてもらって、そのことをありがたいと思ってきたのに、この成り行きに失望している、カウンセリングによって生じた個人情報、本人への非公開性についてこだわりながら、このテーマを考え進めてゆきたい、と語った。

自分の生活体験にきちんと向きあい、足をすくわれずに進んでゆく学びのスタイルは、すがすがしく確かだ。自分をく

つくりさせ、解き放ち、広げ、仲間を生みだす。それは女たちが生みだした学びの文化でもあった。学生たちが手にしたその力を、私はせい一杯支持し、ふくらませたいと願う。

合宿の夜はまた、学生たちの未知の姿を映しだす。友人たちのマッサージを始める弱視のNくん。マッサージ師の免許の持ち主だ。私も特技の恩恵にあずかる。「ああ、先生は右が高くて左が低いな」。生きてきた月日の跡が、ちゃんと身体にあらわれているらしい。

二晩目、Mさんが喘息発作を起こした。教員用の部屋に、ふたりで布団を並べる。「どこをさすつたらいい？」「心臓のうしろを押して下さい」。持病と長く道連れのMさん自身にたずねながら、文字通りの手当て。鼓動が激しい。「心臓って働き者——」と、らくになつてきたMさんが柔らいで笑う。背中を手で温めながらのおしやり。親のこと、家族のこと。子どもの立場からの話を、私は親の立場にある自分にひきつけながら聞く。そのなかで突然、私自身に新たに見えるてくるものがある。Mさんもそうなのかもしれない。人はいつもこうして、どこでも出合い、学び合い、支えあっているのだと思う。

すすきとコスモスを吹きぬける風の中、自分の中に新しく生まれた課題を大切に抱えて、若い人びとは秋学期に向け、それぞれに散っていった。

男性学への契機

魔男の宅急便

ミッドナイト・
クック

諸橋泰樹

恥ずかしいことばかりのこの人生、夜、眠れない時、ぼくは、家中の拭き掃除をしたり料理を作ったりして、自己治療をはかることがある。このような時、人びとはそれぞれ「儀式」のやり方が異なるのだろうか、夜中に台所で誰かに話しかけなくなったり家事の類いをゴソゴソやるような男性には、フェミニズムの視点からみると、何か共通性のある雰囲気をもっているように思われる。

時計の針が夜中の二時を回る。間男じゃない魔男たちは、トカゲのしっぽとイモリの目玉の黒焼きを入れたホレ薬ならぬホラ薬を煮込み、スプーンでかき混ぜながらヒツヒと笑う。そうやって夜中の幾時間^{つかのま}を多くの魔男たちが台所で一人で集会をやり、そして、みな、鶏鳴までに自分の寢床に帰るの

である（最近ぼくが気になっているのは、集会場所が変わったらしく、エンジン付き箒パイプにまたがってサバトに出かける若者たちの音を耳にしなくなったことだ。神を拒むあの魔女・魔男たちが、正統市民社会という教会によって異端審問にかけられ、火刑に処されませんように）。

井上・江原編『女性のデータブック』の「戦後女性史年表」をみると、「正統」の年表とはまるきりちがった戦後史がそこに展開していることに改めて思いをいたす。「女性の戦後史」を、一般（？）史と同様の手法でトピックごとに項目セレクトしてゆくと、どうしても「女性で初の大臣」「女性雇用者が△千万人を超す」「××のための集会」「女性□□法成立」「ミス〇〇に入賞」などのほかに、「人口」や「子ども」「生殖技術」「売買春」や「性暴力」……、といった一種紋切り型な年譜にならざるを得ない。ここに列挙されているのは「異端・例外（者）」としての歴史¹。性的生殖的存在としての女性の状況²であって、通常我われが認識している正統世界は、「大臣」も「法律」も「雇用者」も、ことごとく男性を基準としたアイテムから成立した男性世界であり、歴史は男性が他方の性を性的対象者、生殖担当者として一方的に扱ってきた男性史であったことが明白になる。しかも、産業・経済・労働市場と政治、そして科学や文化、さらには母性イデオロギーに翻弄されて、女性の労働や身体、意

識や生き方が規定され、それを阻止するためにコミュニケーション活動がなされ運動や会が発足はするものの、成立した制度や社会状況は必ずしもその全てに全面勝利した結果とまではいえないのが、戦後の女性解放の歴史だったのではないかとさえ思えてくる。

抑圧する側の男たちは、自らの安寧を守るため、リブ合宿や様々なシンポジウムなどを「赤い快気焰をあげる」「マドンナ」や魔女の集会と規定し、「異端」をつくり出すことで自らを「正統化」してきた。女性に男性に抑圧され、男性は、女も男も含めて、つまり人間を抑圧するという歴史だった。男の「切り捨て教」に迫害されてき、にもかかわらず営々と抵抗のサバトを台所を脱け出して催してきた解放の歴史の一端を、ここにみるのである。

昨年九月の日本女性学研究会の例会「男はフェミニストになれるか？」を受けての、中野冬美さんの「男性フェミニスト」も含めて男に対する意見は明快だ。

男同士で状況変革をする前にフェミニストの方へすり寄ってしまっている男たち、《失われた男としてのアイデンティティを再構築させるために》フェミニストを必要とするような男たち、《(女性も男性も) 手を取りあって女性問題を解決していこう》などとぬけぬけといえるほどに、自分が女をふみつけにしていることに気づかないでいる》《無神経》な

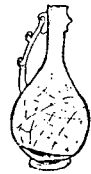
男たちに対して、ただ一言。《ごちゃごちゃいう前にその足をのけてくれ》(『VOICE OF WOMAN』89・11)。

ぼくは、男性が、自らの抑圧性や社会・文化的要請である「男らしさ」のくびきの強さ、等々を自覚し自己反省するための道具としてのフェミニストの存在、フェミニズムや女性学の存在、すなわち男にとつての「手段的フェミニズム」を全面否定することはできないと思う。が、それは自らの「男らしくない」ことを正当化するために、イイコイコと母親的に受け容れてくれるフェミニズム(一)にすり寄ることを肯定することではない。男性が足で踏みつけてきたこと、まずその足をのけること、それが男性によってこそなされる、そのような主体の確立が、まず男性学に前提されねばなるまい。そのために、今までの「正統史」とも異なる、男(女)性学的な視座からの新しい「男性史」も編まれる必要が出てくるかもしれないし、活性化のためにも望ましいだろう。

夜中にひとりサバトを催す魔男たちが調合すべきはそういった「足をどける」処法箋と薬ではないだろうか。『ものわりのよい』『味方』のような顔をする前に、男が男について語る時期がきている。その内容は、女性支配についてのほか、家族支配、企業社会、軍事・政治の世界や、それらの歴史や構造について男性学的に解明することが含まれていなければならぬ。

私の朝鮮史

岡 百合子



前回の李舜臣と共に、愛国の英雄として、朝鮮・韓国の子どもたちの尊崇の的となつてゐるのが安重根である。「日韓併合」の前後、伊藤博文を暗殺した人物だ。李舜臣と同じく、一身を投げうって日本の侵略に抗した人だが、日本では単なるテロリストとしてしか知らない人が多い。

中野泰雄氏の「安重根」（亜紀書房）に、彼が獄中で記した自伝が紹介されている。安重根が朝鮮北部、黄海道で生まれた年、一八七九年の朝鮮は、日本の手で強引に開国させられて四年目。外には日本をはじめ諸列強の外圧、内には保守派、開明派の対立と、内外の危機・渦中にあつた。

幼いときは、山野をかけ廻り狩をするのを好んだという。後の射撃の腕前はその頃磨かれたようだ。十九歳のとき、洗礼を受けカトリック教徒となる。

ジュン重 一九〇五年。日露戦争に勝った日本は、もう誰はばかることなく朝鮮の「保護国化」をすすめた。伊藤博文がソウルにのりこみ、悪名高き「乙巳保護条約」を結ぶ。その翌年、父の死を契機に安重根は私学校を創

つた。教育によつて祖国を救う人材を育てようと考えたのである。

しかし翌一九〇七年、「ハーグ密使事件」が起り、大韓皇帝高宗は伊藤博文により強制的に退位させられ、軍隊も解散させられた。この状況を見た安重根はじつとしておれず、ロシア領に奔つて義兵闘争に身を投じた。だが強力な日本軍との戦いで彼の部隊は潰滅する。再起をはかつてゐるとき、伊藤がハルビンにやってくることを聞き、即座に討つことを決意したという。安重根にとつて、伊藤暗殺は義兵闘争の一環だったのである。

この自伝を読んでいると、「水滸伝」風豪傑、敬虔なクリスチャン、情熱的教育者、正義に燃える義兵とさまざまな貌が現われ、どれが本当の安重根なのかわからなくなる。いや多分これら全てが彼なのである。獄中で書いたという彼の書、その雄渾な筆致を見ると、並々ならぬ氣力を持った人物だということだけはたしかだと思える。

一九一〇年三月、安重根処刑。三十二歳の短かい生涯を終える。「日韓併合」の五か月前であつた。

日本では、維新の元勳と讃えられる伊藤博文。彼を暗殺し朝鮮・韓国では義士と敬まわれる安重根。この両者の差異を埋め、両国が共に歩める道をさぐるのが、私のこれからの課題である。

わたしたちのくらしを考える会

〈小山 博美〉

私たちの顔は十人十色です。生活のあり方も、人生の長さもみな違います。

私たちが、自分自身の人生をやっていきたくないと願うようになったのはいつ頃からだったでしょうか。

「わたしたちの……会」は、10年前、子どもたちを育てるところから、「わたしたちの暮らしと憲法」をテキストに一ヶ月一度の学習会を開始しました。

教育基本法、優生保護法、女性差別撤廃条約、民主主義等を学習するうちに「基本的人権」の大切さに気付かされるようになりました。

三年前より、現在に至るまで身近な私たちの暮らし、特に「福祉」にテーマを置いて学習を進めています。年金生活になったとき、わたしや、家族が病気になったとき、私たちはどんな暮らしをするのか。その制度や、地域、隣人との関係は、等、さまざまな疑問を出し合いながらの話し合い学習です。

題して、「人生80年時代を 生き生きと」、(テキスト、長野県の人たちの手で作成された「手づくり老人白書」——65歳からのいきいき人間宣言——)です。ゆたかだと言われる今こそ整えておきたいことがあります。

連絡先 〒253 神茅川県茅ヶ崎市松風台11-13、小山方

☎0467-53-0158

自己紹介するうきうきイキイキ

木瓜の花の会

〈相沢 ヨシ〉

私たちのグループははじめて小学校にPTAができた時参加した母親たちが、子供の卒業後も別れ難く、地域活動にとりくんできました。爾来三十年、ささやかながら月一回の人数、皮革、生花の教室と年二回の旅行会、演奏会、学習会がつづいています。気がついてみますと只今会員の平均年齢六十八歳、会員数は八十四人になりました。

「木瓜の会」の名前は、一九七六年地域に区民センターができる時、よりよい老人集会室を、婦人会議室を、との願いから勉強会や見学会をはじめ区に要望書を出した時につけました。年をとって「木瓜の会」は「木瓜の花の会」になりました。私たちは老人問題のはじめにまず「美しく老いるには」というテーマで田中澄江先生、樋口恵子先生等を招いて五回講演会をもちましたが、老境に突入してしまっただけで、テーマは老人医療老人ホームにしぼられてきました。遠いところではなく、私たちの住んでいる地域に老人用ベッドがふやせないか、老人住宅がつくれなにかと話しています。そうして住んでいる区の福祉行政がどのように行われているかをチェックすることも、高齢化社会にむけて老人である私たち自身の役割であろうと話しています。

連絡先 〒157 世田谷区南鳥山4-12-7 木瓜の花の会

☎03-300-7211

湯沢静江

'82年の教育課程改訂にむけて その3

「進学率が落ちたら、どういう責任をとるか」などという質問を出す職員がいるということは、それまで長い時間をかけて討論してきた、教育課程に関する論議を、根底から覆すものだし、職員会議で議していることは、個人の主義主張の是非を問うのではなく、赤穂高校の教育課程をどうするかということであろう。

進学率が低下するかどうかもわからないうちに、低下の責任について考えるのなら、職員全部で責任をとるしかないではないか。あまりのことに腹も立ち「個人の責任問題なのでしょうか」というような返答をした気がする。「先生(私のこと)の子供さんが、家庭科をやるような高校に進学するとして、どうしますか」という愚問もあった。ここまでくれば、ばかばかしくて返事をする気にならなかった。

共学の授業内容について「家族と家庭」「家庭と法律」「家庭経済」「食

生活」など、2単位で実施する案をプリントにし、全員配布して、共学の導入についての検討をしたこともあった。細かい部分は、実践しながら手おしをすると説明したら、「生徒を実験台に使うような授業では困る」と吐き捨てるように言う人もいた。教材については、実践しながら、絶えず修正や改善するのは当然のことだろうに、それを実験台と言うに至っては、何をか言わんやである。この発言者は、常に誰かの作った教案を百年一日のごとく、軌道修正もせずにやり通すというのだろうか。そんな体質を、私はこわいと思うのだった。

文部省が共学の家庭科を認めたこれからの教育課程では、私どもが難渋をしたり、まわり道をしたようなことは少なくともなと思うが、具体的な課程表づくりでは、おそらく、私が遭遇したような反発と、似たりよったりのことがあるに違いない。相当に根強い抵抗が、現場にあるだろうことは想像に難くない。それ故に、すでに過去のことになった私の経験を、くどいまでに述べたわけである。

共学の授業を、自らの意志と努力でやろうとする気概が、教科担当者になれば、4単位は簡単に2単位に削られるだろうし、授業についても、いちいち揚げ足をとられることになる。

19歳の日記

金森土岐

「仕事」

この一カ月、私はとにかく必死だった。仕事に慣れること、苦手な人間であつても人間関係を保つていくこと、ラッシュの電車で通勤すること等、初めて経験することばかりで、毎日毎日身体はくたくただった。だがそれは気持ちの良い疲労感で、今は会社に行くことや仕事をするのがとても楽しいのだ。ごく普通の企業の中でやつて行くことなどきつとできないだろうと思つていた部分もあつて、毎日が充実してるなあと感じるたび、自分自身不思議な気分だった。そして、少し余裕の出きた最近、自分の会社での時間を思い起こしてみた。

今までわけもわからないまま頼まれてやつてきた仕事がある。この書類が何に使われるのか、誰が使うの

か、何の為のものなのか何も説明を受けずにやつてきた仕事で、二カ月近く経った八月の終わり、新しく教えられた仕事をするので見直しをさせるのに必要なものだったとわかつた。ひとつの仕事だけ見ていてもそれはたぐさんの仕事の断片的な一部分でしかなく、もうひとつ仕事を知つて初めてふたつが繋がり、更に新しい仕事へと繋がっていく。

一体これが何の役に立つのだろうと思われていた小さな仕事で、決して手を抜く事の許されない大きな仕事へと変わつていった。そうやつてひとつ、またひとつと仕事の繋がりがや、それに携わる人との繋がりが見えてきた時「もっと仕事を覚えたい」と望んでいた。

仕事は大抵のものが単純作業の繰り返しだが、小さな単純作業ほど、手を抜くと後々しんどい思いをする。ひとつひとつの仕事の積み重ね、繰

り返しで大きな形を作っているのだとしたら(実際そうなのだが)初めて行われていく仕事はその土台になっているのである。私たち女性が受ける仕事は言うなれば会社全体を支えるもののだろうと思う。今、仕事への責任の重さを改めて感じている。

ひとつの作業が次の作業を生む。小さな仕事のひとつの人の仕事をスムーズにさせる。次の仕事を覚えたり時またひとつの繋がりが持て、また少し視野が広がりが世界が広がる。そこから新たに考えることや感じるこ

とが出てくるたびに大きくなれるのだろう。会社という組織に入つたことで、自分を思いがけない充実感に満たすことができた。今の時点で言うなれば、自分の選択は間違つておらず、これから勉強が始まるのだと考えている。

教育塔を考える会 (2)

「教育塔を考える会」に集まった人たちは、ぼく以外は教師か学校関係の仕事をしている人たちですが、驚いたのはその人たちの活動範囲の広さです。それこそ北海道から沖縄まで、共感できる人がいれば連絡をとりあい、どんどん連帯できる仲間を増やしていく、まさにそんな感じでした。「教育塔を考える会」では、「教育祭」の前日や、「君が代」・「日の丸」攻撃の強まる卒業式の頃などにいくつかの集会をもったものですが、あるときは、沖縄における様々な問題と取り組みつつ長らく沖縄の議員活動をしていた方、あるときは福岡の小学校で子どもたちの意志を尊重し卒業式の「日の丸」を結果的に拒否した形になったために処分された先生（福岡長尾小のゲルニカ問題）、また長崎忠魂碑訴訟の支援者で早くから「教育塔・祭」の問題点を指摘されていた先生というように、全国的視野に立つ人選であり、地に足のついたというか、わかりやすいいい話をしてくださる人ばかりなのです。

広がる運動

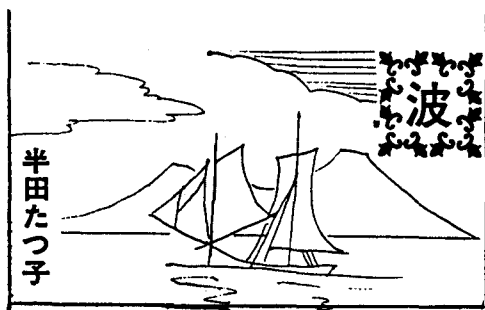
広がる人の輪

■中村英之

「教育塔を考える会」の中から戦跡めぐりの沖縄旅行に行ったこともあって、「日の丸」焼き捨て事件の知花昌一さんと会とは、ずっと交流があります。会と呼んだ人たちに共通していることは、みんな等身大で運動をし、それを語ること、全国のこういった地道な反戦だとか、天皇の戦争責任を問うとかの行動をしている人たちを呼べたのは、そしてまたその後もこれらの人たちと交流があるのは、そのあかしではないでしょうか。

会の事務局の仕事をいつも精力的にこなしていたTさん、彼は本当に左翼ばりばかりといった感じの非常に活動歴の長い人でしたが、とても柔軟な考え方のできるひとでもありました。左翼⇨柔軟ではない、と考えていたばかりに、差別と闘うには、反戦と言うためには、いろんな問題をこぼすことなく多角的に感じることだということ、そしてまた自分なりにとらえてそれを自分の運動にするということには、いろんな生き方やありかたがあるものだと教えてくれた人が、Tさんをはじめ「教育塔を考える会」にはたくさんいたような気がします。そのTさんは今、通信教育で家庭科教師の免許をとろうとして勉強しています。

人間って、不思議



「新しい家庭科―We」という誌名は私がつけた。「ウイ書房」という社名は夫の発案だ。秋の風が吹きそめた道を歩きながらの会話で。「うん、いいかもしれない。発音しにくいし聞きにくいから、何度もうくり返すうちに印象づけられるわね」と私。それで決まった。いっちょまえに、神田かいわいで貸事務所を探した。高かった。蔡和美さんご夫妻が、ご自分の印刷所のスペースを使ってもいい、と言って下さった。夫は「まだ海のものとも山のものともつかないのだから、うちの一室

から始めれば」と言い、白地に青いペンキで「ウイ書房」の看板を描き、門に貼りつけてくれた。子どもたちが「ういしよぼう」と読んで行き交う。おのずと胸に満ちてくるものがあり、口元がほころぶ。九年前のことだ。その夫はもういない。九月三十日夜十時三十分、さつと彼岸に行ってしまった。人間のなんと**はかな**い。九年の歳月は、こういうこともはらむのだ。「いよいよ100号よ」と言ううち、娘は「もう？ ヤッターネ！」と目を丸くしたけれど、夫には告げるすべもない。夫を看取り、見送った衝撃の体験を、一番話したい相手、なんとその当人なのだ。次の詞は、まさに私の実感だ。

子どもの死―あなたの未来を失うこと
親の死―あなたの過去を失うこと
配偶者の死―あなたの現在を失うこと
友の死―あなたの一部を失うこと

多くの人の支援によって生まれた雑誌である誇りをこめて、誌名は「We」でなければならなかった。誕生までのドラマの主役は何十人も素敵な方たち。私自身は透明になってこの方たちの出会う場を提供すれば、それでいい、と思った。期せずしてフォーラムは、

この思いを現実にくれた。私が参加できなかった今年のフォーラムの成功は、その証左だ。「出会いの歴史をつくる」は、決して大仰なテーマではない。

創刊号「いでたちぬ、いま」に私は書いた。「私の退職を知るや否や、さあーと広がつた連帯と支援の輪、そこで初めて出会い、あるいは絆を強めた方たちのこと。それは到底書き尽くせない。千一夜物語よろしく語り明かし、語り継いでも、語り尽くせないだろう。人間って、こんなに美しかったのか。人間と人間の関係って、こんなに楽しかったのか。この感動は、もう少し落ち着いてから、一大ヒューマンドキュメントにでも著さなければ」。

だが、We一周年を期して私自身の著『人間って不思議』を世に送った時、「あとがき」に私はこう書いてしまった。

「人間は、人間を信ずることができた時、人間の美しさに酔う時、最高に幸せなのではないでしょうか。」

それだけに、人間に裏切られ、人間に失望した時、奈落の底に突き落とされるのです。創刊後、浮き浮きと幸せに酔っていた私を奈落の底に突き落とすようなできごとがあっ

たのは、現実を知れとの神の配意だったのかもしれない。自分を曝して書き、批判を甘んじて受け、自身を糺す。それが私に雑誌を出させようとして下さった方に応える道だと思いい、私ごとも恥をかきつつ書いてきた。その意味では書かなければならないことなのに、個人の名著にかかわるだけに書けなかった。

座談会で、川名さんが「面白路線」の方が離れていったのは、一通の投書をコメントなしに載せたことが原因と話された。しかし、私は、それ以前に私自身の人間観がズタズタに引き裂かれていたことが原因と思っている。人間の信頼、友情、その重さを素材に、小説を書く力があれば、私のストレスは発散できただろうけれど……。

いつの日か独立した事務所が持てたら、スタッフの人たちも、遠慮なく仕事ができるだろうと願ったけれど、それは今のところ見込み薄だ。夫のすすめに従って、自宅の一室からこそやってこれたと思うほど、私には経営の才が乏しい。窮状を、何回か読者の方に訴えもした。読者拡大の努力も、まだまだ不十分だった。恥ずかしい限りだ。けれども、100号を記念する座談会の中で、「Weの編集方

針はよりシビアに」、「より軽いフットワークでメディア方式を」、「Weの中には埋もれさせておくのはもったいない宝がまだまだ眠っている」などのご意見をいただいた。関西の方たちが、100号を期して作って下さっている「索引」が、これから偉力を発揮するだろう。こんなありがたい読者に恵まれていること——これこそがWeの光だ。

「自立した男と女を、人間らしい生活を、差別のない社会を」を、Weの三本柱にして表紙に掲げてきた。87年10月号から「自立した女と男を」に改まったこと、お氣付きだったろうか。88年に「女、そして男」を連載された田川建三氏からの提言である。男性からのお申し出であることが一層うれしかった。

毎号のテーマを、A家庭教育 B学校・教育・教師 C生を考へ、自分らしく生きる D世界・社会 Eくらし・環境 F女性・男性 G子ども H家庭・家族 I人間関係に分類してみた。力及ばなかった号、より深め広げなければならぬテーマ、すべて101号からの課題だ。充実している年、元気のなかつた年もくつきりと分かる。

編集部は、二人、三人、四人、五人とふえた。各々、週四日半、四日、三日、二日とさ

まざまな勤務形態で、家庭やもう一つの仕事や、通勤時間との折り合いをつける。志を共にする仲間、憶測や疑心暗鬼が入り込むことが一番恐ろしい。さらにそれを語れない孤立感は苦しい。お互いを信頼してわだかまりなく、自分を自然に出して隠しごとのない、従ってタブーのない編集スタッフを、私は誇りにしている。一昨年来の私の病氣、そして今年の夫の発病と死、トリプルピンチを乗り越えられたのは、心地よい人間関係のおかげだ。

一九八一年十月二十九日、ウイ書房設立。九年の歳月を経て、男女で家庭科を学ぶ新しい時代の足音は、日に日に高い。発足後数年間、よく聞いた「新しい家庭科—We」の「新しい家庭科」を外せ、の声は今、ほとんど無い。今年のフォーラムで、六つの小分科会を輩出した家庭科分科会、「女の解放、男の解放」分科会の盛況。北欧の社会福祉をこの目で見て授業を創ろうと、ツアーを組んで出かけた仲間たち。Weが蓄えてきた力量を、Weは決して過小評価してはならないだろう。

光と影とともに味わった九年間、私は「やっぱり、人間って、不思議」とつぶやく。

わたくしから

あなたに



◆コペンハーゲンでうかがった伊東先生のお話は、すごいスピードで情熱にあふれ、日本でのデンマークの福祉に関する情報のほとんどが、伊東先生によってもたらされた、という現実を改めて感じることができました。先生が何度も口にされた、「ほんの一握りの人々の活動で社会が大きく変化する」という言葉が、真実と!?

お話を聞いていて、私は、今の私たちの意識の中で、きちんと整理しなくてはならないことが二つある、と思いました。

一つは障害を持つ人たちへの偏見です。自分たちも、いつ障害者になるかわからない、というより、高齢化社会とは、健常者が少しずつ障害者へと変身して行く社会であるのに、まだ、どこかで、障害者と自分の間の壁を心の中に持っており、身障者の人たちが、

私たちと全く同じ「ふつうの暮らし」をすることが無理なのではないか、と考えている——そのための援助にどこかで限界をつけたがっている、ということです。

第二は、せつせと働いて高い収入を得、懸命に貯えた者が、少しは、人よりよい暮らしが出来るはずではないか、という意識をどこかに持っていることです。私の高齢化社会問題の出発点は、「全ての高齢者が人間らしく暮らして行ける社会を」という願いでした。

にもかかわらず、そして、援助の必要な人は、自分も含めて、本人に責任のある場合はほとんどないということはわかっていながら、すべての人が同じように「ふつうの暮らし」を保障されることに、どこか抵抗を持つ意識が、根強く残っているのではないかと、思います。言いかえれば「自立」が、人間にとって、どんなに大きい意味をもち、そのための援助が人権を守る唯一の手段であることへの認識が、心のどこかでまだきちんととらえられていないのです。

私たちは預貯金や生命保険の積み立てをして自分の老後の安心を買おうとしています。が、そして国も、それを自助として推奨していますが、そのお金は、銀行や保険会社を肥らせ

るだけでなく、大企業へまわされて、企業間格差を産み、富の偏在を一そう強化しているのです。皆の税金を、皆の生活を豊かにするための制度をつくるために使おう、という発想の転換を、今、自分の中で、改めて確認しておくことが必要ですね。運動を起こし、社会の仕組みを変えて行くためには、きちんとした信念が、エネルギーになるのですから。福祉教育などはない。唯一あるとすれば、自分でできることは自分です、という自立の教育である。という伊東先生の言葉が、強く心に残りました。自立が妨げられている人のために、それを援助することも……。あ、やっぱり、これは蛇足かな。

Weを百冊そろえたい方に
(福知山・村岡洋子)

百冊そろっているのが四セット、増刊号を省いたのが六セット、実費・送料当方負担でお頒ちできます。お手持ちのWeで欠けている号を、この際補いたい方も、お申し出下さい。在庫の有無は、関西の方が作って下さる索引に載りますが、僅少の号もあり、お早いほうが、ご要望に応えられますので、はがきでご連絡下さい。振込用紙を同封してお届けします。

(編集部)

『銀の糸 結ぶとき』

写真 田邊順一／詩・エッセイ 浜 文子

河村 ふみ

(大月書店 2300円)

写真集というものは、本屋でパラパラと立ち読みする程度のもに思っていた。そのつもりでページを繰っていたのに、いつの間にか引き込まれ、気がついたら読み終わってしまった。それがこの写真集。

被写体は老男・老女。被写体という言葉はそぐわない。人の命と存在に向けられた田邊順一という写真家のまなざしが、限りなく暖かいせいであろうか。大写しの老女の顔、薄くなった白髪が結び目からこぼれて光る。銀の糸さながらに美しい。老人ホームの食堂か、食事中の老女ふたり。ひとりとは、箸とお茶碗を持ってはいるが、心ここにあらずといった虚ろな表情。となりの老女は大きな人形を抱えて、人形の口に箸を運んでいる。我が子であるいは孫を膝に抱いて慈しんでいた時代が、この老女にとって最良の時であったのだろうか。つなぎのパジャマを着て、布団を右脇に抱え、誰かに呼ばれたのだろうか、「ああ」とでも返事をするように歯のない口をあぐりあけているおじいさん。あどけなくユーモラスでさえある。陽だまりの中で、道端の緑石にちよこんと座ったおばあちゃん。割烹着姿と傍に置いた籠がまだ現役だと語っている。にこやかな笑みに心が和む。幸せそうな老人ばかりではない。寝たきりになってしまった老人の姿もある。しかし、その傍には必ず家族の姿が、心配し、看護し、祈る家族の姿があって救われる。

これらの写真の間間に、挿入された浜文子さんの詩とエッセイは、著者が幼い頃の、祖母と著者を含む孫たちとの日常のできごとや、著者の祖母に寄せる思いを綴ったものである。「一枚の写真は凝縮された存在のありようを、あますところなく語りつくす。その写真群に敢えて、文字によるごく私的な感性の世界を重ねるという冒険を試みた」とあとがきにあるが、写真と詩とエッセイが、絶妙なハーモニーを奏でながら、全体として心をつひとつての作品に仕上がっている。

「無為の人」と題するエッセイの中で著者は「衣食住のつびきならぬ実質面の先の、ふわりとした、とりとめのない時間を孫に預けて過ごした」と祖母の存在のありようを表現し、「人生の役回りがまだ決まっていないうちの幼い者と、人としての役回りをほぼ終えた老人の、明日の時間を神々に任せた同士の暮らしのテンポは、どこかで美しく調和していた。そして祖母と孫たちが重ねた無為の時間は、互いの心の一番柔らかな部分に響き合う豊かな時間でもあった」と書いている。

「福祉が叫ばれる。施設が整っても、制度が整っても、それだけで整いきれない人の心というものの、その贅沢さを、私は尊いと思う。贅沢でありたい」ともあとがきにある。読者はこの写真集の老男・老女の中に、幼子の姿を見るにちがいない。そして「無為の時間」の尊さを思わずにはいられないであろう。

うおにお言We なんでも聞なんでも



◆いわゆる消費者運動や消費者教育というものについて、まったく無知であった私にとつて、8・9月号は興味深い内容でした。

私は結婚五年、はじめて住む場所を変え、買ひものの仕方がどれだけ暮らす地域によって左右されるかを実感しているこの頃です。まわりが海にかこまれたここ淡路島では、魚が安く、鮮度も高いので、ついつい魚料理が食生活の中心になります。京都に住んでいた時には「安い魚は古い。スーパーの魚は買わない」と決めていた私ですが、こちらに来てから「その日、安く売っている魚は、どこの店で買っても、鮮度が高くおいしい」と考え方を改めました。

都市では目にすることがなく、名前すら聞いたことがないお魚が、驚くほど低い価格で

店先に並びます。京都では、たまにしか食卓に魚が登場しなかったために、煮る、焼く、で十分だった調理のレパートリーが、こちらに来てグリーンとふえました。

また牛乳は、一日二日おくれと思い込んでいた私は、その日の製造年月日パックを目にした時は、本当に驚きでした。しかし同じラベルの牛乳が、地元であるにもかかわらず、京都より三〇円も高いことには、今もって納得がいきません。やはり都会に比べれば、商品の種類は少なく、物価は高い地域ですがそれを買わざるを得ない状況です。商品の多様化・個性化の時代と言うものの、地方は都会のように数もそろわず、「自分の暮らす地域、最も身近な社会に、消費は左右される。それは我が家で魚料理がふえたように知らず知らずに、みずからの生活全体に直接的に影響を及ぼしている」と身にしみて感じるこのごろです。

みずからの命に直接かわることだけに、地域全体の自然破壊に目をやり、生産・流通・消費といった視点で消費を考えることは、非常に重要なことだと思います。しかし一方で、人間がどれだけ住んでいる地域に制約されて生活しているか、そしてその中で、

みずからの責任で消費するとは、一体どういうことなのかを考えることも重要であると思います。都心部から離れば離れるほど、商品の数は少なく、選択の範囲が狭められます。近くにせつけんを買う店がなく、廃品回収車もまわってこないこの地域で、私は何から手をつけたらよいのでしょうか。

しかし、もつと深く考えてみると、都会にいても、病院や福祉施設の中に入れば、みずから消費するせつけんの種類すら、選ぶ権利を失ってしまします。ほんとうはみずからが管理すべき食生活であるべきなのに、給食にどんな材料がもちいられているのか、そんなことに関心を示す病人や老人がほとんどいないのは、なぜでしょう。

消費者教育というものがあるのであれば、人間はだれしも、身近な環境、暮らす場所によって、消費の選択範囲や生活スタイルは、一定の制約を受けること、しかし制約は受けても、最終的な消費の判断は、個人の主体性に基いて行われるべきであり、他人まかせであってはならないこと、それが消費者としての権利であり、そうした権利の自覚が、環境の改善につながるのだということを、子供達に教えてほしいと思います。現代社会にお

いて人は生きている限り消費者です。男も女も子供も老人も、重い障害をもつ人も、みな経済社会を支える消費者であるのに、そうした意識は、非常に低いように思います。

今、京都を中心に、公営バスにリフトをつける運動が広がっています。これは車いすを使用する障害者が中心になってすすめている運動ですが、彼等は、これを障害者運動の一つとして位置付けています。

「重度障害者は、これまで消費者としてお金を支払い、みずからの選択によって消費する権利を、あまりに不当に奪われてきた。それを回復しよう」というのです。「障害を持つにしても、バスで移動するのか、タクシーにするか、自家用車にするか、それは、その場の状況に応じて、自由に選ぶことができてよいはずである」「車いすが入れないような構造の店は、障害者を消費者として認めていないことを意味する」と彼等は考え、消費選択の範囲を広げる努力をしています。

長い人生、だれしも、流通の発達していない地域に住むことになったり、長期の病院生活をしいられたり、障害をもったりすることがあると思います。どんな場所に、どんな立場で生きている時でも、みずからの生活は、

基本的にはみずからの判断で決めるべきであり、みずからの消費に対しても、みずから責任を持つべきではないでしょうか。

「上手に買物をする技術」は、あくまでも方法であり、「みずからの消費するものを、みずからの価値判断で選び、それに対して責任を持つ態度、自主的に生きる態度」があつてはじめて、その上に成立つものであると考えます。

(洲本・藤原久美)

◆ 蕨山高校の件、長い長い間気になっていましたが、漸く決着したとのこと、しかし残念なことに敗訴で終わったことは、限りなき怒りを覚えます。しかも御本人の先生は定年で御退職とのことでは、全く心残りがいたします。けれども根本的な男女差別に対する校長・教育委員会の考え方に對しては、これからも諦めることなく交渉をつづけていくべきだと思います。

テレビ等でも取上げて、広く一般に知ってもらうのも方法と思いますが、いかがなものでしょうか。詳細について、もう一度結果報告と、問題点をWに掲載していただきたいと思ひます。このまま終わってしまうのは、全く残念です。

(新潟・小池俊哉)

◆ 羽生さんの新しい『花・野菜詩集』の「ツ

タンカーメンのえんどろ」のページを読んで、というより、題名が私の目にとび込んできて、びっくりしました。実は私、カップ一杯ぐらいその種子を持っているのです。今秋播くつもりで。Y先生という今年退職された方から「いるか？」と言われ、たった一人、私だけが「欲しい！」と言っていたのだです。

Y先生は一風変わったおじいさん(まだおじいさんかな?)で、えらくは決してなろうとせず、理科の授業ひとすじに生きた人、何もごつたのですが、反面大変ナイーブで、私は大好きな人。そのツタンカーメンなんですもの。それで、Y先生にぜひ読んでいたきたくて、一冊注文します。

詩のように、私のツタンカーメンも、今年だけでなく、いつも新しい種子で生きつづけてくれたら幸せですから、一生けんめい育てようと思っています。(東京・鈴木まき子)

◆ 羽生さんの詩集、みずみずしい感性と大地をしっかりと踏みしめている確かさ、物に対するやさしさと鋭さに、ただただ感銘いたしました。生活を大切にしながら、心豊かな日々羽生さんを見習いたい、改めて思いました。(藤沢・仙田敬子)

・Weの会通信

連絡先 鈴木昭彦

〒146 東京都大田区矢口3-30-1-109

☎03-756-4551 FAX03-756-0014

会計(会費送付先) 芦谷薫

〒182 調布市東つつじヶ丘3-6-17

〒振替/東京2-402519

Weの会は We 誌と読者の方たちをつなぐ会です。毎年12月の総会で活動方針などを決定。年会費1200円で、会員の声・情報をのせた通信をお届けします。

来年の夏季フォーラムにむけて

★去る八月三―五日、伊豆長岡で開催されたWe夏季フォーラムは、参加者二百五十名と大盛況のうちに、様々な出会いと余韻を残して終わりました。フォーラムの記録は冬の増刊号として、十二月半ばに出ますが、それとは別に、分科会「女の解放・男の解放」では、分科会の記録集を編集集中。二時間の会のテープを綿密におこした記録と、感想のまだホットなどところを希望者に実費でお分けするとのことです。詳細は次号で。

★来年度の夏フォーラムの日程、会場が決まりました。八月二十四日、八王子の大学セミナーハウスにて。大人百三十名、子ども二十

編集室からあなたに

◆Weへのご意見、感想、電話でもどうぞ

この号の座談会の中で、読者からの反響が届きにくいことをめぐって、書くことの憶効さがあるなら、電話で、二言三言のメッセージでもうかがい、誌面に紹介してはという話が出ました。お声の集まり具合によっては、そのような頁を……とも考えています。ぜひ、お気軽に、ご意見、ご感想等お寄せ下さい。

◆読者会をつくりませんか

ときどき、読者の方から「地域でWeの読者会をつくりたいのだけれど……」というお電話をいただくことがあります。その都度、お誘いの手紙を出せる圏内にいらっしゃる読者のお名前をご紹介しますのですが、お気持のある方、ぜひご連絡下さい。また、少人数でも、活動中の会がありましたら、お知らせ下さい。

Weの会総会にどうぞ

★来る十二月八日(土)二時より、例年通りWeの会総会十望年会を開きます。会場は未定ですが、今回は100号記念も兼ねて、盛大に(?)……と思っています。Weの会の会員では

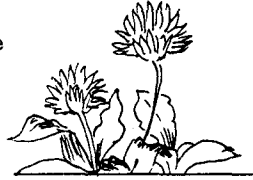
名の規模で予定しています。只今、実行委員を募集中。全体会、分科会の構想は早めに出していきたいので、テーマ、運営のしかたetc何でも結構です。アイデア、ご意見をウイ書房までお寄せ下さい。そして、ぜひ、実行委員に!!

ないが……という方も、この機会にぜひ。詳細は次号にて。

★Weの会って何ですか

八年前に作られたパンフレットには「各地でそれぞれ個性的な活動を行う地域の諸者会と共に『新しい家庭科―We』を支援していきます」と定義されているWeの会ですが、活動の自身を創ってゆくのはそのときどきの会員です。「Weの会だより」の通信連絡費として年会費は千二百円。あなたも「Weの会」の会員になりませんか。そして、もっと積極的になりたいことのある方はぜひ世話人に!!

Weの 読者会だより



〈We東久留米の会〉

◆八月十九日(日)午後七時から十時まで、地域センター老人倶楽室で例会を開き、八月十九号の特集『消費者教育は何を目指す?』を中心に話し合った。

折戸氏の「男性も消費者」に共感ができる。消費者教育は、その人の生き方を揺さぶる物ではなくてはならない。それには、物の生産―流通―消費まで学習して始めて、私たちは「どのような生活を希むか」が見えてくる。たとえば被服製作を通して、生産者の立ち場を一步すすめて販売者として消費者に何を知らせたらよいのか、表示(ラベル)つけ、広告作成、ディスプレイを考案させ、消費者として日常着用し、使用済みの場合の廃棄方法まで考えさせると、ひとつの物に対して、私たちがどのようにかわつたらよいのか

わかってくるのではないだろうか。

次に、私たちの地域にある三種類の生協の特徴をどう利用すべきか、話し合った。いい話し合いができたのに、夏休み中で、参加者が少なく残念でした。(田上和子)

連絡先 ☎0424-72-6206(瀬戸井)

〈We大阪の会・兵庫の会〉

◆九月九日(日)、神戸学生青年センターで、合同の例会。「地球はここまで汚れている―清掃工場から出ているダイオキシン?」のテーマで、宝塚市議の広田陽子さんを招いて。

広田さんの話はもちろん、参加者の多彩さでも面白い会でした。小児科医の立場からの発言、神戸ゴミ問題連絡会を作っておられるお三人の方、長年家庭科でこういうことを指導してこられ、現在いろいろな市民運動にかかわっておられる遠藤さんの話、吹田市では、ゴミ処理が民営だったのをわたしたちが戦って公営に切り替えさせたのよ。ところが今また、民営化(他の自治体、宝塚市も)しようという動きはもつてのほか」と力強い発言の飯田しづえさん。ともすれば硬い話し合いになるところ、チャ―リーとヤマケンのせつけんコンサ―トが入り、ずっとリラックス。岩瀬さんの司会はこの会にぴったりでした。

私は索引のことなどで頭がいっぱいで大阪

と合同の会とはいえ、すっかり大阪の方におんぶにだっこで申しわけなかったと反省。その分参加者の方がもり上げて下さいました。

次は十一月二十四日(土)二時~五時、神戸北須摩文化センターで。名取さんの映画と講演を企画している一人の主婦がいますので、We兵庫も参加し、索引を売れたらな、と思います。

〈We100号記念索引づくりから〉

(西本和代)

九月八日(土)最後の編集作業をしました。

参加者六人、思ったより時間がかかるな、きょうは帰れるかしら。早く家に帰りたい。誰がこんなことしようという出したの! 楽しみながらも、ぐちもちらほら。編集後記を書きながら、「改訂版を出します」と断言してはいかんぞ、クギをさされ、と一語一語選びながら……。みなさんになんらかのお役に立てる索引であることを祈りつつ! 前号(14頁)でもお知らせしましたが、A・5・64頁、予価五百円、送料実費、十月末完成します。

問合せ先 We兵庫の会 相川美和子(657神

戸市難区鶴甲4-6 鶴甲コーポ23-402)

西本和代(655神戸市垂水区狩口台4-24

☎078-781-9427)

泉

★★★★★★

この頁はあなたと
私の情報交換の場
小さなスペースで
すが、ご利用くだ
さい。

◆緊急シンポジウム

◎出生率低下—女たちは発言する

「プログラム」

第一部 基調発言—丸本百合子（産婦人科
医師）

問題提起—樋口恵子（大学教授／評論家）
堂本暁子（国会議員）・ヤンソン由実子（フ
リージャーナリスト）

第二部 会場からの発言

日時 十月二十日（土） p.m. 六時～八時四十
五分（時間厳守）

場所 家の光会館（JR飯田橋駅西口から
外堀通りを市ヶ谷方向に徒歩五分） 七階

☎03-266-9054

参加費 千円（予約なし）

問合先 「女の人権と性」実行委員会

☎03-985-3508&03-358-1058

◆原発とめよう／東京行動'90 ニュース

「十月を脱原発月間に」

十月二十八日は、パレード・駅前パフォーマ
ンスだ！（山手線全駅目標） 実行委員募集中

問合先（代表）反核パシフィックセンター
東京 ☎03-815-1648 FAX03-815-9325

◆講演会のお知らせ

◎結婚改姓を考える会十一月例会

『楽しくやろう！ 夫婦別姓』

東京で活躍されている、夫婦別姓の法制化を
実現する会の福島瑞穂弁護士講演会。

日時 十一月十日（土） p.m. 一時半～四時半

場所 神戸学生青年センター ☎078-851-
2760 阪急六甲下車北へ二分 託児室有り

参加費 七百元

主催 結婚改姓を考える会

問合先 〒650 芦屋市若宮町六一・二階南
☎0797-38-0429 緒方まで

◆記録映画

◎『世なおし準公選』

この映画は第三回目の区民投票を終えたば
かりの中野区教育委員会にカメラを持ち込
み、その開かれた教育行政を取材すると共に、

「日の丸」「君が代」の強制で揺れる沖縄、「準
公選」条例制定にあと一步の運動を展開した

大阪・高槻市のケース、「準公選」を全国に
広める発信地ともなった東京・調布市での傍

聴活動などを記録したものである。

（チラシより）

十六ミリ・カラー・五十七分

販売価格三十五万円 貸出料三万円

問合先 ㈱シグロ 〒150 東京都渋谷区桜丘
二十九ノ二十四 秀和桜丘レジデンス三一
六 ☎03-770-8363

「世なおし準公選」記録映画製作委員会

〒182 調布市緑ヶ丘二ノ十八ノ二十二（前橋
弘子方）☎03-309-3226

◆資料紹介

東京都より女性労働に関する資料が作成さ
れました。

資料名 (1)東京の女性労働事情（家族的責
任と就労に関する調査報告）・(2)ブックレ
ット雇用平等を考えるシリーズ①～④

編集・発行・問合先 東京都労働経済局労
政部婦人労働係 〒100-81 千代田区丸の内
三一五一 労働組合課婦人労働係 ☎03-
212-5111 内線31-235 担当 大日方・高橋

◆「90 We 秋のつどい」を開きます！

シンポジウム

「男を変える、女が変わる」

～男女で学ぶ家庭科新時代に～

国連婦人の十年以降、女たちは蛹から蝶へ美しく変身しました。

誘われるように、男たちもまた、男の解放、男の自立に目覚めつつあります。

折しも、日本の歴史始まって以来はじめて男の子が家庭科を必修で学びます。

そうです。三年後から中学校で、四年後から高等学校で、男女が共に家庭科を学ぶのです。

家庭科の男女共学をデコに、日本の男を変えられることができるでしょうか？

女が変わることによって、男が変わる。男が変わればまた、女も変わります。

21世紀が、男にとって、女にとって、幸せな世紀となるかどうか。

それは、私次第、あなた次第。晩秋の午後、じっくりと話し合いませんか！

＜シンポジスト＞

○佐藤洋子：「男の子には、こんな家庭科を」

朝日新聞記者、「男に聞く」連載中、新刊に『男の子の育て方』

（教育史料出版会）

○原 健：「私の中に生きている家庭科」

松本市共立病院勤務、長野県立梓川高校で男女共学家庭一般を

学んだ一期生

○福留美奈子：「男女に教えて私は変わった」

都立田園調布高校教員、都立農業高校で家庭一般を男女に教えた

○諸橋泰樹：「男は、どう変わりたいのか」

成城大学大学院生、Weに「男性学への契機」連載中、共著に『女性雑誌を解説する』（垣内出版）

＜司会＞

○半田たつ子：「We」編集長

とき：90年11月25日（日）午後1時半～5時
ところ：新宿区婦人情報センター

新宿区荒木町16 ☎03-341-0801

都営新宿線（地下鉄）曙橋下車5分

出口：A4、標識あり

参加費：一〇〇〇円（含資料代）

問合せ先：ウイ書房 ☎03-320-1380

「私は変わってきたのに、パートナーはちっとも変わらない」と嘆いている方

「変わりたいけれど、そのイメージがつかめない」とモヤモヤしている方

「指導要領が変わったばかりに、男の子にも教えないやならなくなった」と溜息をついている方

あなたの周りに、たくさんいらっしやることでしよう。

家庭科に関係がある方も、ない方も、この際、みんな誘って、思いっきり語りましょう。

家庭科新時代は、最もホットでナウイ問題と同じ地平に拓かれるのですから……。

十字路

〈埼玉〉見事な折り鶴並ぶ

浦和市立三室中（毎日9／10）

八日に行なわれた浦和市立三室中学校の第十一回文化祭で、一年生二百八十八人が十四万六千羽の折り鶴を使った展示「翔べノ鶴よ」を行い、訪れた父母らも驚きの声をあげていた。

この展示は、最近のお金のかかりすぎる文化祭を反省し、折り込み広告の紙で鶴を折ることで廃物利用を試みた。同時に、社会などで習う人口統計や歴史の中の大きな人数を実感のわく鶴一羽一羽にたとえたユニークなもの。

「空き缶はごみではない」各メーカー社長に公文書（毎日8／31）

現在、市販されている清涼飲料水のほとんどの缶には「あきかんはくずかごに」の文字入り絵柄付きマークが表示されている。こうしたアルミニウムやスチール、鉄製の空き缶は各市町村で分別収集しているものの、しばしば燃えるごみに混入。ごみ清掃工場の焼却炉は、溶けたアルミがタケノコ状にたまるなど炉がストップするほど支障が出る。この空

き缶対策に頭を痛めている越谷市は、市民グループに売上金の六〇％の補助を出すなどごみの再資源化を進めている。こうした最中、島村市長は「鉄、アルミなどは貴重な資源。空き缶はごみではない」と主張。全国清涼飲料工業会に加入する大手メーカー三十社の各社長あてに、空き缶を再資源として消費者意識を高める表示に改める内容の公文書を今月二十七日付で送った。

（協美智子）

〈愛知〉医療事故防止、被害救済へ 主婦が呼び掛け市民組織（中日6／6）

医療事故や医療被害の相談をボランティアで担当してきた名古屋市の主婦、辻本好子さんが、医師から十分な説明を受けて納得、同意した上で医療を受ける「インフォームド、コンセント」の重要性を痛感、弁護士や医師らに呼びかけてグループを結成。医療事故の防止や被害救済を目的に九月から本格的な活動を始めた。

授産所製品に常設ショップ、名古屋に初オープン（中日9／11）

身体障害や知恵遅れの人たちが働く授産施設の製品を一手に扱う販売店が十月六日、名古屋市名東区牧の里の西友高針店でオープンする。愛知県内の施設の製品をそろえる予定

で、県単位の大規模な授産施設製品の常設販売店は、全国でも珍しい。関係者は「店を拠点に、企業に負けない価値ある製品を提供していきたい」と、同情に頼らない「市場参入」に意欲いっぱいだ。

（高橋和江）

〈岐阜〉白熱の是非論議―長良川河口せき建設問う岐阜市で初の公開シンポジウム（岐阜9／9）

一昨年七月に着工されたものの、全国的に建設の是非論議が高まる長良川河口せきが県民にもたらすものは何か。建設推進派と反対派が初めて一堂に会した公開シンポジウム「改めて問う長良川河口せき」（県地方自治研究センター主催）が八日、岐阜市で開かれ、会場いっぱい約七百人が参加した。三時間余にわたった議論は、推進派、反対派それぞれに治水、利水、塩害、環境保護の問題など時間を二分して行なわれた。

子供の人権を守れ―岐阜市でネットワーク発会式（岐阜9／12）

体罰や細か過ぎる校則など、行き過ぎた管理教育に疑問を持つ親や教師たちによる「子どもの人権ネットワーク」の発会式が、十一日岐阜市で開かれ、岐阜市周辺や大垣市などから約三十人が参加した。

（高橋和江）

〈長野〉反「性暴力」語り合う―「女のからだ」考えるグループ合宿（朝日9／6）

女のからだについて語り合い、女のからだから世の中を見よう、という「女のからだから合宿'90」が、八月三十一日から九月二日まで、長野県北安曇郡美麻村の遊学舎（美麻文化センター）で開かれた。全国から女性ばかり約百七十人が参加。「反性暴力」を大きなテーマに、四十を超える分科会を開いた。そのうちのひとつ「子どもへの性的虐待を考える」には約四十人が集まった。子どものころに親やきょうだい、顔見知りから性的な虐待を受け、それが深い傷となって残っている人が何人もいた。みな、親にもだれにも言えず、ずっと自分の胸の中にしてきたという。「小学校の一、二年のころ、担任教師から性的虐待を受けた」という女性は涙をボロボロこぼしながら「自分には落ち度がなかったのだ、と思えるようになるまで二十年かかりました」と語った。被害を受けた女性たちが苦しみを語り合い、いやせる場所が必要なることを、参加者は痛感した。（宮崎春美）

〈京都〉「事故、想定した対策を」―府内通過の核燃料輸送（毎日9／4）

京都反原発めだかの学校（佐伯昌和代表）

は三日、府内を通過する核燃料輸送について、府原発防災計画に対策を盛り込むことを申し入れた。同グループによると、府内は福井県・若狭湾にある関電の各原発、島根県の中国電力島根原発などへの核燃料輸送ルートに当たっており、一昨年度には四十六回、府内通過があった。八月二十九日未明にも島根原発に向けた核燃料積みトラック十二台が府内の名神高速を通った。同グループは「近畿自動車道敦賀線が来春、舞鶴西ICまでつながるなど、道路整備に合わせ、府内の核燃料通過はますます増えるはず」として、輸送中の事故を想定した対策を府原発防災計画に盛り込むとともに、輸送の詳しい実績▽府内市町村の放射線防護資材の配備状況などを明らかにするよう、同時に求めた。（塚崎美和子）

／25）
〈奈良〉戦争体験談 戸惑う子たち（朝日8

戦争を風化させてはならないと、平和の大切さを考える催しが各地で開かれている。桜井市谷の桜井小学校の四年生が「戦争体験を聞くつどい」に参加した感想文を書いたが、「戦争は怖いから起きてほしくない」というものの、どう受け止めてよいかわ、戸惑う子供たちが多かった。三重県の飛行場で、特攻隊

をめざしてグライダーの飛行訓練中に終戦を迎えた田中正紀教頭は「今の子供が持つ戦争観に大人がどれだけ迫れるかが問題。教師も児童も戦争を感傷的に語るだけに終わる傾向がある。長い時間をかけて段階的に、子供たちに命は一つしかないという認識を持たせていくしかない」と話している。（乾 庸子）

〈沖縄〉このままでは村がつぶれる―恩納村リゾート条例制定へ（沖縄タイムス9／9）

恩納村では本土、外国、県内の大資本のリゾート計画が相次ぎ、ホテル、マンションなどが次々と建設されている。しかし、国、県はリゾート開発に伴う基盤整備にはほとんど対応せず、民間資本の開発まかせ。村の担当者は「リゾートに対する国、県の無策が企業の土地買い占め、地価高騰、水不足などの原因をつくった」と厳しく批判している。「このままリゾートの乱開発を許せば、村がリゾートにつぶされる」として村当局は全国に先駆けた「リゾート条例」の制定準備を進め、十五集落で説明会、線引き作業などを行ってきた。住民の間にも「このままでは村民が村に住めなくなる」との危機感が広がり、全集落が村のリゾート条例案に賛成している。

（大嶺麗子）

★65歳以上が、12%、1488万人

総務庁は14日、敬老の日にあたる15日現在のわが国の高齢者人口推計値を発表した。65歳以上の人口は1488万人、総人口の12.0%を占め、人口、割合とも過去最高を記録。この1年間に総人口の伸び(41万人)を大きく上回る59万人も増え、高齢化社会が急速に進行していることを裏付けている。

急速に進む人口の高齢化対策を急いでいる日米両国で、民間主導による初の研究機関「国際長寿社会リーダーシップセンター」がそれぞれ10月、発足する。厚生省が14日明らかにしたもので、寝たきり老人や痴呆症の増加など共通する課題に対して、医学をはじめ政治、経済、文化など広い分野でスクラムを組み、共同研究する方針だ。(9.15日付 読売)

★痴呆症の妻との離婚認める

長野県更埴市の会社員(42)が老人性痴呆症になったアルツハイマー病の妻(59)を相手に、離婚を求めている民事訴訟の判決が17日、長野地裁で開かれ、菊地健治裁判官は「被告である妻との間の婚姻関係は、アルツハイマー病により破局していることは明らか」として原告の離婚請求を認めた。しかし、アルツハイマー病が民法で定めた離婚理由となる「精神病」にあたるかについての判断は避けた。

判決について被告側の後見監督人は「やむを得ない判決。しかし判決の内容を安易に一般化して、妻が老人性痴呆症になると夫は離婚を請求できるというように単純化されることは許されない」とし、一方原告側弁護士は「今まで原告が妻に対し、夫として期待される最大限の看護をしてきたこと、今後の看護に不安がないことが認められた結果」としながらも「夫はまだ42歳で人生の折り返し点という特異なケースであり、必ずしも一般化すべき事案ではないと思う」と話している。(9.17日付 朝日)

★在宅老人福祉、市町村で進まず

厚生省は12日、市町村、都道府県に対す

る初めての老人在宅福祉調査結果をまとめた。寝たきりや、ぼけ症状のある老人を対象に入浴や食事を施設で提供するデイサービス事業は、全市町村の8割が行っており、短期間施設で預かるショートステイ事業も2割が未実施と、在宅福祉サービスが厚生省の掛け声とは裏腹に進んでいない実態が明らかになった。

同省は、この結果を「平成元年度老人保健・福祉マップ」としてグラフ化し、実施率の低い市町村に奮起を促すとともに、意欲的な在宅福祉事業を推進するため、平成3年度予算に新規補助金を30億円計上し、テコ入れを図る方針だ。(9.13日付 読売)

★校則など点検指示

文部省は29日までに、全国の都道府県教委に対し、生徒の個性を尊重、常識にかなった指導を目指す教育ができているかどうか、各高校ごとに問い直す3項目の点検をするよう指示した。

それによると、生徒指導の留意点として「生徒の個性尊重」「国民、保護者の常識にかなった指導の実践」が掲げられ、①生徒との信頼関係、保護者との連携を保つように心がけているか ②教師間の意思疎通を図り、指導では安全に配慮し、体罰など行き過ぎがないよう徹底しているか ③校則の見直しを進め、教師がいたずらに規則にとらわれることなく、生徒が自主的に守るようにする指導が行われているか—の3項目。下田重敏・同省高校課指導係長は「一連の事件を踏まえ生徒指導の点検ポイントを申し上げた。各都道府県教委にはあらゆる機会を通じて指導の見直しを求めている」と話している。(8.30日付 朝日)

★単位制都立高校、来春スタート

学年をなくし、卒業に必要な単位を取得した時点で高校卒業の資格が得られる「単位制高校」を現在、新宿区山吹町に(地上7階、地下1階)建設中。校舎はコンピュータで管理、生徒の出欠のチェックや単位

取得の状況などの情報を磁気カードで処理する予定になっており、全国でも例がない「インテリジェントスクール」としても注目されそうだ。(8.25日付 読売)

★出生率向上へ「子育て減税」

出生率低下の対応策として、厚生省は初の「子育て減税」に取り組む方針を、27日までに固めた。子どもがいる共稼ぎ家庭に対する所得控除制度を新設するほか、子どもをもつ家庭が住宅を買う際の優遇措置や土地を児童公園などに提供した場合に相続税などの納税免除などを考えている。わが国では、昨年度から16歳から22歳までの子どもに対する「教育減税」が実施されているが、子育てを目標にした減税は初めて。今回の税制優遇措置は、子どもを持つ家庭を支援するだけでなく、子育てのために家庭に引きこもる女性を、貴重な労働力として確保することも目指す。(8.28日付 朝日)

★「家庭と仕事の両立」助けるサポート110番

女性が働く時に、障害になるのが育児、老人や病人の世話、家事の3つといわれる。人手不足が深刻化する中で、女性の家庭と仕事の両立を支援するために、労働省は来春から、保育所や介護、ベビーシッターなどに関する相談、情報を提供する「サポート110番」というサービスネットワークを全国的にスタートさせる。女性の働く環境づくりと女性労働力を積極的に活用することで、人手不足を解消する願いが込められている。(8.29日付 朝日)

★女性にも家族手当

「家族手当の支給対象を『世帯主』に限り、事実上、女性従業員への支払いを拒否しているのは男女差別に当たる」などとして、日産自動車の女性社員37人が同社を相手取り、本来支給されるべき家族手当や慰謝料など1200万円余の支払いを求めている訴訟が、5日までに東京高裁民事16部で和解

した。日産が和解金130万円を支払うという内容だが、この前提として、会社側は家族手当支給規定を見直して「世帯主」条項を撤廃、実際に家族を扶養していれば、男女を問わず、手当を出すことにした。一審の東京地裁は昨年1月、女性従業員側の請求を退けたが、1年半後に、逆に原告側主張を大筋で認める形で決着した。(9.6日付 朝日)

★米人代理母、日本人ベビー4人出産

米ロサンゼルスで大手の代理母あっせんセンターを開業しているウィリアム・ハンデル弁護士は7日、日本ではまだ認められていない代理母によって、これまでに日本人夫婦4組の子供4人が誕生している事実を明らかにした。このほか、妊娠を試みている「待機組」が9組あり、子供に恵まれない日本人夫婦による米国での代理母利用は今後、ますます増えそうだ。

日本人夫婦の場合、夫婦間で体外受精した受精卵を使用するため、代理母は出産までの間、単に子宮を貸すだけとなり、生まれてくる子供は全くの日本人。代理母が出産すると、医師は日本人妻名義で出産証明書を書くため、法的にも問題がないとしている。代理母への支払いは1万ドル(約140万円)、夫婦が支払う費用の総額は4万2500ドル(約600万円)。(9.9日付 読売)

★根絶できぬ花嫁あっせん業

フィリピン人女性を海外に花嫁として紹介する仲人あっせん業が、比政府から全面禁止されて丸2ヵ月。花嫁の通信販売版として批判を浴びてきた欧米向けの「メールオーダー花嫁」はむしろ、日本の農村花嫁縁組に代表される即席見合い方式も、金銭仲介が伴うかぎり違法となった。しかし、業者側のあの手この手のしり抜け策に、この間の摘発はわずか一件。「女性と国家の尊厳」を守るため、アキノ大統領自ら音頭を取った窮余の措置も、前途は多難のよう。(8.27日付 朝日)

●編集後記

★100号記念号——編集部では創刊号から100冊並べて使っていますが、検索に手間どっています。索引が出来るのを待ちかねております。

Weが100冊全部、揃っている場所、おしえて下さい。図書館でも、公民館でも、閲覧ができれば個人でも、全国規模で把握できれば、索引を見て手に取りたいという方のため。もちろん在庫のある分は、お頒けします。(青木)

◆連休の二日間、「100号記念」の座談会のテープ起こしのため、ワープロの前に縛りつけられる羽目になり、溜息と共に始めたのが、次第に一言一句も漏らさじと夢中に。三時間の話し合いの最も白熱した最後の一時間を担当できたことに感謝。編集部に入って、

やつと二年半、でも、創刊以来のご縁。Weの100冊がそのまゝ私の歩みに重なること、しみじみ思う。(稲邑)

♣ただでもくもくと働いて、家族に見守られながら死んでいった祖父や祖母や曾祖母、ただそこに在るだけでどんなに私たち姉妹に豊かなものを与えてくれたのか、自分の想いに重ねながら、「私のすめる一冊」を書きました。

フォーラムの記録が次々と届いて、ほとんど参加していない私は、今その感動を味わっています。増刊号をお楽しみに。(河村)

♥We出版100号おめでとうございませう。きょうから200号にむけて前進・前進。

最近よく、老人性痴呆症の

ことなどテレビでやっているが、美しく年をとることはむずかしいことですね。自分一人の問題ではないように思います。

だれでも年はとります。衆しく、有意義に年をとるには、今までみたいにボーっとしてたらだめですね。(渡辺)

★ささやかな雑誌が、新しい読み手・創り手の息吹きによって活力を得、ここまで続けられたこと、感謝でいっぱいです。100号記念として増ページしましたが、「高齢化社会がやってくる」のテーマは、深く掘り下げる紙幅がありませんでした。来年度ひき続きこのテーマを取り上げます。

★北欧ソアの方たちは、引き続き文集・教材用スライド・ビデオ製作に大張り切り。楽しみです★次号は「マス・メディアは何処へ」です。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ワイ書房へ)

90/4 '90年代、学校を変えよう (¥567)

90/5 生、そして死に迫る教育 (¥567)

90/6 「家庭生活」をどう語る (¥567)

90/7 「環境・資源」を見つめる (¥567)

90/夏増刊号 家庭科が変わる

—情報化のうねりの中で (¥721)

90/8.9 消費者教育は、何を指す? (¥567)

90/10 地域をよみがえらせる (¥567)

86/1 くらしの文化を探る (¥530)

87/1 くらしの論理を創る (¥530)

87/2.3 明日一人はみな、成熟に向かつて (¥530)

88/10 食と環境といのち (¥530)

88/11 いのちを医療に任せていいのか (¥550)

89/8.9 地球市民として生きる (¥567)

89/10 食べものから地球を見る (¥567)

89/11 からだーその不思議 (¥567)

新しい家庭科—

Vol.9 No.8 1990年10月20日発行

定価567円(本体550円+税17円)送料共

年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)

編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ワイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎・FAX03(326)1380 郵便振替 東京6-59867

第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292

印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

家庭科男女とも必修!
共学の授業づくりにWeが贈る

家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編
男女共修の家庭科の授業で、
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編
2060円 千310円



●男女で学ぶ新しい家庭科
—京都における歩みと実践—

森 幸枝
1339円 千260円

●消費者教育の創造

宮坂広作
2060円 千260円

●教室のミニ舞台から 児玉澄子
—こぼれ話20—

1350円 千260円

●若いいのちの像 児玉澄子
—私のカウンセリング入門—

1339円 千260円

●子どもって不思議 長谷川孝
—学ぶことは生きること—

1339円 千260円

●人間って不思議 半田たつ子
—一つの視角—

1545円 千310円

もしかしたらちいさなじゅくはユートピア
●私塾霞国語教室風景

武田秀夫
1751円 千260円

●子ども発、大人へ
—いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」& 小沢牧子
1339円 千260円

●らくだが翔んだ 平井雷太
—教育の常識の非常識—

1236円 千260円

＜羽生楨子詩集＞

●木、鳥、娘たちとわたし
1030円 千260円

●絵 III
1030円 千260円

●夢運び屋
1545円 千260円

最新刊

●花・野菜詩集

1648円 千260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 326-1380 振替 東京 6-59867